
お嬢様と執事様

炉濤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お嬢様と執事様

【Nコード】

N7415Y

【作者名】

炉濤

【あらすじ】

南條来人は気付けば見知らぬ無機質な部屋にいた。

まったく知らない景色に困惑しながらも『ふっきた』南條は部屋を飛び出し、そこが巨大な謎の施設だと知る。

その施設で出会う場違いなドレスを纏った少女ディエナと共に南條は施設からの脱出を図る。

だが、その行く手を阻むバケモノ達。

そして、巻き込まれる南條達。

パндеミック×ファンタジー的な感じで。

昔「iのべる」という携帯小説サイトで書いてたモノを書き直して
るものです。

・11／11／21―逃走編開始。

1. 始動

まず始めに確認しておかなければならない事がある。
知っているか否か、だ。

知らないと言うのであれば心して掛かるが良し。知っていると
言うのであれば新たな過程に期待すれば良し。

1. 始動。

南條来人は単純に『拉致された』と疑っていた。

何が起こったのか、誰がこんな事をしたのか、答えを求めるよりも
前にまずそう思った。そして次に、何をしていたか、と幾日分前の
物か分からない記憶を掘り探した。が、見つからずに唸る他なかつ
た。

と、言うのも。

「ここは何処だっただ……」

コメカミを潰されているかの様な痛みが走り続ける頭を出来るだ
け刺激しないよう起き上がり、辺りを見回せばそこは南條の全くし
らない場所だった。

正確には部屋、畳六畳程の無機質で、かつ近未来的雰囲気を感じ
させる眩いばかりに真っ白く輝く空間。ここはそうだ。

部屋には近づいたら斜めにスライドして開きそうな扉が一つ。そ
の他にはまったく何も無い。

記憶を失っているような感覚は少なくとも無い。一応、一定時間
前の短い期間の記憶がなくなっている様な不思議と浮かない気分で
はあるが、状況が状況だけにそれが本当に記憶云々によるモノと
は言い切れない。

（何がどうなってやがる……？　ここはどこだっただよ？）

いつの間にか意識を失っていて、気付けば全く見知らぬ謎の部屋。

拉致された、と疑ってもしかたがない、と言い切れる程の状況である。

ここでまず何をすべきか。その答えは目の前にポンと置いてある。慌てふためいて騒ぐより、目標があるのだから動いた方が無駄は省けるだろう。

南條はそういう男だった。

生まれつきの明るめの茶髪はやたらと人目を引き、これまでも南條が望まない嫌な刺激を引き起こしてきた。若いうちに引き起こされる想像の容易いことであるが、そんな『つまらない』刺激の数々のおかげか、南條は何か異常が起こった場合でも冷静でいれる体質を得ていたのだ。

こんな状況だというのに気だるそうに後頭部を掻きながら目の前のその扉へとゆっくりと歩いて近づく。

扉の一步步前まで来たところで、見た目通りの動作で扉は自動的に開いた。

——と、同時、その先に見えるはずだった真っ白い廊下、よりもまず腐った肉と嘔吐物を混ぜた様な腐臭が南條を襲った。

吐き気を催す程の匂い。その原因は明確だった。

まるで、待機していた、と言わんばかりに扉があったその場所——つまりは南條の目の前——に、一つのドス黒く淀んだ影があった。「……ツクせえ!!」

突然現れた影と漂う腐臭に驚き、自然とそう叫んで南條は突然として現れたその影を避ける様に身を引いた。

影は揺れる様に歩き、少しばかり遅い速度で南條の目覚めたこの部屋へと侵入してきたかと思うと、歩幅に合わせながらゆっくりと方向転換し、南條と向き合った。

「あああああああ、……、ああああああアアアああああアああアアあああ」

影はゆらゆらと左右に揺れながら一歩、また一歩としっかり無機質な床を踏みしめて南條へと迫ってくる。

「お、おい。なんだよお前……」

鼻をつまみながら、嫌そうに南條は言う。

牛糞に顔を自ら近づけて嗅ぐ臭いが近づいてくるのが恐ろしくて、南條は視線を斜めしたに落として、決して目の前の影には視線をやらす、迫る影に合わせて一步、また一步と後退する。

（すげえぞ、この臭い！ 強烈なんてレベルじゃねえっての！！）
うげえ、とこみ上げてくる吐き気に堪えながら、

「なんだよお前」

嫌そうに訊く。が、先程も聞いた様な気がして、返事が来ていないことに気付いた南條は面を上げて影に訝しげな表情で影を確認する。

「……、なんだよ。おっさん」

禿面のサラリーマン、中間管理職を連想させる様な中年男性だ。

「おおおおおお、アアアオああああオおおおおああ」

その男性はまともな人間とはとてもじゃないが思えない呻き声を上げながら、ふらふらと南條に近づいてくる。

血走った目に、散らかす様に口元に塗れたギラギラと光る涎が不気味さを演出している。

どうみても、ジャンキーだった。

「なあッ！？ 薬でもやってんのかよおっさん！？」

白目からたまにチラつく黒い瞳が南條を見下ろす。半分だけ開いて皮脂を混じらせてギトギトと嫌に輝く涎が飛び散って南條に掛かりそうになる。

南條がいくら呼びかけようとも、男性はその不気味な様を振りまきながらヨタヨタと南條に迫るばかりでうんともすんとも答えはしない。正直その様は、聞こえていない様にも見えた。

耳が聞こえない、と言うよりは脳が認識していない、状況や様子から言ってそっちの方が正しいだろう。

「きったねえな！ くっそ！」

何にせよ、ジャンキーなんかとは関わりたくない、と南條は男の

脇を抜けてさっさとこの部屋から出よう、と考えた。

今見ている限りでは、男性の動きは遅い。とても、と言っても過言ではない程に異様に遅かった。これならばサツと横に抜けて走れば良い。

「ああああああアアアああアああアオオオオオオオ
ああ」

男性は相変わらず単純な動きで南條へと迫ってくる。

一歩、近づいてきたそのタイミングを南條は見計らって走り出した。

身を屈め、小学生時代を思い出させる様な全力での走りを取った
これでこんな悪臭とはおさらばだ、素直に、それこそ小学生の様に喜んだ。

が、その時だった。

男性の横を駆け抜ける丁度その時、体勢を低くした南條の目の前に、ボロリ、と肉肉しい何かが落ちてきて、ビチャリ、と床にその先を衝突させた。

その肉肉しい何かは細長く、その先を地面につけているが根元は男性へと続いている。

反射的に、南條は理解するよりも前にその肉肉しい何かを目で辿った。辿る他の選択肢がなかった。それ程のモノが目の前にあると脳のどこかで理解していたのかもしれない。勿論、本能も理性もそれを拒んでいたのだが。

「……あ、ア？」

辿りながら、既に行き着いたというのに視線は泳ぎ、現実の理解を拒否する。否定する。

肉肉しく 長いピンク色のそれは男性の横っ腹から溢れる様に飛び出し、垂れ下がっている。その先はドス黒く、またやたらと赤い色で無機質かつ異常に明るい床を汚している。

——鮮血、ではない。そんな新鮮味の感じれる赤みはまったくない。赤と例えるのが億劫になる様な赤い跡が床に引きづられて尾を

引いている。

「は？ え、ああ!？」

南條は思わずそんな頓狂な声を漏らした。

言わずもがな、男性の横っ腹から垂れ下がった、それを、途中で途切れた腸だと気付いたからだ。

気付いた、そうは言っても状況を把握するまでには至らないし、何故目の前にこんなモノがあって、どうしてこの男性はこんな姿なのか、と処理しきれない事柄が多すぎて南條の思考能力は一旦活動を停止してしまっていた。

「おおおおオオおおおああアおおオアアアあああああ」
動きまで止めてしまった南條の頭上から、男性の腐臭と共に『腐った』手が伸びてくる。

(な……、なんだよコレ……)

本来そうであろう、そんな有り得ない空想上の出来事からワンテンポ遅れて、今まで腐臭に急かされていた吐き気とはまた違う、異常な程の量の嘔吐物が巻き戻される様な吐き気が南條の全身を駆け巡り、南條はえづく。

「があっ、げっ……げほっ！ ごほ！」

思わず全身に入っていた力が抜け、地に膝を着いてしまう。

結果、降りかかってきた男性の手を回避したのだが南條はそれに気付くはずもない。

なんとか吐かずには済んだのだが、あんなモノを見た後では南條も顔を上げる気にはなれない。目を上げるだけでも臓物が目に入る可能性がある、そんな状況で顔を上げるなんてとてもじゃない。

「な、なんだよ、畜生」

吐き戻したわけではないが、口をティーシャツの袖で拭う。

動きたくなかった。このままただ床を見つめているだけでよかった。

気付けば全く知らない質素な部屋にいて、出ようとすれば臓物丸出しのジャンキー中年男性に出会ってしまう。

なんだこの状況は、と呆れた。

なにやってるんだ俺は、と呆れた。

そもそも、なんでこんな状況下に自分が置かれなくてはならないのか、と呆れた。

そう思うと、気持ち悪さや呆れよりも、まず苛立ちが募った。

何を惚けているんだ、とっとと立ち上がって目の前の意味不明なおっさんをぶっとばして先に進んで真実を確かめろ。自分をこんな事にした奴を叩きのめしてやれ。

曲がった考えだ、という自覚はあった。

(ああ、くっそ)

今まででも似たような経験はあったのかもしれない。勿論、数あるソレは思い出せる様なモノではないのだが。

(めんどくさい。ほんっとめんどくさい。なんだよ畜生。ああ)

様々なことが頭を駆け巡った。

自覚はなくとも、この状況が『命の危機』であることを察していたのだ。そうして走馬灯の様に頭の中で溢れた考えなり思いなりは全て南條の『ふっきれる』までの道筋になっていた。

「ふざけんなよ畜生が！」

自身に気合を入れる様に叫び、南條は意気込んで立ち上がる。

すぐ目の前には腐臭と共に禿面の中年男性の歪んだ顔。見れば見るほどそれは人間の表情ではないと気付くが、ふっきれた南條にそんな事は関係なかった。

ただ、目の前にいるそいつをぶっ飛ばせ。感じた嫌悪感の倍返してやれ。

南條は腐臭漂う中でも構わず、思いっきり深呼吸して見せた。男性の手が目前まで迫っているというのに、だ。

「ああああアアアアアアア、オオオオああああアオおおおおあああ」

部屋には男性の汚い呻き声のみが蝕むように広がる。そんな部屋を覆すかの様な大声で、南條は声を上げた。

猛獣の雄叫びをも連想させるソレは目の前ぼ男性の呻き声は勿論掻き消したし、腐臭さえも吹き飛ばしたかと思う。

だがそれよりも、部屋には鈍い音が印象的に轟いた。

ゴツン！ とありふれた衝突音が弾け、部屋の中で短く反響した。南條の強烈な頭突きが男性の額を撃った音だ。

南條の額は赤みを持ち、男性は――大きく後方に吹き飛んだ。そのまま入り口付近に尻餅をついてゆっくりと立ち上がろうとする仕草を見せる。

「ふざけやがって！ マジで意味わかんねえっての！」

一撃食らわした事で満足、とまではいけなかっただろうが、南條はそれで『ふっきれた』のだ。

よたよたと、生まれたばかりの小鹿の様なおぼつく足取りで立ち上がろうとする男性に吐き捨てる様な言葉だけを置いて、南條は扉の向こうへと飛び出したのだった。

2. 接触（前書き）

南條来人、謎の施設を探索

2. 接触

2. 接触。

「まったく。こん中は一体どうなってやがるんだ？」

一人訝って不満げにそう呟くのはミディアムヘアの茶髪に、整った顔立ちの青年南條来人だ。

いつの間にか見知らぬ部屋へと何者かの手によって運ばれ、あやふやな記憶の中で目覚めた南條は帰路を探して部屋から飛び出した。飛び出した先、その先、曲がり角を曲がった先、階段を上がった先、全てに見覚えはなかった。

どこに向かおうとも出口は見つからず、近未来的なデザインの真っ白な壁といくつかの小部屋が延々と続く通路をひたすら歩きまわった。南條がこんなここにいる以上は、何者にしろ『人間』がいなければ可笑しな話だが、それを肯定するかのように人間の影は一つとして見当たらなかった。

人影――思えば先程の中年男性。彼は何者だったのだろうか、と景色の変わらない廊下を歩きながら南條は考える。

思い出したくもないモノを見せられ、感じさせられた。異常なまでの腐臭に横っ腹から露出した千切れた腸らしき肉肉しい何か。そして呻き声にイカれた目。チラつくテレビの様に見え隠れした黒い瞳の不気味さは思い出しただけで身を震わしてしまう程の恐怖感を与えてきた。

（まるでゾンビだ。あれじゃ……）

思い出せば思い出す程、南條は眉を潜めた。

「はあ」

嘆息し、一度考えを切り替える。

もしかすればあの男性はただの薬中で、南條と一緒に偶然こんなところに連れて来られたのかも知れない。そう信じて考えを別の物に向ける。

先ず、何をすればよいか、だ。簡単、歩けば良い。何かを見つけたらそちらへと赴き、それに見合った行動をすれば良い。出口を見つけたら逃げ出す、人間を見つけたら話掛けて協力してもらう、といった具合にだ。

だから、南條はひたすらに代わり映えない景色の中を歩き続けている。

廊下の両サイドには部屋への入り口と思える斜めにスライドして開きそうな近未来的デザインの扉がいくつかならんでいるが、生きた人間がいればなんらかの行動を起こしてとくに部屋から出ているだろう、と南條はあえてその扉の先を見なかった。その先がまたどこかへと続く可能性だってあるが、南條が始めにいた部屋の出入り口であった扉とデザインは全く変わらず、ココに何か『実験的』な、『施設の』な雰囲気を感じ取ってからは、あの扉は個室だ、と思って時間を無駄にしない行動を取っているのだ。

ここがどこで、地上なのか地下なのか分からない状況で、やっと南條は一つの発見をする。

「……………あ、ど……………って……………よ」

不意に、聞こえて来たその『声』。いや、声とも呼べるほどにハッキリとは聞こえない。が、それは声だと南條は信じた。

「あ？ 声？」

どこからともなく聞こえて来た声に反応し、一応に辺りを一瞥するが相変わらずの光景が続くだけで何処かに人影があったりなどはない。見える範囲での可能性で言えば、廊下に並ぶ扉の先であるうか。

と、いっても廊下に並ぶ扉は見えるだけも一〇近くある。

それを一個一個開けて確認するよりは、

「誰かいんのかァッ!？」

顔を見る限りは外国人だ。

が、そんな事よりも、

「な、なんだよソレ……」

南條は部屋の光景を見て思わず絶句した。

部屋の大きさは南條が目覚めたソレよりも少しばかり広いように感じる。

部屋を中心にブロンドの少女が座り込み、血まみれの燕尾服を着た初老の男性を抱きかかえている。見るからにその血は初老の男性の物だ。少女のドレスにも鮮血がべつとりとこびりついているが、それも恐らくは男性の物で、少女に傷はない様に思える。

（な、何がどうなってやがる！？）

少女に抱かれる男性は明らかに『死んでいる』。手当てしても助からない状態、ではなく既に絶命しているのだ。勿論、南條は死体なんて見たことはない。が、それでも見て『死んでいる』と分かる程の状態だったのだ。

南條が鮮血の臭いに当てられ、考えをとめて金魚の様にただ口をパクパクと開いていると、不意に少女の顔が上がって、

「助けてよ……」

すすり泣く声でそう『命令』された。

少女の顔は精巧に作られた人形の様に整いすぎていて、良い意味で南條は同じ人間とは思えなかった。初めて芸能人を生で見たときのような気持ちがある状況ながら僅かに心を躍らせた。巻き毛の金髪は空気よりも軽く感じる程にふわふわ揺れていて、思わず手に取りたくなる。透き通った真っ白い肌は西洋人を連想させる青い瞳とブロンドによく似合っていた。

——一言、美女だった。

その潤んだ瞳に見つめられて、南條は思わず怯んだ。
そんな南條を急かす様に、

「助けて！」
美女の声が部屋に轟いた。

2. 接触―1（前書き）

南條来人、謎の施設内を探索。ブロンドの少女と出会う。

2. 接触―1

少女の叫び声で南條はハッと我に返った。呆然とした意識が戻り、白濁に吞まれていた視界が鮮明さを取り戻す。

「助けてよ……」

目の前のブロンドの少女は血まみれの男性を抱きかかえたまま、視線を膝へと落として弱弱しく吐く。それはもう、死んでしまうかと思う程に。

「あ、ああ。おう……」

困惑しながらも南條は駆け寄り、少女の側でしゃがみ込んで目線を合わせる。同時に、少女に抱えられる男性の死体から溢れる鮮血の鉄臭さが南條の鼻に付いた。良い思いなんかするはずもなく、南條は無理に意識から外す。

「お、おい。何がどうなってやがる……？」

目の前で俯き、ボロボロと涙を溢れさせながら泣く少女、そして抱きかかえられている謎の初老の男性の死体。

南條が必死に問うと、少女はその歪ませてなお綺麗な面持ちを上げて、訴えるように言う。

「ノーツが死んじゃったの……」

嗚咽交じりではあるが、しっかりと南條には届いていた。

（ノーツってのは、この死体か……？ この状況じゃそうとしか考えられないか）

間近にある死体からすぐに視線を上げて少女へと戻して、南條は問う。

「なんで……、その、ノーツ？ は死んだんだ？」

まずはこれだ。状況から見てこの少女も南條と同様に『いつのまにかココにいた』可能性が高い。現時点ではそうとしか考えられないくらいだ。そんな状況で少女も抱いているであろう「ここはどこ

か？」や「何故ココに？」なんて疑問をぶつけた所でまともな答えは期待できない。と、なるとまずは目の前にある一番目立つ問題からハッキリさせていけば良いのだ。

南條が問うと、少女はその華奢な身を僅かに震わせながら、

「バ、バケモノ、……が、」

「は？ バケモノ……？」

少女が吐き出した小さな嗚咽交じりの言葉に南條は思わず頓狂な声で返してしまった。それがこの状況に混乱し、困惑して落ち着けない少女の気に障ってしまったのだろう、

「そうよ！ バケモノよ！ バケモノがいたんだから！」

少女はすぐ目の前の南條に向かって苛立ちをぶつける様な必要以上の大声で怒鳴った。あまりの大きさに南條は一瞬だけ身を怯ましてしまう。

驚いた、正直に南條はそう感じた。

目の前の少女はこんな渦中においていかれているせいか、完全に弱りきっている。こうやって一応ながらの会話ができるだけマシだといえる様な状況で、未だ正気を失ってはいない。死体を抱きしめ、敵か味方かも分からない南條に助けを求めている。必死に自我を保ち、目の前に現れた南條に縋っている。恐らくは、

（こいつ……！？ この死体まだ生きてるとでも思ってたのか！？）

この少女は『ノーツ』とやらを助けたいがために南條に縋ったのだろう。

ノーツを助けたいがために狂っても可笑しくない状況でただ必死に助けを求め、——その他の記憶が混乱しているのだろう。だから『バケモノ』なんて『信じられない事』を吐いたのだろう。

南條もそう思っていた。

バケモノ、なんて空想上の生き物に過ぎない。ましてや生き物だとすら言い切れない様な曖昧な存在だ。

仮に現実存在するモノをバケモノと形容するとして、どんなモノが思い浮かぶだろうか。野生の猛獣だったり、狂ったサイコパス

だったり、考えればいくつかの答えを得る事は出来たのではないであろう。だが、それをまずこの状況でバケモノと表すのだろうか。

ひとまず、少女がノーツの状態に気付いているかどうかは置いておいて、南條は問う。

「バケモノ……って、なん、」

言いかけて、気付いた。

（あれか……！？）

そうだ、南條は先程まさにバケモノと形容できる存在と対峙したばかりだった。

臓物を露出した狂った様な中年男性。バケモノ、と例えてもなんら不思議ではない。

「ゾンビよ！ あんなの決まってる！！ 『ゾンビ』だったのよ！！」

（ゾンビ……！？）

南條は言われてみて嫌な記憶を掘り起こす。

僅かな瞬間での出来事、とても信じられる様な光景ではなかったがハッキリと思い出せる。あのイカれた表情にはみ出した腸。言われれば、ゾンビ、まさにソレだ。

が、『ゾンビ』なんて存在、まさにバケモノと同等のファンタジーな存在だ。映画やゲームで登場し、人を襲い喰らう生きる屍。

そんなもの、南條が信じられるはずがなかった。いくらそれらしきものを見たといえど。

（こいつはあのおっさんを見てゾンビだって思ってるのか……？）

少女は僅かに正気を保っているが気が動転しているのは確かだ。

そう考えて当然だろう。

とりあえず、と、

「分かった」

肯定する。相手を逆撫でしない。それがまず第一に必要な。そこまで考えれるあたり、南條は少なくとも目の前の少女よりは冷静だと言える。

続けて、

「逃げよう」

これ、これだけしか言えなかった。

少女より冷静だといっても南條も困惑しているのは事実だ。

全く知らない場所にいて、腸を垂らした男性に襲われかけ、死体を見る。こん状況でまともなままでいられる人間なんてそうそういない。

「とりあえずココから逃げよう。ここは何がなんだか分からない。だがよ、ゾンビなりなんりのバケモノがいて、人を殺すのは間違いないんだ。だから、命ある内に逃げよう」

あえて少女がかかえるノーツへとは目をやらず、南條は視線をしっかりと少女に突きつけて、くさびまで打って、そう言いきった。

南條がここに到達するまでで異常なモノはあの中年男性以外見ていない。少女の言葉のバケモノ、ゾンビを別と考えてもそんなモノと出会う分けがない。南條はそう思った。

だから、言い切った。

逃げよう。少なくとも南條と少女は生きている。それに恐らくは似たような境遇だろう。ならば、無駄に会話を重ねて意味不明な真実を掴もうとするよりは逃げてまず安心を手に入れたほうが良い。

だが、

「嫌……」

「は!?!? なんで!?!?」

少女は拒絶する。それに対し、南條も思わず驚いて声を上げてしまった。

同時、シャツ、と南條の背後で鋭利な音と共に部屋の扉が開いたのだが、南條はすぐには気付かなかった。

「え、あ……、」

南條の目の前の少女はそれに気付いた。

思わず面を上げて視線をそちらへと釘付けにし、絶句した。目を見開き、恐怖から口は開くが言葉は一切出てこない。まるで、そう、

バケモノと対峙でもしたかの様な表情だった。

「ん？」

暫く、という間もなく南條は少女の様子に気付いて小さく唸る。

そして、視線を辿って――振り返る。

部屋の扉は自動式の物だ。それは南條が入ってきた時に全て証明されている。もとより、自動であろうが手動であろうが扉が開くためには、開ける人物が必要なのだが。

「ああああアアああああオオオオアああああアアアアアアアアああああ」

呻き声が、狭い部屋中に反響した。

2. 接触―2（前書き）

南條来人、謎の施設で少女と合流。
少女、南條と合流。

2. 接触―2

「ッ!!」

言わずもがな、振り返ればそこにバケモノの姿がある。

あの時対峙した中年男性とはまた違う、今度は青年と呼んでも間違いいはならない若さが見える男性だった。白めを向き、不気味な呻き声を上げ、南條達にゆっくりと迫ってくる。

その姿に違和感がない分けがなかった。見れば、先程の露出した腸よりはインパクトはないが、腕の肉はナイフで丁寧な削がれ落とされたかの様になくなっていて、そこには本来見えるはずがない僅かに肉がこびり付いた真っ白な骨が見えている。

とてもじゃないが常人が見て落ち着いていられる光景ではなかった。

勿論、南條は絶句してしまっているし、少女も同様だ。

「ああああああああアおおおアおおオああああああアアアアアああ」

「なん―ッ!?!」

南條は立ち上がるも、足が竦んでしまって上手く行動できない。それに頭も回らず、混乱した状況でどう動いていいか、何をすればいいかなんて考えつくはずがない。

「バ、バケモノォ!!」

南條の後ろで少女が悲鳴を上げる。が、南條の脳はそれを理解するまで状況に追いついてなどいない。

(なっ……!! さっきのおっさん以外にもまだこんな死体みたいなのがいたのか!?)

見れば見るほど『ゾンビ』と形容できてしまうその姿から、つまりは現実から目を背けたかった。

――が、そうはいかない。

明らかに危険な対象が自分達に向かって来ているのだ。ここで素直に「はい」と受け入れる馬鹿はいない。

逃げるか、戦うか、その他ない。相手はどう見たって話が通じない種類の人間だ。それどころか、人間かどうかも怪しいバケモノだ。平和調停を結べるはずがない。

——どうする？　なんて考える余裕はなかった。

「オオオオオオオオオオオオ！」

南條は考えるよりも前にまず行動した。目前まで迫ったバケモノお懷に飛び込み、懇親のタツクルをかました。

突き飛ばして、少しでも時間を稼がなければならない。なぜなら、南條のすぐ背後に少女がいるからだ。

南條の頭に、『少女を置いて逃げる』なんて考えは当然の如くなかった。

ドッ！　と南條の六〇キロ弱の体重が乗せられた懇親のタツクルがバケモノの腹に衝突する。一応ながらに肘も鳩尾に叩き込んだ。

——だが、

「おおおおおおオオオ、アアアアアアアアアアあああああ！」
南條とバケモノの距離は一ミリたりとも開きはしなかった。

（こいつ、硬い……！）

鳩尾に肘がめり込んだ感触は南條は確かに感じていた。だが、まるでコンクリートで塗り固められた分厚い壁に突っ込んだかの如く、目の前のバケモノは一歩たりとも後ずさりしないどころか、上体をそらしたりすすらしなかった。

まさに、バケモノ、だった。

「くっそ！」

南條が面を上げると、バケモノがゆっくりとその手を振り下ろし、掴みかかってこうとしていることに気付けた。

「あぶねえっ!？」

ほぼ自然的な反射で南條はサッと後ろに飛びのいてそれを交わした。

考えずとも、先程の体験によって、このバケモノは力が強い、と本能が勝手に判断し、より一層の危機を感じての行動だ。

「おい！ 立て！ 逃げっぞ！！」

南條は首だけで振り返り、未だノーツを、死体を抱きかかえたまま宝石の様な涙をボロボロと流し続ける少女に叫ぶ。

彼女は『嫌』と逃げる事を拒んだ。だが、こんな状況でそんなことを聞く余裕はない。無理矢理にでも引っ張って、逃げるべきだ。南條はそう思っている。

「アアアアアアアああああオオオああああアおおオアアああああ」

バケモノは非常にゆったりとしたペースで迫っているが、何分距離がない。早く行動を起こさなければ、二人ともノーツと同様の状態にされてもなんら不思議ではない。

「ううう……、うう……」

少女はすすり泣くだけで返事を返さないし、勿論立ち上がろうとはしない。

「糞ッ！」

こうなると、南條が取れる行動は一つしかない。

南條は即座に振り返り、強引に少女の手を取って立ち上がらせる。勿論、こんな状態の少女が南條の、男の力に逆らえる分けもなく、少女は立ち上がらされた。同時、分かりきっていた事ではあるが、少女の懷からノーツの身体が、ボトリ、と、まるで臓物が叩きつけられるかの様な悪寒が走る音と共に落ちた。

南條はその先を見て、思わず一瞬足を止めて、絶句した。

床に落ちたことによってうつ伏せに転がったノーツの死体。それは、余りにも酷い姿だった。

背中、と例えられるモノなんてどこにもない。少女が抱きかかえていたために気付かなかったが、ノーツの背中は無理矢理剥がされたかの様になくなり、中身を露出させている。それどころか、その中身さえも所々失われていて、その先に守られているはずのモノが

ありとあらゆる『穴』からまるで触手の様に露出していた。

「う……グッ!!」

理解してしまった瞬間、強烈な、この世の感覚とは思えないほどのおぞましい吐き気が南條の腹から食堂を登ってきた。背筋にドライアイスでも突っ込まれたかの様な悪寒が全身を脅す。

だが、ここで怯むわけにはいかない。

「ノーッッ!!」

少女が叫び、南條の手を振りほどこうとするが南條は阻止する。ここで手を離せば、『二人とも』命はないだろう。それだけは、どうしても阻止しなくてはならない。

ゾクゾクと背筋を震え上がらせ、こみ上げてくる強烈な吐き気に堪えながらも、南條は必死になって少女の手を離さなかった。決して、離さなかった。

「いやああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

南條が駆け出すと同時に、少女の痛烈な悲鳴が耳を劈くが、耳を塞げば手を離してしまう。と、南條は堪え、少女の手を握り直す余裕もなくバケモノの脇を素早く抜け、部屋から飛び出した。

2. 接触―3（前書き）

南條来人、少女を連れて施設からの脱出を目指す。
少女、南條に無理矢理連れられ施設脱出を目指す。

2. 接触―3

「離してよ！」

「うるせえ！　もうちょっと待てやコラ！　距離稼いどかないとマズいつての！」

少女を無理矢理連れ、どちらが出口かも分からないこの謎の施設を走り回った。

とりあえずはあのバケモノから離れなければ、南條はその考えだけを頼りに必死に走った。

少女に気を回す余裕はないが、極小の、あるかないかの余裕全てを少女に回して出来るだけ気を使う様にはしていた。勿論、少女はそんな気遣いには微塵も気付いていないし、関心がないのだが。

暫く、数分程施設内を走って二人はとにかく近くにあった部屋へと飛び込んだ。

自動式の扉を潜った先にあのバケモノがいないのは運が良かったとしか言えない。

二人が飛び込んだ先は先程から度々確認できる小さな六畳程の真っ白な近未来的デザインの部屋だった。二人以外に存在する物は何もない。

「もう！」

腕を振って、南條の拘束から少女はやつと解放される。

涙を目に溜め、顔を真っ赤に染め上げて怒り心頭だと明らかに分かる表情で少女は今にも飛び掛らんという様子で南條と向かい合った。

「無理矢理連れて来たことは謝るけど、ああするしかねえのは分かっただろ？」

流石に少女の鈍い判断能力に苛立ちを覚えてしまったのか、南條も少しばかり怒鳴る様な口調で言った。が、少女はそれに対して全く怯む様子も見せず、

「ノーツを助けに行くの！」

怒鳴る。が、あまりに容姿端麗なためか、飼い主になつかない子犬の様に見える。

勿論、一九歳にもなる一男子の南條がその程度の迫力に臆するわけがない。

「アホか！ 大体アイツは死んでんだろぅが！」

「死んでない！」

「……ッ！！」

「死んでないのよ！」

少女はまるで真実を語るかの様に主張した。

勿論、『あんな状態』の人間が生きているわけがない。

素人の南條が見ても一目で「死んでいる」と分かるような状態だ。それも、あの背中を見ずとも、だ。そんな人間を生きている、と言いつける程に少女は錯乱し、衰弱しているのだろう。

「どいて！」

少女は無理矢理に南條の横を抜けて部屋から出ようとする。が、勿論南條はソレを許さない。少女の前に立ちはだかり、決して隙を見せず、行く手を塞ぐ。

「どかねえよ！ 絶対に行かせはしねえ！ 少しは冷静になれってんだ！」

「うるさい！」

「うっせえッ！」

両者譲らない。譲るわけがない。

少女とノーツがどのような関係なのかは分かりはしない。だが、親密な関係だったと伺えるほどに少女はノーツを助けに行こうと必死だ。死んだと信じず、現実から目を背ける程に。だが南條も負けはしない。本人が思う程には南條は冷静だ。少なくとも、少女よりは。そんな南條が自ら命を投げ出そうとしている少女を止めないわけがない。たとえ、つい数分前に出会ったばかりで互いに名前も知らないような関係でも、目の前で失われる命に救いを与えないわけ

がない。

「とにかく、落ち着け！ 『あいつの背中見ただろうが！』」

南條は今までこんなに声を上げたことがない、と思う程に声を張り上げて怒鳴っていた。

「……………」

しまった、と思いはした。

が、どうやら効果はあったらしい。少女は突然俯き、黙った。

（何とか、落ち着いてくれたか…………？）

少女の様子を伺いつつ、南條は自分を落ち着かせるための溜息を吐き出す。

「……、ノーツ、死んでた……」

不意に、少女の口からそんな言葉が漏れる。

とても小さな、人に向けて言うような声量ではなかったが、目の前で少女の様子を伺う南條は聞き逃さない。

「そうだ。だけどお前は生きてる。何があったのかは知らないけどよ、生きてんだ、こんな状況だったのに。呆れちまう様な意味不明な状況だけとお前は間違はなく生きてる。こんな意味不明で理不尽で危険な状況で、……厳しいこと言うけど死体に構ってる余裕なんてないんだ。それじゃお前が死んじゃうだろうが。俺だって生きてる。生きて、お前を見つけた。俺にはお前を守る義務がある。人間だから、だ。俺も人格者なんかじゃねえ、お前が死ぬって言うならもう止めない。だけどな、あん時のお前は明らかに錯乱してた。そりゃまともな意見、意思なんて聞けない程にな。だから、助けた。出来れば助けた命を無駄にしないで欲しい」

南條自身でも驚くほどに言葉が吐き出せた。

少女に生きて欲しい。ただ、そのみつともないくらいに必死でありがた迷惑かもしれないその思いが、南條を良い意味で饒舌にさせた。思いを伝えた。

「……………」

少女は睨む様に、南條を見つめている。

未だ困惑はしているのだろう。南條だって冷静といっても困惑はしている。先程まであれだけ狂ってしまった少女がすぐに完全な落ち着きを取り戻せるはずがない。当然の事だ。

「まあ、無理強い、は、しない、けど……よ」

返事がなく、二人の間に沈黙が走ったのが妙に恥ずかく、南條は戸惑いながら、何か場をごまかすようにそう言った。

南條が困って、言葉を必死に探していると、

「……ディエナ、」

少女は本当に目の前の南條に聞こえるか聞こえないかのギリギリの音量で呟いた。

「ディエナ……？」

訊くと、少女は頷いて、面を上げる。

必要以上に整った精巧に作り上げられた人形のような綺麗な顔が南條と向き合う。ブロンドの巻き毛が揺れ、甘ったるい、だがこころ良い香りを南條にまで感じさせる。

そんな絶世の美女と称してもなんら不思議ではない少女の、仄かに赤らむ薄い唇が開かれる。

「ディエナ・トワイライト。私の名前」

「……、ディエナ、か」

聞いて、やはり外国人だったか、と南條はディエナのその美しさに一人で納得して心中で幾度か頷く。

（日本語は大丈夫、か。今更だけど）

「じゃあディエナ」

「……何よ？」

ディエナの態度は未だ南條に対して警戒している事が伺える若干ツンとした強気交じりの態度だったが、南條は意識的に気にしない様にした。

「何があったか、教えてくれないか？」

聞くと、

「……………」

何故か少女は黙ってしまふ。

「やっぱり思い出すのは辛いかな？」

南條の見たノーツの状態は最悪だ。それも、ちよつとやそつとの事故や犯罪では見れない様な、それ程の最悪の状態だ。あれ程の状態になったということは間違いなく強烈な事があつただろう。思い出したくもない程の事が。

「違う」

「へ？」

だが、少女は首を横に振った。

どういふことだ？ と首を傾げる南條に、少女はそのガラス球よ
うな瞳を向けて、

「名前は？」

聞いた。それはもう、こんな状況下にいることを忘れてしまふかの
様な、初対面の気軽な、挨拶だったかと思う。

「南條来^{なんじょうらいと}人、だ。呼び方はなんでも良いから」

「来人、ね。わかった」

2. 接触―4（前書き）

・南條来人、ディエナ・トワイライトと合流。

2. 接触―4

南條とディエナ。二人以外何も存在しないこの小さく、不気味なほどに静かな部屋でディエナは何度か頷き、やっと、話してくれた。「私とノートは二人でショッピングに出てたわ。……、何処までの記憶があるかって言われたら曖昧なんだけど、気付いたら、こんな変な所にいたの。やっぱり、記憶がはつきりしないから言い切れないけど、ノートは拉致を疑ってたと思う。でそれで、私達……、半分以上はノートの指示ね。ノートが『ここから出なければ』みたいなこと言って私を守りながら部屋から飛び出したわ。けど……、廊下あのバケモノと会っちゃって……。それで……。」

「そこまで良い」

「……ありがとう」

つまりは、ディエナも南條と同じだという事だ。

（やっぱりそうか……。と、なると得られる情報なんて大してないよな）

南條が一人考えていると、目の前のディエナは首を傾げて、

「来人は？」

言われて、ハッとして南條は一旦考えを止める。

「ああ、似たようなモンだよ。俺は……、」

言いかけたところで、南條はまた別の事を考えてしまう。

――何をしていたか。だ。

記憶がはつきりしていないのは確かである。

（俺は……、何をしていた？）

考える、が、未だ記憶はハッキリとはしない。何処かで『誰か』と出ていたような気はしている。だが、南條はその詳細がハッキリとしない。磨りガラス越しに景色を見るような、そんなあやふやな記憶が南條の脳裏にぼやけたまま流れる。

（何があった……？）

ともかく、思い出せないので仕方なく答えられる範囲での一応な答えを南條は返す。

「俺は、……俺も、気付いたらこんなところにいた」

あえて短く、簡潔に答えて南條は自然な動作で視線をディエナから外して床に落とす。

思い出せないことが何故か申し訳なく思えて、そんな南條の無駄な罪の意識の表れだったかもしれない。勿論、ディエナがそんな事に気付くはずもないのだが。

「そっか、」

自身が悪い訳でもないのにディエナは申し訳なさそうに溜息を吐く。

南條同様に、ディエナも何か意味のない罪の意識を抱いてしまっているのかもしれない。この様な状況で、こうやって話合える相手を見つけただけでも運が良いと言える。こんな状況で、他に人間がいるかも分からないこの状況で、相手と離れてしまうのは好ましくない。だからか、二人とも意識せずにどこか億劫になってしまっているのだろう。相手に無駄に気を使って、自身を抑えて相手に合わせようと。勿論、それでは先に進めない。

「と、とにかく！」南條自身を奮い立たせる様な必要以上の大声で、
「俺達はこのから出なくちゃならねえ。生きるために」

聞くと、ディエナは先程まで見せていた困惑した様な様子を全く伺わせない予想以上にしっかりとした面持ちで一度、一度だけしっかりと頷いて返した。

南條も気付いてはいるが、これはきつと一時的な強がりではかないだろう。が、それでも今は十分なモノだと思えた。先程までの冷静さを失ったあの様な態度のままではきつと――二人とも死んだ。

「とにかくにも逃げるしかない。お互いに勝手にここに連れてこられたって事は情報なんてないだろうしな。ただ走るのみだ」

「そうね」

そう言うディエナの目には何か決意が表れていたかもしれない。
かくして、二人は協力関係を結んだのだった。

——これが、これから始まる戦いの始まりとなるとは、誰も思い
やしなかった。

1

「やっと……、景色が変わった……か？」

「……少なくとも、今までと何か雰囲気が違うわね。言い切れない
のが残念だけど」

南條来人、ディエナ・トワイライトの二人はひたすらに謎の施設
内を走り回った。走り回って、同じ景色を幾度となく走り抜けて数
十分程して、二人はエレベーター見つけた。真っ白な壁に同化する
様な扉だったため、見づらかったのだ。気付いて、乗り込んで数階
程降りたその先。

二人の目の前には相変わらずの光景。眩いばかりの真っ白な廊下。
エレベーターを降りた二人から真っ直ぐ前に伸びる廊下、だが、
その光景は今まで見てきたモノとは少しばかり違う様に感じた。感
じていた。

エレベーターから真っ直ぐ伸びる廊下、その先にが三本の新たな
道が伺える。右に左に、それと真っ直ぐ。唯一先が見える真っ直ぐ
の伸びる道、その先には何かシャッターの様なモノが見えるのだが、
余りに距離があるためにハッキリと何があるか、と確認はできない。
とりあえず、と二人は先に警戒しながら分かれ道の場所まで進む。

「扉、扉、シャッター……？ いや、なんか広い空間があるな」
とりあえず、と分かれ道まで来たところで南條はそれぞれの道の

先を確認した。右に伸びる道の先には今まで見たモノと同様の近未来的デザインの扉が確認できた。今までの感覚からしてその先は部屋だと南條は予想するが、その先が通路なのか部屋なのかは実際に確認してみないと分かりはしない。

そして、左の通路の先も同様。

問題はそのまま二人が真っ直ぐ進んだ時、どうなるか、だ。

真っ直ぐ伸びる道の先には扉なんか見えやしなかった。

その先には、体育館程の巨大な空間が広がっているのが見える。相変わらずの真っ白な空間ではあるが、明らかに今までとは違う空間である。その先にシャッターのようなデザインで、明らかに今までとは違う扉も確認できる。

「ど、どこに進もうか……？」

「そうね……、」

明らかに怪しく思えるのは真っ直ぐ伸びる巨大な空間に繋がる道だ。だが、先の光景を知らない以上はどの道も怪しく思えてしまう。ここで、南條は考える。

ここに辿り着くまで、運良くあの『バケモノ』に会わなかったが、いつ出現しても可笑しくはない状況である。もし、左右に伸びる道の先、その扉の先が逃げ場のない空間だったら？ 真っ直ぐ伸びる廊下しかないこの状況では逃げ切れないだろう。バケモノがソノ名の通り、バケモノ染みた力を持っているだろう事は南條達は気付いている。

だとしたら、答えは一つしかない。

バケモノが襲って来ても逃げ場の確保がほぼ確実にできるであろう広い空間を持つ、真っ直ぐ伸びる道に行く他ない。

「とりあえず、前進あるのみだ」

南條は自身に言い聞かせる様にそう言い、ディエナと共に歩き出した。

2. 接触―5（前書き）

・南條来人、デイエナと共に巨大空間にて。

2. 接触―5

「本当に、ただの巨大な空間、ね」

ディエナは呆れた様にそう吐いた。二人は真っ直ぐ進み、ソノ先に見えた巨大な空間へと出たのだった。

「一応気になるのはあの『扉』くらいか」

南條は先を指差して言う。

二人が立っているこの空間の入り口とも呼べるその位置から正反對の位置に、今までの物とは明らかにデザインが違う、シャッターを連想させる様なデザインの扉が一つだけ確認出来た。それ以外には、今まで入った部屋同様に何も確認できない。

この空間に出るまでは見えない、確認できない所に何か潜んでいるのではないか、と億劫になって必要以上の警戒をしていた南條だったが、いざこの空間に出てみると、ホッとした、と言わざるを得なかった。

本当に、何もない空間だ。ただ、巨大なだけで、今まで確認した小部屋となんら変わりはない。

「とりあえず、あの扉だな」

「そうね」

互いに確認しあって、その扉へと向かおうと一歩踏み出した――その時だった。

二人の背後で鋭利な空気を切る様な音が微かに鳴った。あの、近未来的デザインの今まで見てきた扉が閉まるかの様な、そんな一応に聞きなれた音だった。

そんな音だろうが何だろうが二人には関係ない。何かが起きれば、確認しなければならない様な状況だ。

二人はまるで打ち合わせしていたかの如く同時に音に反応し、振り返った。

振り返って、一目で何が起きたのか確認できた。それもハッキリ、

と。

「道が！」

まずディエナが声を上げた。

その言葉の通り、南條達がこの空間へと出るために通ったその廊下がなくなっているのだ。それも、最初からそんな通路はなかったと言わんばかりに、二人の通って来た道は『壁』に遮られていたのだ。そう、扉、ではなく、壁、だった。

「くっそ……が、」

こうなると、考えられることは一つしかない。

南條は忌々しげに歯を食いしばって吐いた。何処にいて、誰かも分からない『自分達を監視しているであろう人間』に向けて。

締め出すだけならばこんな仕掛けを作らなくても今まで通りの扉で良い。このレベルの施設を作れるのだ、扉でも十分に何も知らない南條達を締め出す技術を使えるはずだ。だが、あえてそうしなかったのだろう。態々こんな技術を使ってまで南條達を締め出す理由の一つ、一つしか想定できない。

——『罠』なのだ。

「ディエナ、そっちはいいから前に注意しろ！」

「え!？」

通って来た道があったはずの壁を叩き、無理矢理にでも道を探そうとしていたディエナに南條は叫ぶ。既に南條は前を見ている。言ったとおり、前に注意する様に。

道を塞がれた、という事は『逃げ道を消す』という事だ。と、なると二人を追い詰める何かが出現するはずだ。それは、簡単に予想が付く。

（来るか……バケモノ）

南條が警戒するのは、あのバケモノ、ゾンビだ。

あんな常識から外れたものが徘徊していたのにはきっと理由があるはずだ、と今の南條は考える。

（状況からして、俺達を監視する何かがいるはずだ。管理者がいる

つてのにあのバケモノは「ただ、います」なんてなるはずがねえ……、何かを……試してんのか？ この締め出された状況も、すぐに仕掛けてこないところを見ると何かを試してるとしか……」

南條の視線はあの先に見えるシャッターの様なデザインの扉に釘付けた。来た道を失った以上、二人の希望はその扉しかない。

が、言わずもがな、その扉は絶望になる可能性もある。

言ってしまうば確認できる出入り口はその扉しかないのだ。その先から、あのバケモノが複数、それも大勢と呼べる数入ってきたりなんかしたら、もう南條達は逃げ切れないだろう。

南條達が閉じ込められたとはいえ、目的は『殺す』ことではないのだろうか、しばらく南條達が警戒しても背後の来た道が失われた事以外に何も起こらなかった。

「何も起こらないわね……？」

「そうだな……」

（と、なると一つしかねえ……）

来た道を絶たれたのだ。となると答えは一つしか選べない。

「あの扉、開けるしかないよな？」

南條は息を呑み、ディエナに振り返らず問う。

「そうね……。他に何もないものね……」

「だよな。……よし、進もう」

他に何もないのだから「仕方がない」と南條とディエナは辺りを一応に警戒しながらまた一歩踏み出した。

が、またしてもそれ以上進むことは叶わなかった。

南條様々な可能性を考えたつもりでいたが、一番簡単なことを逃してしまっていたのだ。それは何か？ 答えは簡単だった。

——何故、これ程までの巨大な空間なのか。だ。

今まで同じ道を散々通ってくらいにはこの施設内を走り回った南條達。その南條達が違和感を覚えるほどに、この部屋は巨大なのだ。

体育館を連想させる様な巨大な空間。天井は白い一面のせいでハッキリと確認できなかったのだが、心なしか南條は「高い」と思った。その天井が、動きを見せた。

まるで何かを『落とす』かの様に、天井は外に、南條達のいる方へてパツクリと割れて開き、『ソレ』を南條達の目の前に落とした。

「なッ!？」

「きゃあああああ!？」

ソレが床に着地したと同時に、強烈な地震が起きたかの如く床が、
 ここら一帯が激しく縦に揺れた。

南條とディエナはしゃがみ込み、その揺れに堪えて体勢を出来るだけ保つ様にした。勿論それは、自然反射ではあったのだが、それよりも、目の前に落ちてきたソレに警戒しての事だった、といったほうが正しい。

[illegible]

ゆれが収まって、南條達が立ち上がるうとしたと同時、分厚い、まるで巨大な鐘を打ったかの様な雄叫びがこの巨大な空間に揺れ、反響して二人に襲い掛かった。

2. 接触―6（前書き）

- ・南條来人、デイエナと共に怪獣と対峙。

2. 接触―6

「はあああああ! ? ありえない! 絶対ありえないじゃねえかよコレ!」

南條を表現した冷静なんて単語は決して誇張した物ではない。が、そんな南條でも思わず、無意識の内に声を上げてしまっていた。それ程までに、異様な『ソレ』が目の前に突如として現れたのだ。

ディエナは南條の横で絶句している。様子を見るまでもないが、正直、意識が飛ばない様に目を見開いているだけで精一杯なのだろう。南條の背後からは、何一つ音はしない。

二人のすぐ目の前には、丸太の様に図太い、野獣を連想させる茶色の剛毛に覆われた足が二つ。見上げれば、二人を覗き込む巨大で、真っ赤に充血した瞳。

顔は蝙蝠こうもり、図体はまさに『怪獣』、手から伸びる爪は一つ一つが日本刀を思い出させるかの様な鋭利で、それなりの長さを誇っている。まさに、怪獣だ。バケモノ、なんて表現ではとてもじゃないが当てはまらない。巨大な、怪獣だ。

全長三メートル程だろうか、開いた天井が元に戻ろうとした時、その怪獣の頭上スレスレを通ったのが見えた。

そして、天井が元に戻った。同時、地を僅かに揺らしながらその図太い足がゆっくりと持ち上がり――二人の頭上でピタリと静止した。足の裏には肉球らしき物が見て取れるが、その大きさは今まで見てきたモノとは比べ物にならないくらい大きく、単に想像できる肉球を持つ動物のソレと同じ物とは思えない。

「よ、よよよよ!! よけ……、飛ベッ!!」

ひい!! と南條は回らない頭で必死に言葉を摘んで選び、叫んだ。斜め後ろで動けなくなっているディエナを突き飛ばした。同時、南條も結ばれてしまいそうな程にぐにやりと揺れる足にシッカリと力を込めて、突き飛ばしたディエナと同じ方向に飛びのいた。

南條達がいた場所が、消え去った。

（いっ……、あんなのに踏まれたら死ぬとかそんな問題

「立て！」

南條は咄嗟にディエナの手を取って二人で立ち上がる。立ち上がり、――走る。

数少ない余裕で辺りを一瞥する南條。が、一瞥しなくても分かる。来た道はふさがれ、唯一の道は先程から逃げも隠れもせずバケモノの足のように鎮座している。

[illegible]

南條のリードで二人はしっかりしない足取りで走る。

だが、怪獣なんかを相手にしてそんな上手くいくはずがない。なかった。

「^?」

45

ディエナの目の前にあったはずの南條の姿が、消えた。

そして、代わりに立ちはだかるのは怪獣の鋭利な爪。鈍く輝くその爪に血はへばり付いていない。見当たらない。が、それ程綺麗に南條の身体を叩ききってしまったのかともディエナは思ってしまう。
「へ……。え、あ……。」

リードしてくれていた南條の姿を探す、怪獣の影にでも飛んでしまったのか、それとも木っ端微塵にでもされたのか、ちよつと辺りを見回した程度では見つける事はできなかった。

(な……。来人はどこに……。)

最早ディエナに『逃げる』という選択肢は浮かんでこない。

あまりに南條に身を任せすぎたのだ。もとより、任せていなければディエナはとくに死んでしまっていただろうが。そんなディエナに自身で『逃げ出す』なんて考え付くはずもなければ勇気もないだろう。事実、ディエナは視線を水平に移動させるだけで動こうなんてしない。それに、見れば見るほど今にも倒れてしまいそうだった。

元々、限界寸前だったディエナの気を保たせて引きずってでも『生かそう』としたのは南條だ。

その南條がいなくなった、ということは一。

ゆっくりと、目の前で怪物の何かが蠢く。が、ディエナの視線はそれを追いかける事はできない。出来るはずがないのだ。脳が活動を静止しているのだ。どうしようもなく、ただ犠牲になるだけのためにここに置かれているオブジェクト。今のディエナはまさにソレだった。

「あ、あ、あ……。」

気付けば怪物はディエナの正面に立ちはだかり、顔を覗き込んでいた。

「っ」

ディエナは全身麻酔を打たれたかの如く感覚を失ってしまった。

目の前に立ちふさがった知識外の恐怖に本能が震えた。神経を全て引き剥がされたかの様に、身体が脳に存在すら伝えない。

ふらふらと揺れる視界が、ディエナの終わりを告げていた。

（う、動かない……）

ズ、とディエナを覗き込んでいた怪獣の顔が持ち上がり、本来の高さに戻る。同時、当たり前だといわんばかりに鋭利な爪を保持した図太い腕が天井に触れるかと思うくらい的位置まで持ち上げられる。

「あ、あう……、ああ……」

2. 接触―7（前書き）

・南條来人、？

2. 接触―7

もうダメだ。そう、思った。

ディエナは本心で、自然に、もう続かない、そう思った。何が、と言われて答えるならば、そう――全てだ。

「――っ!!」

ドッ！ と空を切り裂き、全てを叩きつけるかの如く、強烈な一撃が、振り下ろされる。全てを断ち切り、零、へと還元してしまうかの様な、そんな痛烈な一撃。それが、ディエナを叩き潰そうと堕ちる。

その瞬間は体感速度が落ちたのか、とても遅く感じた。声を上げる暇なんてなかった。

「こっちだ!」

――が、諦めない男がいる。

ディエナはハツとし、声のした方――あのシャッターの様なデザインの扉――へと視線をやると、出会ってまだ間もない、だが見慣れた姿の少年が、いた。

「早く!」

「!」

ディエナは声に導かれるままに走り出した。薄手のドレスの裾は自然に破け、ディエナが走りやすい様になっていた。ただ、運が良かっただけなのかもしれない。だが、これは好機だった。

ディエナが走り出した直後、ディエナの背後ではコンクリートを砕く轟音が炸裂し、文字通り砕けた床の破片がディエナの背中を打つが、ディエナは止まらない。止まるわけにはいかない。

そんな光景を見た南條は正直冷や汗が崩壊したダムのように溢れ出

を抉る様な、そんな日常では絶対に体験できない、そもそも体験なんかしたくない激痛。直後に身を焦がす様な熱が左腕を襲う。

(……………ッ！)

だが、南條は諦めない。

怪獣に吹き飛ばされ、平らで、屈強と呼べる程硬い壁に叩きつけられて全身の骨が砕けたかと思う激痛が全身を襲っていても、南條は扉を探してディエナを導く事だけを考えた。だからこそ南條は先に扉の向こうに飛び込まず、ディエナを先に入れて安全を譲った。閉まる可能性のあった扉を開けて、待った。

それほどに、南條はディエナを守ろうと決意していた。

——だから、

「よっしいいいいいいッ!？」

「はぁ、はぁ……、なんとか、なった……わよね？」

バタリ、と扉を閉めて、南條はやっと心臓がはじめてしまいそうな程に跳ねている事に気付いた。深呼吸して、気を落ち着かせたいとは思うが、南條はそれよりも前にやらねばならない事があった。

『左腕を背中に回して隠し』、

「とりあえず、先に行こう。あの怪獣この壁壊してきても可笑しくなさそうだしな……」

「そ、そうね、」

上手い具合にディエナの位置からは南條の左腕が見えなくなっている。だから、ディエナも南條の腕がどうなったかなんて気付けない。例え、その左手の肘から先が三つに裂かれる様に裂傷を負い、ダラダラと真っ赤な血を垂れ流して床に血溜まりを作っていたとしても。

「まあ……、よかったわよね！　なんとかってんだしっ！」

ディエナは取り繕って言う。

つい数秒前までの現実離れしすぎた記憶を忘れるかの様に、ディエナは言いながら、楽しそうに見せて先に行く。

扉の先は巨大な通路だった。今まで通ってきた細い廊下とは違い、

『通路』と呼べる広さのモノだった。その広さは、何かを搬入する様なイメージを南條に持たせた。

デザインは今までもおりの眩いばかりに輝く真っ白なモノだが、何故だかその先は確認できない。真っ暗、ではなく、真っ白、に塗られた通路の先は進んでみないと分からないだろう。

（周りに扉は見当たらない、い、か……。先に、進むし、か、ない……。か）

2. 接触―8 (前書き)

・南條来人、？

2. 接触―8

大量出血のせいで南條の意識はフィルターを貼ったかの様にぼやけていた。はつきりしない意識を覚醒させようと必死に頭を回すが、それすら叶わない。

「……………」

そんな南條に、必死に冷静な自分を取り繕っているディエナは気付けない。気を回す余裕なんかあるはずがなかったのだ。そもそも、最初からディエナにはそんな余裕ないのだが。

先を進むカチカチに固まって錆付いたロボットの様なぎこちない歩き方で歩くディエナの背中を追って南條は少しだけ微笑んだ、その小さな背中が妙に微笑ましく思えた。助けたんだ、その気持ちが妙にくすぐったかった。

（よか……っ、た。か）

張り詰めた琴線はふとした時にプツリと切れてしまう。

なんとか進んでいたディエナは、背後で何かが倒れる音を聞いてやっとオートマチックで進む足を止めることが出来た。ついでに、振り返って、やっと南條を確認する事が出来た。

――そして、やっと気付く。

「……へ？」

振り返ったディエナが見たのは、うつ伏せに倒れた南條と、その足元からあの扉まで続く川の様な血痕。間違いなく、致死量だ。ディエナが見てそう思う程だ。だが、呼吸している様子は確認できる。言っても、高熱にうなされているかの様な荒い、肩でする呼吸だが。「ちよ、ちよっと……、どうしたのよ!？」

へ？ は？ と困惑しながら、おぼつかない足取りと感覚でディエナは倒れた南條へと近づく。近づきながら、鮮血の鉄の臭いが鼻について現実味を増していく。近づけば近づく程、白い床に靡く赤い血がハッキリと視界に焼きつきはじめて、頭がクラクラし始める。

「え、嘘……嘘ッ！　どうしたのよ!？」

側にしゃがみ込み、ディエナは南條の背中をゆすりながら通路に反響する大声で南條を呼ぶ。――が、勿論返事は返ってこない。

何故南條がこんな姿になってしまったのか、今の落ち着きを失ったディエナには理解が出来ない。徐々に広がり、南條を沈めるかのように広がっていく地溜まりの原因が分からない。

つまりは、ディエナの目には勝手に垂れ流されていく血溜まりに南條が赤く染め上げられていく、という異常な景色しか映っていないのだ。果てには、それが可笑しいと認識すら出来ていない。

「ちよっとお！　返事しなさいよっ！　来人！」
と、その時だった。

ディエナが待つ南條の返事。ディエナを安心させてくれるであろう南條の返事――の代わりかのように、この、先の見えない長い通路に少し籠った声が響いた。

「目標二名、発見」

ハッ、としてディエナは顔を上げて声のした方へと目をやる。

そこには、この真っ白な空間に穴を開けるかの様な、真っ黒な特殊な防護服に身を包んだ数人のガスマスクで顔を隠した謎の人影が確認できた。

「へ？　何!？」

連中の肩に掛けられた銃がまず目に入った。ディエナにその種類まで見分けることはできなかったが、アサルトライフル、と呼ばれる種類の物であることは素人目でみても一目両全だった。それを、全員が装備している。

（だ、誰だこいつらは……?）

南條は未だ意識があった。勿論、微かな物だったが。そんな意識のなかで南條は目だけを動かして連中を確認する。

（一、二、……三、四……、見える範、囲で四、人、囲まれて、る

な……、背後に数人って、所、か？)

正直、絶望だと思った。どう見たって、この連中は南條達を助けに來たはずがない。そんな連中、ましてや銃なんて初めて実物を見る様な武器を持っているその連中に囲まれているのだ。南條が万全な状態であつてもどうしようもない状況だ。

「報告通り、一名はRZ01による攻撃により負傷。もう一人は無事である」

「早急に回収し、負傷者は研究班に回せ。女の方は『選抜』だ。フアーストさんに回しておくんだ」

「了解」
ラジャー

「おら、とつとと動け！」

意識の飛びかけている南條の意識の端の方で連中がガチャガチャと動き回っている雑音が聞こえてくる。時折、ディエナの物と思われる叫び声、悲鳴も通り過ぎていくが、南條の限界はとつくに越えていた。

(……くそっ)

「『一般』の南條來人、一九歳と『選抜』のディエナ。トワイライト二二歳を確保した。直ちにそちらへ連行する」

遠い意識の遠いどこかで、ノイズの走った声が聞こえた気がした。

3. 順位（前書き）

- ・ 南條来人、謎の連中に連行される。
- ・ デイエナ、同上。

3. 順位

3. 順位。

ガコン、という何か重い何かが落ちる様な音で南條は目を覚ました。

「ーッ」

不意に視界が開けるが、相変わらずの眩い光景で目が眩み、しばらくは周りを確認する事もできなかった。目が慣れるまでの間に物音はしないか、と耳を澄ますが特に気になる音はなかった。それどころか、物音自体がなかったかと思える。しばらく瞬きを繰り返し、やっと目がその部屋に慣れてきたところで南條はやっと気付く。

部屋は最初に目覚めた部屋とやら変わりはしないその部屋。

だが南條は目覚めたその瞬間から違和感を感じていた。

南條の視界に移るのが真っ白な天井だ。蛍光灯やライトらしき物が見当たらず「どうしてこんなに部屋が明るいのか？」とは思うが、今はそれどころではない。

床に寝かされているわけではない、と気付く。かと言って柔らかな感触のぐっすり眠れるベッド、という訳でもないのだが。南條はその感触や視線の高さからこれが手術台の様なベッドだろう、と予測を付けた。

(……ったく。どうなって……?)

南條はあの怪獣から逃げる時に左腕に重症を負ったのだ、南條自身それを夢だと思わず現実だと信じてハッキリ記憶している。それに、あの真っ黒に統一された防護服を着た連中に囲まれたことも。

——そこで、南條はハッとした。

「ディエナ!？」

そうだ、ディエナもヤツラに連れられたはずだ。起き上がって辺りを一瞥しようとする南條だが、ガコン、という

いかにもな拘束の音がしたと同時に、南條は起き上がれない事に気付く。視線だけで身体を確認してみると、腕ごと胴体を拘束する太いベルトのような物が見えた。よく見れば、足元、首元にもそれはあり、南條をよっぼど逃がしたくないと見える。

南條が視線を下ろした先の南條の足の向こうに、扉が見えた。斜めに開きそうなデザインの最早見慣れた扉。そして、その横に――防護服を着た――影が見えた。

「！！ お、おい！」

「……………」

南條が呼びかけるが、その防護服の人間はなんの反応も示さない。まるで聞こえてない、見えてないと言わんばかりの虫だ。きつと、『上の人間』にでも命令されているのだろう。

「無視すんなつての！ ディエナがどこ行ったか教えろよ！」

「……………」

「ああ、この野郎！ じゃあとつと拘束具外しやがれッ！」

「……………」

何を言おうが何をしようが微塵の反応を見せない防護服の人間。

南條はとつと痺れを切らして今にも防護服の人間に今にも飛び掛りそうな勢いだが、拘束具によって動きを封じられているためにそれは叶わない。

何故、南條を拘束するのか。南條は防護服を警戒しながらもまずそれを考える。防護服の連中は――見て分かるとおり――銃を装備している。一人でもただの人間である南條を拘束するのには十分だろう。予備でもう一人、としか考えられない。

拘束するのは何故だ？ 南條を拘束する理由、南條にそれはまだ、分からなかった。

とにかくにも、拘束されていては動けない。この部屋にディエナはいず、南條は探し出さなければならぬのだ。

（言ってもきかねえし……どうすっかな）

南條が罵倒しようが叫ぼうが扉の横で待機している防護服の人間

は南條に視線をやることもなければ、手に持つ銃を向けて黙らせようとするしない。

と、なると、南條は時進んでなんらかのイベントを待つ他ない。勿論、拘束具を外せば話は別だろうが、どうにも、南條の身体を拘束する太い三本のベルトは人間が外せる物とは思えない。それ程に屈強な物だった。

（何にせよ、叫ぶだけ無駄か）

そう、南條が待ちに入った時だ。足元の方からシャツと聞き覚えのある音がして南條は視線を下げた。

南條の足の向こう。防護服の人間が立つそのすぐ横の扉が――開き、人影が一つ増えていた。

（ん？ ……スーツ？）

その人影は場違いなスーツを身に纏った身体の細いラインが目立つ痩せ型の男だった。顔も細く、少しばかり顎が尖っている様な印象を持つ。それに、顔を隠していないせいか、隣に立つ防護服よりも歳を食っている様に思える。顔だけでみて、四十代程だろうか。

その痩せ型の男は、部屋に入ってきたかと思うと、入り口付近に棒立ちして、「調子はどうだ？」と防護服の人間に訊く。返ってきたのは「問題なしです」と、いうありきたりな返事だが痩せ型の男は「そうか」とどこか納得したかの様な様子で返す。

（なんだ……、こいつ。なんか防護服の人間とは様子が違う気がするが、）

スーツの人間は数歩進んで南條の横に立つ。

南條が視線を上げると、その男の嫌に鋭い視線と重なってつい逸らしたくなるが、南條はあえて視線を逸らさない。それどころか睨みつけるくらいだった。

「何だよ、おっさん？」

あくまで、威嚇する口調だ。

「おっさん……、いや、僕ももう四三だ。おっさんでも良い」

痩せ型の男は一人ごとを呟く様にそんな事を言う。勿論、すぐ側

で寝転がる南條には丸聞こえの眩きで、南條は場違いな眩きに眉を潜める。

そんな南條を嘲笑うかの様に、その痩せ型の男が南條の表情を無機質で、冷淡な表情で見下ろしたまま、言う。

「僕は『セカンド』だ。おっさんはやめたまえ」

3. 順位一1 (前書き)

- ・ 南條来人、謎の部屋にてセカンドと名乗る男と接触。
- ・ デイエナ、？

3. 順位—1

「セカンド？」

「ああそうだ。そう覚えてくれて構わないよ」

セカンド、と名乗った男は適当に答えて南條に手を伸ばした。

「!？」

思わず身構える南條だったが、セカンドの手が下ろされると同時に、カチ、と気持ちの良い音がして拘束具が外れたため、南條も少し警戒を緩めて応える。

拘束具が全て外れ、南條は上体を起こしてベッドに腰をかけた状態になり、訊く。

「なんで拘束具外したんだよ？」

「拘束したままが良かったのか？」

「ンな訳あるか！」

「なら良いだろう。……着いて来たまえ」

言って、セカンドは南條に手錠をかけることもなく部屋から出てしまう。

——付いて来い。そうセカンドは言った訳だ。

扉の横に立つ防護服の人間は飾りの様に見える気配はないし、セカンドは武器を持っている様には見えない。隠している場合もあるだろうが、南條は——経験のなさから——脅威を感じなかった。

逃げてでも大丈夫かもしれない。そんな状況で、南條は、

「おう」

あえてセカンドに着いていくことを選んだ。

この相変わらず意味不明な状況下にいる中で、一人でいるというのは正直心細い物がある。例えば同伴者が敵意丸出しの明らかに危ない人間でも、一緒にいた方が心落ち着けてよいのだ。少なくとも、慌てなくて済む。それに、一人である『バケモノ』や『怪獣』と対

峙した場合と、明らかに何か知っていそうなこのセカンドと一緒に
対峙した場合では、絶対に後者の生存確率が高いといえる。

何より、セカンドは防護服の連中と違って会話ができそうだ。今
まで全くこの施設内の情報が手に入らなかったが、上手いこと話を
進めれば情報を引き出せるかもしれない。

（とにかく、何処に連れてく気なのか知らねえけどよ。出来るだけ
情報を聞きだしてやる。ディエナの事もあるしな……）

2

「きゃあ！」

防護服を着た三人の連中に放り投げられる様に小さな真っ白い部
屋に入れられたのは薄手の青いドレスに身を包んだディエナ・トワ
イライトだ。

「ここで待っている」

ガスマスク越しの声がディエナに一方的に押し付けられ、三人は
部屋から出て行こうとする。

「ま、待ちなさいよ！」

ディエナはすぐに立ち上がり、連中を引き止めようとするが、
ディエナが連中に届く直前で扉は斜めに閉まってしまふ。そして、
ディエナの力ではどうしても開けられないほど硬く行く手を閉ざし
てしまった。

ディエナは何度も何度も扉を叩き、扉の向こうに人間がいるかな
んて分からないのに叫び声を上げる。が、返事は勿論返ってこない
し、部屋の中に余りに声が反響しすぎて外に届いてすらいらないと思
えてくる。

体力の無駄か、とディエナは冷静に考え、数秒で叫ぶのを止め、部屋の隅っこに行き、壁に背を預けてゆっくりと腰を下ろした。

（何がどうなってるってのよ……この状況）

あの『怪獣』なんてとてもじゃないが信じられない存在だ。その目で見て、現実であり本物であることはしっかりと認識している。だが、怪獣なんて存在は現実には存在するはずなく、特撮映画やアニメの中で暴れまわる架空の存在だというディエナの頭の中の認識が邪魔をして『夢じゃないのか』と理性は体験した現実を疑ってしまっていた。

——あれだけの出来事があって、夢なわけがないのに。

（——そうだ、来人は……！？）

ディエナと南條は別々に連れられたため、互いの行き先を互いに知らない。南條は気を失っていたのでどちらにせよ場所を知るすべはないのだが。

と、なるとずっと意識を持っていた一応ながらも、どれくらい移動した、と道が分かるディエナが南條を助けに行ければ良いのだが。

（……、あのバケモノが、ゾンビが現れたらどうしようもなくなっちゃうし、どうすれば良いっていうの！？）

今のディエナにそこまでできる力はなかった。

ノーツが死んでしまった時には、冷静さを失ってしまったがために自らを死に追い詰める様な事をしたが、ディエナだって死にたいわけではない。生きたいに決まっている。勿論、この状況では『できれば』と前に付けなければならぬのだが。

（『選抜』に『一般』……、だったかしら？ あれにはそういう意味が……？ 選抜、選ばれた……？ この状況。バケモノにいつ遭遇するか分からないこの状況。見知らぬ、いかにも怪しい防護服を着た連中に拉致されるこの状況に選ばれる……？）

訊いたうろ覚えの言葉を数個ピックアップしてディエナはディエナなりに現状を整理しようとするが、どうにもヒントが足りず答え

まで辿り着けない。

答えのわからないパズルを目の前に置かれてディエナが苛立ち始めて数分の時間があっという間に流れた。

もう考えるのは止めて何か起きるのを待とう、ディエナがそう諦めた時だった。

鋭利な空を切り裂く音が部屋に響いた。聞き覚えのある音に反応し、ディエナは迷わず扉へと目をやる。

「誰？ あなた……？」

扉が開いて、一人のスーツを着た人間が入ってきた。

いかにも『出来るサラリーマン』といった雰囲気醸し出すその男。見た目からして年齢は五〇代だろう。オールバックにして後ろに降ろした眺めの黒髪が歳相応の渋さを演出している。

男は、背後で扉が閉まる音を受けて、感情の起伏が感じ取れない声色で言う。

「私は『ファースト』だ。これから君にいくつか質問をする。答えろ」

3. 順位一2 (前書き)

南條来人、？

ディエナ、ファーストと接触。

3. 順位一 2

「何よ？」

「何、簡単な質問をいくつかするだけだ。答えたまえよ」

ファーストとやはら感情の起伏が薄い口調ながら溜息混じりにそんな事を言って、部屋の隅で壁に寄りかかって座るディエナの前に立つ。決して視線を合わせるようにしやがんだりなどせず、目の前で視界を遮るように立ったままディエナを見下ろして、言葉を落とす。

「嫌よ。その前に私の質問に答えなさいよ」

が、ディエナがファーストにやすやすと従う気はない。

それもそうだ。何も理解できないまま怪獣、バケモノに襲われ、連行され、何の説明もないまま謎の人物が目前に立ち、質問に答えると吐く。そんな事に道理が通るはずがない。

ムツと表情を歪めてファーストを睨むディエナを相変わらずの表情で見下ろすファーストに動揺は見取れない。まるで、喋るオモチャを冷ややかな目で見る大人の様だった。

「……、良い。三つのみ許そう」

暫く考えるような間を空けて、ファーストは言う。

「ありがと」

フン、と荒く息を抜いて、ディエナは続ける。

「まず、じゃあ一つ目。ここは何処なのよ？」

「日本だ」

「……そうじゃなくて、詳細を、」

「それは二つ目の質問にするが？」

「……、じゃあ良いわ。次。私『達』はなんでここに連れてこられたのよ？」

「選ばれたからだ。これについては後で説明する。サービスだ、ノ

ーカウントにしてやろう」

「じゃあ、二つ目は『あなたは何者』なのか？」

言うと、二人しかいず、最初から大して盛り上がりもしないこの部屋が更に静寂になったような気がした。

ディエナの見上げるファーストは相変わらずの無機質なロボットを思わせる無表情っぷりだが、一瞬だけ表情を引きつかせたような気がした。

ファーストはゴホン、と一度咳払いして、

「私達……私は順位保持者のファーストだ」

「順位保持者？」

「三つ目」

「……、良いわよ。それで」

「順位保持者。我々『U機関』のトップに並ぶ者の総称である」

「『U機関』？」

「そこまでだ。今度はこちらの質問に答えてもらおう」

「はいはい」

U機関だの、順位保持者だの、ディエナにとっては訳の分からない言葉が並べられたが、収穫がないよりマシだ、と思いディエナは大人しくファーストに従う。

U機関がなんだ、とは分かりはしないが、機関と付くくらいだから組織なのは間違いないだろう。一般人を拉致し、あのようなバケモノを飼う組織の『トップに並ぶ者』、目の前のファーストとやらがそうである以上、一般人のディエナに抵抗を見せる利益はない。

眉一つ動かさず、ファーストはツイと視線を逸らすディエナに質問を投げる。

「南條来人との面識はここ以外であったか？」

（なんで来人の事が？）

疑問に思いつつ、ディエナは答える。

「私の覚えている限りでは……ないわよ。私も日本に来て長いしね。すれ違ったくらいはあるかもしれないけど……」

「ふむ。よい」

（なあにが、よい、よ）

「では次の質問」

ファーストがそう言いきったところで、場の雰囲気は僅かに重いもの変わった、とディエナは気付けた。

何が変わったか、それに気付くのに時間は要さない。

「執事が死んだ時君は、『生き残れる』と思ったか？」

「……っ!？」

まさか、とは思ったが確信した。してしまった。

この無機質なロボットみたいな男ファーストは、何者かもハッキリさせずに『ディエナに気を遣っていた』のだ。そうとわかると、ノーツの事を思い出した苦しみなんかよりも、悔しさがこみ上げてきた。やったのは明らかにファースト達『U機関』とやらであろうというのに、その連中に気を遣われるなど、

「ふざけないでよ……」

戯言でしかない。ファーストの言葉は戯言にしか聞こえない。ディエナに正確に言葉を届かせるにはフィルターを取り除かなければならないだろう。勿論、そのフィルターを今剥がすことなど出来やしないのだが。

弱弱しく、憎しみを漏らしたディエナ。続けて、

「ふざけないでよ! あんた達が殺したんでしょ!」

今のディエナに質問に答える余裕はない。

悔しさがこみ上げ、やっと、ディエナは怒った。

人を殺しておいて、その言い草か、とブチ切れた。

ふざけんな、と吐き捨てた。

「何が『生き残れる』よ! あんな狂った場所に拉致して生存確認!?! 頭可笑しいんじゃないの? 来人がいなきゃ『私はとつくに死んでた』わよ!」

——興奮し、涙交じりにそう心から叫んだディエナは、部屋に反響するくらいに気持ちよく叫んだというのに浮かれたりはできない。

そして、質問に無意識に答えていた事にも気付けない。

3. 順位一3 (前書き)

- ・ 南條来人、？
- ・ デイエナ、ファーストと対峙。

3. 順位—3

ディエナの叫びを聞いたファーストはふと表情をニュートラルな、少し力の抜けたようなものにして、ディエナからやっと視線を逸らして考えるように天井を見上げて溜息を吐いた。

なによ、とディエナが不満気にファーストを睨み付けていると、ファーストがそれに気付いたかの様に丁度良いタイミングで視線をディエナへと視線を落した。勿論、ディエナはそんな事で視線を逃がしたりはせず、無機質な視線と鋭い視線が重なり続ける微妙な空間がそこに映る。

と、その状態でファーストが口を開いた。

「君はいらない。すぐに帰らせよう」

と、予想外の、絶対に予測できない答えが落されてディエナには受け止められない。世界が減る瞬間を見てしまったかの様な、驚愕した、言ってしまったえば間拔けな、力の抜けた表情を見せてしまう。

「帰って……良いって……、え？」

ディエナ自身、こんな場所から素直に「逃げ出せない」だろうな。と思っていた。実際、あんなバケモノや怪獣に襲われて、ろくに自己紹介もしないで質問を強制させるような人間に会話を強いられて、完全にファンタジーなこの現状で、「帰ってよい」なんて言葉は幻聴かと疑ってもしかたない。それにディエナは南條来人に守られて、拉致されてなんとかここまで来て、このファーストとやらと会話した。している。

その短いような長いような時間でこれといった行動をディエナは起こしていない。そんなディエナが「帰ってよい」といわれる理由は、

「そうだ。『ご両親』に向かいに来させる」

「パパとママを？」

「そうだ。ここは一応日本だが少しだけ『遠いからな』」

やはり、おかしい、とディエナは思う。

正直、この場にいるから、という先入観を抜いて考えてもこの状況は『裏の事実』だ。ファーストがここは『日本』だと言うが、信じる情報ではない。が、国境等関係なしにこれは『危険な状況』なのだ。ゾンビに、特撮ライクな怪獣。こんなバケモノ達が存在するなんて世間は間違いなく認めていない。そんな光景を見たディエナを易々と『逃がす』だろうか。

複雑な心中が表情に出て、ディエナは気付けばファーストから視線を逸らして俯き、一人で考えに耽っていた。

(……。ありえない。こんな事が地球のドコだろうと起きているのよ？ もし私がこの場所で見た事を誰かにリークでもしたら……。最悪戦争よ。それだと言うのにこのファーストは私を帰らせるですって？ 何が目的なのよ……)

「心配しなくて良い。いや、これは私に向かって言う言葉か」

まるでディエナの心中を分かっているかの様な言葉がファーストの口から漏れてディエナに落される。

「心配？」とディエナが眉を潜めて聞くと、

「そうだ。簡単なことだ。考えるまでもない。CGで作った様な怪獣に絵に描いた様なゾンビ共、謎の施設にファースト等と名乗るアジア人。そしてその場所に拉致された君。これらの情報を君がどこかにリークしたでしょう。……、」

一瞬、深呼吸する様な間が空いて、

「誰が信じると言うのだ？」

言い切った。

ディエナを見下ろす表情は相変わらずの無機質な無表情だが、どこか不敵に笑いを見せているかの様にも思えた。ディエナはそんなファーストの言葉に外連味を感じつつも、そうか、と納得させられ

る。

ディエナの表情を見下ろしながらファーストは続ける。

「君は『選抜』だ。私達の方で内情は調べさせてもらっている。君のご両親が『資産家』で君は所謂令嬢。確かに、一見すれば権力があり、国を動かす発言が出来てしまうかもしれない。だが、そんな君が見ただけの状況を誰が信じる？　ありえない状況だ。絶対に」
今度こそ不敵に笑って見せて、「誰も絶対に信じない。それに私達も情報を一切漏らさない。漏れても心配はない。この機関は情報を掻き消すだけの映画に出てくる様な組織だ。そもそも、私達以外で私達の存在を証明できる人間、いや、証拠品、は存在しないのだ」
ファーストは、フン、と最後に鼻で笑ってまで見せた。

「……、確かに。そうね」

納得、全て納得してしまったかの様にディエナは呟いた。――が、ディエナの心中では疑問が渦巻いていた。

気付いていないことがあった。ディエナではなく、ファーストに、だ。

(こいつ……『騙されてる』?)

ディエナがそう気付いた、その時だった、
開くはずがないであろうこの部屋唯一の扉が、シャツと鋭利な音を立てて開いた。

当然、二人の視線は横に流れてそちらへと向かう。

ディエナは見逃さなかった。一瞬だけ、ファーストが驚いたような表情を見せたことを。

「ディエナ！」

部屋に、低めのハスキーボイスの叫び声が轟いて、ファーストを威圧した。

気付くのは簡単だった。そう、ただ見れば良いだけだった。今まで気付かなかったのが不思議なほど、簡単、容易いことだったのだ。「——ッ!？」

南條は思わず絶句した。見てはいけない現実を見てしまったかの様に、息が止まるかとも思った。実際、数秒間南條の呼吸は止まっただろう。それ程の光景が、南條の目の前——あの切り裂かれた左腕——にあった。

「? ああ、今気付いたのか」

セカンドは振り返り、後方から付いてきていた南條の絶句した表情を見て少しばかりおもしろそうに言う。この様子から、セカンドは知っていたと伺える。そんな事が分ければ南條はすぐにでもセカンドに飛び掛って殴り倒していただろうが、今の南條はそんな事に気を回す余裕を全く持たない。

——切り裂かれたはずの南條の左腕が、漆黒に染まり形を作っていたのだから。

3. 順位一4 (前書き)

- ・ 南條来人、セカンドと共に行動。
- ・ デイエナ、ファーストと？と接触。

3. 順位—4

よく見れば、左腕は完全に真っ黒に染まった訳ではないと気付けた。肘から手の甲まで伸びる二本の赤い線。ただ、赤い線と言っても、まるで血管を直接見ているかの様にその赤い線は流動を見せる。勿論、こんなモノが自身の腕に付いていて冷静になれるはずがない。

南條は勿論冷静さを取り繕うとはした。

ここで慌てて冷静さを失ってしまえば『ディエナ』の情報を探せなくなる。

だが、南條まやはりただの人間。限界があった。いくら場慣れしていようが、激痛が走れば人間は反射的に悲鳴を上げ、体を縮ませる。それと同じだ。いくら認識して受け入れようとしても、目の前のソレは明らかに人間にはそぐわない『異物』だ。そんなモノをいきなり自分の体の一部だと受け入れられる人間等存在しないだろう。

「なんだよコレはッ！！　こんな……ッ!？」

「君の左腕だろうに？」

南條の悲鳴、戸惑いにセカンドはわざと挑発する様な楽しんでる事を主張する浮ついた声色で南條に『認めさせてはいけない』現実を摩り込んでいく。

こうなるとセカンドがこの場の流れ、主導権を握ってしまう。

受け入れがたい現実が目の前から張り付いて休息も与えてくれない。南條の左腕は、『左腕』でしかない。ただ、肘の上までが漆黒に染まり、流動する真っ赤な二本のラインが入った。

異常だ。だが南條はその腕が本当に自分の物だと理解していた。自身で動かして、この『力』を感じているのだ。疑う余地は理屈上はない。

「な……、」

言葉を詰まらせた南條はセカンドに驚愕して見開いた大きな瞳を

向けたかと思うと、

「何しやがった!？」

瞬間、ギッ、と視線だけで人命を殺めそうな鬼の様に表情を歪めて、南條は目の前のセカンドに両手を伸ばし、胸倉を掴みあげた。そのまま押し、廊下の壁を壊しても可笑しくはない勢いでセカンドを叩きつける。

「……………」

それでも何とも言わないセカンドに向かって、南條は我が儘な子どもがだだをこねるかの用に、不満をセカンドにぶちまけた。

「テメェ……!! この墨みてえな左腕は何だよ! お前等が何かしたんじゃないのかよ!？」

ギリ、と忌々しげに齒軋りして強烈な視線を数センチという距離で向けられるセカンドはそれでも、どこか面白そうにしているかと思えた。不敵に笑っているような——実際はそうでないのだが——そんな雰囲気、そんな余裕がセカンドにはあった。

興奮して息を荒げている南條でさえ、気付くほどのモノだ。

「……ネメシス」

セカンドは、やれやれ、といった感じの溜息交じりの言葉を漏らした。

「は？」

「ネメシス。知っているか? 破壊神の事だ」

余りに得意げに、外連味たっぷりに言い切るセカンドが南條には不満の対象にしかない。

「だから何だってんだよ!？」

南條は感情のままにセカンドに怒鳴りつける。が、やはりセカンドの態度は崩れない。まるで、感情が自由に操作できるプログラムのような代わり映えしない細い表情。その表情に南條の本能は間違はなく違和感を覚えている。が、今の興奮した南條がそれに気付くはずもない。

——大体、今セカンドの首下を絞めているその漆黒の左腕の力が

単純に倍以上に増えている、という事にすら気付いていないのだ。そんな見て、体験して分からない事を知る余裕はない。

「……ネメシス。これがあの『バケモノ』や『怪獣』を作る生物兵器だよ」

「は？」

南條はこんな状況にしながら、常人とは比べられないほどに冷静だ。勿論、興奮し、落ち着けきれない所はあるが、常人が同じ立場にいた場合と比較して南條は冷静だ。冷静、だから予測してしまっただ。

（まさか……。映画やゲームみたいにゾンビなりバケモノなりを作る生物兵器……。最近兵器が存在するってこのセカンドは言いたいのか……。？）

「ちょ、ちょっと待てよ！　ンなモン存在だけで国際問題にまで発展する様なモンじゃねえか！！　そんなモノが……。」

南條の言葉は最後まで搾り出すことは出来なかったようだ。フェードアウトするかのように言葉は尻すぼみになり、最後の方はこの廊下に響きさえしない。無理はない。南條は自身で気付いているのだから。自分は、とんでもない状況に置かれたのではないかと。

（……、って事は。この左腕はまさか、）

思った時だった。まるで心が読めるといわんばかりの丁度良いタイミングでセカンドが僅かに口角を吊り上げながら、

「そうだよ。その左腕はネメシスに感染したことによって修復されたネメシスの力が宿った左腕だ！　しかも『特別製』のなあ！」

南條の、まさか、は意図も簡単に当たってしまった。一ピースしかないパズルを悪ふざけせずそのままクリアされた様な気持ちだったと思う。

ここで、また南條の頭は真っ白に――なりかけたが、南條はなんとか抑えた。ここが、チャンス、かもしれないからだ。奴は『特別

製』と吐いた。この『特別』にはきつと『殺せないほどの』特別な何かがある、と思えた。と、いうのも、この『ネメシスに感染した』左腕そのものが『特別』なのであれば、先程の『しかも特別製のなあ!』という言葉は不要になる。これは、きつと何かがあると南條は踏んだのだ。

――が、同時にもう一つの嫌な憶測が南條の頭から出て行かなくなってしまった。

(……、ここから逃がす気はないって雰囲気だな)

いくら胸倉を掴み、南條が睨みを効かせようが目の前のセカンドは動じない。赤子と対峙している、そんな、『負けない』といわんばかりの度胸だ。

「一応聞くけど、」

南條は嘆息して、セカンドの首下かた両手を外して下にダラリと垂らして、

「俺を逃がす気はないんだろう？」

答えは分かっている。南條もなんで聞いたのかと自身に言い聞かせてやりたくなる程に明白なことだった。勿論、返ってくる答えは、「当たり前だ。君が知っている情報だけでもソレは判断に至るだろう？」

南條に掴まれてグシャリと皺の寄ったスーツの胸元を治しながらセカンドは相変わらぬ様子で吐く。

不意に、「あ」とセカンドは思い出したかの様に続けて、

「一応言っておくが、あのディエナ・トワイライトとやらは帰宅できる可能性はある」

3. 順位一5 (前書き)

- ・ 南條来人、セカンドと共に行動。
- ・ デイエナ、ファーストと? と遭遇。

3. 順位—5

「……本当か？」

南條はまず、理由を聞かずに真意を問うた。自身の事など忘れて、あの綺麗なブロンドの少女の安全を心配した。だから、どうしてか？ 等と野暮なことは聞かずに本当か嘘か聞いた。

「あくまで、可能性だが、な。恐らく彼女は解放だろう」

ソレを答えることには差し支えないのか、セカンドは何か考えるように答えた。続けて、

「ともかく、君は出られないことには変わらない。行くぞ」

と、話を無理矢理に打ち切ってセカンドは歩き出す。

南條も、逃げればよい、とは考えなかった。この場所の事、バケモノ、怪獣の事、セカンドの事、ネメシスの事、全てが気になっていたのだ。このままセカンドへと付いていけば、何かがハッキリする様な気がしたのだ。

(……、この左腕の事もあるしな)

セカンドの後に続いて真っ白なこの空間を進みながら南條は左腕を見下ろす。見れば見るほど『異常』としか思えなかった。墨の様な、全く光の届かない暗闇の様な漆黒が指の先から肘の先まで続いている。少し手を返してみれば、流動する真っ赤な二本のライン。それは肘から手の甲にまで血管の様に伸びている。こんな異常でも、自身の腕だと南條は認識できていた。

セカンドが言うから、ではなく、自身の事だから、といった意味合いでだ。

「ここだ」

暫く歩いた後、一枚の今まで見てきたモノと同様の扉の前でセカンドは立ち止まって振り返った。

よくこんな見栄えしない似たような景色の中で目的地に行けるよ

な、とセカンドに無駄な関心をしながら南條は問う。

「ここが、何なんだよ？」

「実験場だ」

答えは質問が分かっていたと言わんばかりに早く返ってきた。

「実験場？」

南條は眉をしかめる。自身のイカレタ左腕。ネメシスを知るセカンド、そして、実験場。嫌な予感しかなかった。

「そうだ。勿論、君のその左腕……、」

セカンドが言いかけたところで、

「あー！ それ以上言うな！ 皆まで言うな！ 分かってっから」

南條が苦悩にもだえるような声を上げて発言を止めた。言葉そのまま、分かっているから必要なことだけ教えろ。という事だろう。

上手い具合にセカンドはそれを察したようで、表情一つ動かさずに溜息を吐いて答える。

「良い。ともかく、この部屋に入りたまえよ」

言うのと、セカンドは何一つ動きを見せなかったのだが、タイミング良くその扉が斜めにスライドして南條を迎えた。

部屋の先は、相変わらずの真っ白な光景が広がっていて広さを確認しづらい空間だったが、今まで見てきた部屋とは比べ物にならないくらいに広がった。言っても、あの怪獣と遭遇したスペースに比べれば全然狭い。だが、それなりの広さを誇っていた。

南條はセカンドを一瞥し、部屋へと足を踏み入れる。と、背後から足音が続いた。セカンドも入ってきたようだ。

振り返り、南條は訝しげにセカンドへと視線をやる。

「部屋の中央まで進みたまえよ」

セカンドは静かな、感情の起伏が全くないその声で一言、そうとだけ言って顎で南條を促す。

「……………」

ともかく、セカンドの指示に従わないことには何事も進まない現状であるので、南條は訝りながらもゆっくりと進み、部屋の中央ま

で進んで振り返る。振り返ると、部屋の入り口に立ったままのセカンドと目が合う。セカンドは無表情ながら、口角を吊り上げて嫌な笑みを見せているような雰囲気浮かべていた。

「で、俺は何すりゃ良いのよ？」

南條が聞くと、

「そのまま待機だ。必要な時に必要な事が起きる」

セカンドはフツと鼻で小さく笑い、そう返した。返して、そのまま斜めにスライドして開いた扉から出て行ってしまう。

「ちゃんと説明くらいしろよ、クソが」

セカンドが出て行ってから、南條は一人そう呟いた。

セカンドがいなくなったことで、この部屋には南條一人が残る。一応、と扉を確認するが、勿論開きはしなかった。部屋の中央に戻り、辺りを一瞥するが、やはり何もない。床や壁や天井が確認しづらい程の白塗りの空間でしかない。殺風景だな、と南條は思うが、黒塗りにされているよりは良いと思えた。

「……、で、俺はどれだけ待てばよいのだろうか」

言いながら、南條は真っ白な床に腰を下ろす。座って初めて床の固さに気付いて少しだけ損をしたような気分になる。

（ディエナはどうしてんのかな？　つか、俺が生きてるって事すらまだ知らないとか……、まあ、ディエナからすれば俺なんてただの偶然会った男の一人でしかないか）

南條はふとディエナの事を思い出して心配する。

セカンドは彼女は帰れるかもしれない、といった。もし本当にそうなら、そうなるべきだ、と南條は心から思う。南條は本当に、心底ディエナを心配していた。自分はまだしも、ディエナは一人になったら何も出来ない。少なくともこの状況では、と思っていた。

恐らく身近な人物であっただろうノーツとやらが死んでしまい、彼女は錯乱していた。あの状態であのバケモノや怪獣がいる場所に一人置かれても、死ぬ、他はないだろう。

（ディエナが脱出できれば良いか。まあ）

南條はここまで『異常』に足を突っ込んでしまったせいかな、少しばかり呑気になっていたのかもしれない。簡単に言えば、気が抜けている。だ。

そんな南條の気をひっぱたくかの様に、

『あー聞こえるか。南條来人』

どこからともなく、セカンドの声が聞こえてきた。

3. 順位一6 (前書き)

- ・ 南條来人、謎の実験場。
- ・ デイエナ、ファーストと？と遭遇。

3. 順位—6

南條は辺りを見回すが勿論何もない。が、少しばかり声が籠っていた事でどこかにスピーカーがあるのだろう、と予測を立てた。恐らくは、部屋を監視するカメラなんてモノもあるはずだろう。

「聞こえてるってーの。さっさとしろって」

少しの苛立ちを見せながら、南條はぶっきらぼうに答える。会話をしているはずなのに、視線のやり場がわからなくて妙にもどかしく感じた。

そんな南條を他所にセカンドは一方的に喋り続ける。

『今から「実験」を始める。分かっているだろうがその左腕のである。心して「かかる」ように』

一方的に振りかけられたその言葉だけが残り、プツリ、とその後、音声は聞こえてこなくなる。

南條には、その『かかる』という言葉の意味が理解できなかった。この実験に本気で取り組み、という事なのか、それとも、これから『敵が現れるから向かい撃て』という事なのか。普通に考えればまず前者が浮かぶだろうが、状況が状況だけにそうとは言い切れない。案の定、

「——ッ！！」

まるで、建物そのものを引きずるような音部屋中に反響して南條に襲い掛かった。なんだ？ と南條があたりを一望すると、真っ白な空間にポカリと大口を開ける『穴』を発見する。そんなもの、先程までなかったのは明白だ。壁一面全てを黒にしようかと思う程の穴が南條と対峙している。

「何……だ……、」

地が南條を揺さぶっていた。地震とはまた違う、何か、だ。

その原因が、その黒——穴の先から『こちらに向かってきている』と南條は本能で察知していた。

喉が奥から干上がり、背筋が凍って体が言う事を聞かなくなる。

必死に頭は回転させるが、それもいつ止まっても可笑しくない。決して、その黒――穴が怖いのではない。その先から得体の知れない何かが向かってきているからでもない。南條は、その、向かってきている何かから放出され続けている『恐怖の様な何か』に中てられているが故、これほどまで臆していた。可笑しい、とはいいい切れな

い。だが、狂っている、とはいいい切れる程だった。

金属を削るような音と、水々しい、新鮮な肉を床に貼り付けるような音が穴の向こうから南條に襲い掛かる。

（――ッ!?!）

穴の暗闇から、僅かにその一角が見えた気がした。

南條の緊張はその瞬間に極限にまで跳ね上がった。心臓が高鳴り、何か気持ちの悪い物が腹の奥底からこみ上げてきて、吐き戻してしまいそうにもなる。

直後、『あの腐臭』が南條を襲った。――が、吐き戻す余裕すら、南條にはない。

穴の奥から、暗闇を引き剥がすようにその姿はフェードインしてくる。

その姿は――山、とでも言えばよいのか。

身長は恐らく二メートル前後。一七〇はある南條が見ても見上げなければならぬ大きさ。そして、頭から足元までが三角形の体。継ぎ接ぎだらけの布の様なモノを頭からかぶせられているのだが、足と腕以外は全く露出せず、防具の様な雰囲気を持っている。顔は勿論確認できないが、何故だか南條の頭の中では皮膚を剥がされた文字通り生身の人間の姿が浮かんでいる。布切れの途中から露出する明らかに人間の物ではない筋肉質な真っ黒い腕。右腕の方には、その姿によく似合ってしまう南條の身の丈程もある巨大な『マチェット』が握られていた。

――勿論それは、南條を叩ききるための物なのだろう。

「――ッ!?! な、なんだよコイツ……ッ!?!」

自然に、そんな言葉が南條の口から漏れていた。無理はない。本当に、目の前のそれは『何なんだ』と言うしかないようなソレなのだから。

ディエナと共に遭遇した怪獣よりも、ソレは異質に思えた。

ソレは穴から完全に身を出し切ってこの南條だけがいたはずの部屋に入ると同時、ソレが来た穴は最初からなかったかの如くスツと閉じてしまった。その光景は明らかに現実的な光景ではなかったが、南條の視線は目の前のソレに刺さりっぱなしで、そんな光景に気が付けなかった。

『それは、^{ブツチャー}『肉屋』だ。試作品だが、中々の戦闘力、知性を持つ兵器だ』

南條が怯えながらもソレと対峙していると、不意に先程のスピーカーから声が部屋に響いた。

止まりそうな意識を必死に覚醒させ、南條は視線を目の前のそれに刺したまま響くセカンドの声に耳を傾ける。

『君の能力はそれで確かめさせてもらうよ。死んだら解剖して培養液漬けにしてシツカリと保存してやるから安心したまえよ』

(――聞かなきゃ良かった……)

「俺の能力ってなんだよ!？」

ともかく、と南條は適当な質問を搜して投げかけた。こうでもない、と、南條の先で体を揺らしながら待機する肉屋が襲い掛かってきそうで、恐ろしかった。

――が、返事は一言だけ、

『実験を始める』

とたん。張り詰めていた空気に緊張に視線に、何もかもが爆発するように膨れ上がった。

ズン、と地を揺るがしたのは間違いなく肉屋の一步である。^{ブツチャー}南條もソレを見逃しはしなかった。

「ちよ！　ちよつと待て待て待てえええええ！　こつち来るんじやねえよバケモノ！！」

慌ててそう叫ぶが、肉屋に届くわけがない。

どう見たって、肉屋はあの怪獣達と同種、つまり、明らかに人間ではないのだから。

肉屋が一步地を踏みしめるたびに、地が僅かに跳ねる。

南條は勿論後ずさるが、そんな行為を繰り返していればいずれ追い詰められる。何故ならここは、真っ白な空間だから。分かりずらいが、一つの部屋なのだから。

案の定、数歩下がったところで、南條は追い詰められた。

南條の背中と真つ白な壁が衝突して、軽い音になるがそんな音はブツチャー！

肉屋の足音になかった物にされてしまう。

冷や汗が額から流れ落ちて頬を伝い、顎から真つ白な床へと落ちて確認できないほど小さく跳ねる。

肉屋がまた一步、と踏み出して、南條と肉屋の距離は二メートル
ブッチャー
ブッチャー
もなくなってしまうた。

「あ……、うあ……」

南條でさえ、この状況では冷静になどいられなかった。ツンと鼻に付く腐臭にだって堪えられるほど、——恐怖に震えていた。

そんな南條を嘲笑うかの如く、ゆっくりと、だが、しっかりと、力強く、肉屋は巨大なマチェットを頭上へと振り上げて見せる。南條の視線はそれを追従するが、それすら追いかかった。

南條の視線がやっと天井を映したと同時に、南條の視線が追つていたはずの物は南條視界を通り過ぎて、床にその先を叩き付けた。

グチヨリ、と肉々しい音が部屋に反響する。

「ぐ、が ああああああああああああああああああああ
あああああああああああああ！」

途端、南條は激痛に揺さぶられた。

3. 順位一七（前書き）

- ・ 南條来人、実験場で肉屋と対峙。
- ・ デイエナ、ファーストと？と遭遇。

3. 順位一7

気付く余裕なんて吹き飛んでいた。

^{ブツチャ}肉屋の叩き下ろした巨大なマチェットは、その先を南條の左肩にめり込み、そのまま、肉をそぎ落とすかの如く、縦一線に気持ちよい程スムーズに振り下ろされたのだった。南條の爪先の数センチ先の床を砕いたマチェットの先には、目痛い程に赤い液体が付着している。

——が、傷は浅かった。

南條の体はまだ断ち切られたわけではない。マチェットの先が南條の体の向こう側を通ることはなかった様だ。

が、それでも、常人に堪えられる様なモノではない。

南條の切られた左半身からはこれでもか、と鮮血が噴出し——。

「……、ッ！ って、おい！ なんだよコレ！？」

痛みが一瞬で消えた。そう言うのが億劫なほどの傷跡があったはずだが、南條の感じた痛みはほんの一瞬で消え去ってしまったのだ。しかも、ろくに出血がない。^{ブツチャ}肉屋の握る巨大なマチェットの先には確かに南條のモノである鮮血が付着している。が、南條の切られた身体からは——全くと言って良い程に出血がなかった。もちろん、僅かにはあるが、深く抉られた身体ではまず有り得ない量でしかない。

^{ブツチャ}驚く南條に肉屋は追撃を掛ける。

ドッ！ と空気が弾けて部屋中に飛散した。^{ブツチャ}肉屋がマチェットを横一線に振り切った音でしかなかった。直後、さらに鈍い音が部屋中に反響して広がった。

「ぐっ、あ、」

^{ブツチャ}南條の横っ腹に、肉屋のマチェットの刃が叩き付けられた音だった。

——本来なら、常人なら、この時点で身体は吹き飛び、浮いてる間に身体はマチェットが叩き付けられた部分を中心にして真つ二つ、それ以上に分解され、地に戻るときには命は消えてしまっているだろう。

が、南條はそうはならなかった。

ブツチャー
肉屋の一撃を横つ腹に喰らった南條は大砲に撃たれたかと思うような一瞬で吹き飛び、部屋の壁に全身を叩きつけて床へと落ちた。

「……、ぐ、があああッ、ああ……」

それでも、南條は意識を失うことすらなかった。

漆黒の拳を真つ白な床に叩きつけ、なんとか立ち上がる。

（なんでだよ……、何で俺はこんな……）

南條は嫌な予感無理矢理に拭い去って、ブツチャー
先程肉屋に縦一線に切られた左肩から真下に走る傷跡を見下ろす。見下ろすと、そこには「うわっ……、自分の身体だつてのに、気持ちが悪いな……」

まるで、互いが呼び合うかの様に、肉と肉が自然にくっ付き始めている、早送りの様な光景を目にしまった。

が、南條はそれを見て『安心』した。

なぜか、簡単だ。これだけの『異常』を体験してしまえば、これ以上何が起きても『どうしようもない』と思える。最初から『ふっきていた』南條の背中を押せる経験になる。それに、これだけの攻撃を受けて尚、生きて入れるこの身体があれば『バケモノ達なんて怖くない』。これだけの治癒能力があれば、ブツチャー
肉屋でさえ南條を『殺せない』だろう。

「……ハハッ、良いね。もうどうとでもなれだわ。こんな幻想的な現状」
ファンタジー

「……………」

ブツチャー
立ち上がった南條の方へと向き直り、肉屋はマチェットの先を真つ白な床に引きずり、赤い線を描きながら南條の方へとゆっくりと向かってくる。

（よっし……。とりあえずは逃げるか倒すかだな……）

南條は肉屋が自身に届くまでの間に辺りを一瞥する。

この部屋から出れるであろう出口は二つ確認した。一つは南條がセカンドに迎えられたあの斜めにスライドして開く扉。もう一つは肉屋が出てきたあの壁にあるはずの穴。

どちらかでも開けることが出来れば、南條は『逃げる』という選択肢を取りたいところだが、そうはいかなかった。

あの扉が閉まって開かないことは確認済みであるし、肉屋が出てきた穴はすでに壁に戻り、存在すら感じさせない。

と、なると、

(戦うしかないってか……)

正直、南條は肉屋と戦うことを嫌だとは思っていなかった。勿論、最初はそう思って、ひたすらに臆していたのだが、『ふっきた』今の南條はそうはならない。

むしろ、『試したい』ことがあって、気になってしかたがなく、ウズウズと身体を興奮で震わしている様な状態だった。買ったばかりのバイクを、乗り回したい、そんな気軽な気持ちだったかと思う。「よっしッ!!」

南條は自身を奮い起こすように、右手に左手の拳を軽く打ちつけた。

空気が炸裂する心地よい音がそこから部屋中に拡散する。

少し痛すぎると思えるほどの痺れを右掌に感じながら、南條は『左拳』を握り締めて、

「よし。ぶっ飛ばしてやんよ! 覚悟しろよ肉屋とやら!!」

南條はゆっくりと自身に向かってくる肉屋目掛けて、肉屋よりは早い速度で歩み始めた。

3. 順位ー8 (前書き)

- ・南條来人、肉屋と戦闘。
- ・ディエナ、ファーストと?と遭遇。

3. 順位—8

ゆつくりと、確実に進む肉屋に、^{ブツチャ}先行きなど考えず、ただ己の信じるモノだけを目指して進む南條。

^{ブツチャ}肉屋と南條の距離が五メートルなくなったその時だった。

「お、おとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおお！」

^{ブツチャ}南條は叫び、駆け出した。

^{ブツチャ}目の前の肉屋に、全身全霊の力を込めた左拳の一撃を叩き込むために。

^{ブツチャ}肉屋も南條の加速に反応し、マチェットを高く振り上げて南條を迎え撃つ。左拳を引いた南條はあつという間に肉屋の懐へと到達した。その瞬間に、^{ブツチャ}南條の頭目掛けて肉屋のマチェットは振り下ろされる。

グキリ、と嫌な音が小さく鳴った。

「……………」

^{ブツチャ}南條の左拳が、肉屋の首を——掴んだ。

何故だかは自身でも理解していないようだ。南條は間抜けな表情を浮かべている。が、南條は確かに、拳が到達する直前で指を思いっきり開き、肉屋の『ない』首を掴みかかっていた。体重や形から^{ブツチャ}掴んだとしても、どう見ても持ち上げることはできないその肉屋を、南條は持ち上げようとしていた。左腕一本で。

南條の意思がないわけではない。違う。勝手に手が動いた、操られた、と例えるのは適切ではない。そうではなくて、南條が『最適だ』と考え付くはずのない知識外の『最適』に思考よりも先に身体が気付き、そっちに動いてしまう。遅れて、南條も少しだが理解を

追いつかせる。まるで肉屋ブッチャーの弱点が分かっているかの様な、今まで
もかんなバケモノと戦ってきたかの様な、経験者の動きになった、
とでも言おうか。

「お、おとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおお
おお!!」

左腕一本でこんなデカ物を持ち上げられるはずはない。――何故
だか、そうは思えなかった。

南條の左腕に有り得ないほどの力が宿ったその瞬間、肉屋ブッチャーの右手
にしっかりと握られていたマチェットは肉屋から離れ、南條のすぐ
横に落ちて少しだけ転がった。

まるでビルが倒壊するかの様な衝撃的光景だった。

肉屋ブッチャーの身体は、南條の漆黒の左腕に支えられ、しっかりと宙に浮
かされていた。

「……ハハッ、これじゃ俺がバケモノじゃねえか……」

自虐的に笑み、そう吐き捨てた南條は、苦しんでいる素振りすら
見せない肉屋ブッチャーを単純に『殺さなければ』と思っていた。

これは、南條がネメシスに感染したからなんかではない。南條元
々の人間性がそう南條に思わせたのだ。南條は創作物語の主人公で
もなければ正義の見方でもない。それに、生まれつきの茶髪のせい
でどちらかといえば『危ない』連中に絡まれることの方が多かった。
そんな南條が『殺さなければまずい』と感じたのだ。

だったら、殺すほかない。

南條は静かに、抵抗を見せない肉屋ブッチャーを睨みつける。静かに、だが、
哀れむかの様にも思えた。

（このデカ物……、見た目はこんなんでもやっぱり、『人間性』を
感じちまう……。やっぱり……人間から作られた、って落ちなのか
ね……）

が、元が人間だろうが、ベースが人間だろうが、南條には関係な
い。

殺す。それ以外の答えは見つからなかった。

三角形の身体の首であろう部分に、南條の漆黒に染まった指がめりこんでいる。それは、肉屋ブッチャーの体を持ち上がるための力加減でそうなっていたのだが、今からは違う。

南條の指は肉屋へとズブズブと沈んでいく。それはそう、殺すために。

南條の漆黒の左腕に煌々と煌く赤い二本のラインは目も当てられないほどに輝き、流動していたのだが、南條がそれに気付くよしもない。

「……………」

南條の指、掌の隙間から徐所にだが、少しずつだがドス黒い肉屋の血液が漏れ出した。数秒しない内にそれはあふれ出し、持ち上げられている肉屋ブッチャーの足元には血溜まりが出来上がる。

「はあ……………」

南條は一度目を伏せ、溜息を吐き出して、

「肉屋ブッチャーよお」

ギッ、と目を見開き、肉屋ブッチャーを睨み付け脅し、

「流石に潰れりゃ、死ぬだろ？」

問う様に、嘲笑う様に南條は言い、『左腕に渾身の力を込めた』。グチャリ、とつぶれる肉。骨。一瞬で潰された肉屋ブッチャーの首からが三六〇度に噴水の如くドス黒い鮮血が噴出して飛散する。勿論南條にも吹きかかるが、南條は特別気にしてはいなかった。ネメシスに感染してしまう、と考えるまでもない。南條は既にネメシスに感染しているのだから。

南條がそのまましていると、あまりに細くなりすぎた接続部くひが身体の体重に負け、南條が掴んでいたところから下は腐った林檎の様に落ちてしまった。

南條はそれを確認し、肉屋ブッチャーの落ちた身体が動かないことを確認して、掴んでいた肉屋の首を適当に放り投げた。あの継ぎ接ぎだらけの布を引っ剥がして中身を確認しようかとも思ったが、それは出来なかった。南條の本能が何かを感じ取ったのだらう。それまでには

至らなかった。

足元に血まみれで転がる肉屋ブッチャーの物だったマチェットを南條は左腕で拾い上げる。マチェットは南條の身の丈ほど、いや、それ以上の長さを誇る。勿論、長さ故の重さもあり、南條の右腕では持ちきれないのだ。

刃の背を肩に預け、南條適当に天井を見上げ、叫ぶ。

「悪いけど、付き合いきれねえての！　こんなバケモノと対峙させられて正気でいるのが自分でも不思議なくらいだ！　お前、殺しに行くから」

南條は言い切って、暫く天井を睨みつける。

今の言葉はセカンドに向けて放ったモノだ。返事を待っているのだ。

が、返事は返ってくる様子はない。勿論南條にセカンドの姿を確認する方法はなく、ただこの叫びを聞いていないだけなのかもしれないが、南條はそれでも良いと思っていた。

3. 順位一 9 (前書き)

- ・ 南條来人、肉屋を撃退。
- ・ デイエナ、ファーストと? と遭遇。

3. 順位一9

南條来人はマチェットを担いだまま、出口の扉へと向かう。

向かって――、

「つたくよ！」

マチェットを、左腕の力一杯に振り下ろし、扉を叩き斬った。

叩き斬られた扉は、ぼっさり真つ二つに斬れたりはしなかったが、巨大で重量のあるマチェットを思いっきり叩き付けられたからか、叩き付けられた場所を中心に放射状に亀裂が入っていた。一蹴りしただけで吹き飛んでしまいそうなほどに細かい亀裂だと見て分かった。今でも、パラパラと僅かに破片が床に落ちている。

南條が亀裂の中心に蹴りを入れると、扉は朽木の様に簡単に姿を崩し、堕ちてしまう。その後も何度か蹴りを入れて、南條一人が通れるほどに穴を広げて、南條は扉にできた穴を潜って部屋の外へと出る。

視界に入るは飽きるほどに真っ白な廊下。その廊下に並ぶ無数の扉。

「まずは……、ディエナを探すか、」

一瞥しようが、見渡そうが変わらない景色に溜息をついた南條は、マチェットを肩にのせてゆっくりと歩き出した。

ダガンッ！！ と銃声が炸裂した――そう気付いた時にはファーストの額には焼け焦げた穴が開き、締りの悪い蛇口のように僅かに鮮

血を噴出しながら、ファーストは倒れていた。

ディエナはすぐに開いた入り口へと視線をやる。やるとソコには……、

「パパ……!？」

南條と比べても高い身長、シッカリした筋肉質な体格。身に付ける茶色のコートはどこか探偵らしさを窺わせる。初老の、白い髭と髪が綺麗な男性が、片手に拳銃を掲げ、そこにいた。

——ディエナ・トワイライトの実の父親、クロウリー・トワイライトだ。

「パパ？　なんでココに……？」

問うディエナをクロウリーは無視して、ディエナの横を通り過ぎて、倒れたファーストの側まで行く。側まで来ると、足元のファーストに手にした拳銃の銃口を落とし、ダン、ガン、ダガン、と何度も何度もトリガーを引いた。その度、ファーストの動かないはずの身体が僅かに跳ね、人体の恐ろしさを感じさせる。

そこまでしてクロウリーはやっとディエナへと振り返り――、

「おおおお!!　ディエナ!　無事だったか!？」

ディエナに近づき、思いつきり抱きしめた。

「ちよ、わ、ぱ、パパ!　大丈夫だから離して!」

誰が見てるというわけでもないのに、ディエナは顔を真っ赤に染め上げてバタバタと子どもの様に抵抗してクロウリーの腕から抜け出す。

「もう!」

「なんだ、ディエナ……、反抗期か……。青春だな……」

「私はもう二一よ!？」

場違いにしんみりするクロウリーにディエナは叫ぶ。

クロウリー・トワイライト。ディエナの父親であり、とある――『殺し屋』だ。決して資産家などではない。そう、ファーストの勘違いはここにあった。こんなおぞましい職業でありながら、強力な権力と力をクロウリーは持っている。いや、だからこそ、クロウリ

ーは安全圏での殺し屋が出来ているのだ。殺し屋の安全圏——それは身分の差異を隠すことだ。だから、ファーストにも『資産家』なんて情報がいつてしまったのだろう。

この小さな間違い一つが、こんなチャンスを作ってしまったのだ。ゴホン、と咳払いをしたクロウリーが言う。

「とにかく、帰るぞディエナ。ノーツはどうした？」

またか、とディエナはしかたないはずの現実には呆れた。

「ノーツは、死んだわよ……」

ただ、そうとだけディエナはいう。無意識に視線を床に落していたが、彼女なりに強がってはいたのだ。それに、実の父親であるクロウリーが気付かないはずがない。

クロウリーはこれでもか、と明るすぎる笑顔をディエナへと突き出し、

「人間いつ死ぬかなんて事は分からない。私の仕事上ハッキリとそう言いきれぬ。だからな、ディエナ。不謹慎でしかかもディエナの気持ち逆撫でしてしまうかもしれないが、私はディエナが生きていたことが嬉しくてしかたがないよ」

全く嘘や不自然さを感じさせない笑顔が、ディエナのすぐ目の前にある。ディエナが顔を上げれば、その笑顔は嫌でも目に入る。

しばらく見ていなかった、優しく、強い父親の笑顔。

「……、うん」

ディエナは、父親の言葉に温かみを感じた、決して、「執事なんか代えを作れる」とは言わず、ディエナの生存を単純に喜んでくれる。そんな父親が自身の父親でよかったと思えた。

「よし、じゃあ帰るぞ。ヘリを用意してある」

「ちよっと待って」

さあ帰ろう、とディエナの手を引いたクロウリーだったが、娘に手を振り払われて頭上にクエスチョンマークを揺らす。

「どうした？ 『忘れ物でもしたか？』」

クロウリーはそう聞く。ディエナの心配ではなく、恐らくそれ以

外であろう『忘れ物』とやらの心配。

ディエナはクロウリーの実の娘だ。クロウリーだってしっかりと父親をやってきたのだ。娘の可笑しな様子にはすぐに気付く。それに、ある程度の予測も立つ。

「……、私を助けてくれた人がいるの」

か細い、泣きそうな雰囲気丸出しの声色でディエナは呟く様に、俯いたまま言う。

助けてくれた人、言わずもがな、南條来人の事であろう。彼がいなければ、ディエナはとくに『死んでいた』。こうやってクロウリーと生きて再開することはまずなかったであろう。

——ディエナは決心する。今度は、私が助ける。と。

ディエナの瞳にシツカリ、ハッキリとした決意が宿ったことにクロウリーは気付く。

「助けに行くのかね？」

微笑ながら、クロウリーは問う。答えなんか、分かりきっている悪戯な質問だ。

クロウリーの問いに、ディエナはしっかりと、深く頷いて、

「当たり前よ。アイツがいなければ私は今頃死体だったのだもの」

しっかりとした声で、ディエナは言い切った。

自分が死んでいたかもしれない、なんてそう簡単に言い切れない。が、ディエナはそれを持ち越えたのだ。単純にクロウリーという強力な力が手元に来た、という安心感からの行動でもあるが、ディエナは南條来人に会いたいと思っている。自身を救った人間。いうなれば命の恩人だ。そんな人間に礼もなしで、ましてや見殺しにするなんてディエナのプライドが絶対に許さなかった。

例え、この場所がバケモノや怪獣が犇く世界だとしても。

3. 順位—10（前書き）

- ・ 南條来人、肉屋を撃退。
- ・ デイエナ、クロウリーと共に。

3. 順位—10

「では、さっさと助けに行こうじゃないか！」

ディエナの決心にクロウリーは大賛成のようだ。もとより、クロウリーは一人娘のディエナを溺愛しているのだ。その娘の反対するはずがない。クロウリーは銃をコートの懷へとしまい、これでもかと笑って見せる。

「……、でも、どこにいるのか分からないのよねー」

ディエナは『問題ではないけど』といった感じで言う。もし、分かれば早いんだけども、という様子である。決して、落ち込んでいるわけでも、絶望しているわけでもない。

道が分からなかるうが、クロウリーがいれば大丈夫だ、という自信があった。心強さがあった。

クロウリーは、それ程の人間だ、とディエナは知っているのだ。

「道か、……この施設内部のデータはないからな……、それどころか存在も今日ノーツの位置情報を追跡して初めて知ったくらいだ。探しても道ののったモノなんてないだろうな」

考える様にクロウリーは言う。

ディエナは勿論、クロウリーを疑ったりはしない。

「そうよね……、まあ、行くわ」

「その粹だ！」

ディエナとクロウリーは一度だけ倒れたファーストに視線をやる。風穴が無数に開けられ、そこから鮮血を流した後が伺える血の後が彼の下に出来た血溜まりに繋がっている。死んでいる、はずだ。これだけの銃撃を受けて、生きているはずはない。瞳孔だって開いている様に思える。間違いない。

——が、ディエナもクロウリーも訝しげに表情を歪める。

どう考えたって死んでいる筈なのに、何故かそのファーストは、生きている様な気がして。

「不気味ね……」

「そうだな……」

二人は現実から目を背けるかの様に視線をファーストから外して、部屋から出て行った。

「……………」

ディエナ、クロウリーが出て行って、血溜まりに浮かぶファーストの姿だけが残るこの部屋。二人がいなくなり、静かになったこの部屋で、

「……ああ、」

起き上がるモノがいた。

静かに、背中から頭から床と張り付いた身体を引き剥がす様に鮮血を引き、その姿は静かに立ち上がる。立ち上がると、ボタボタと大粒の血の塊が床に張った血溜まりに跳ねて部屋中に嫌な音が反響する。

そんな白に浮かぶ赤の上に立つ男は――勿論、ファーストだ。

首に手を当て、数回首を鳴らして「はぁ」と溜息を吐き出して『呆れた』。

スーツを汚したこの血をどうしてくれるか、など、この時ファーストはまだディエナ達の事など気にしてはいなかった。そんな事、どうとでもなる、といった、そんな余裕を感じられる。

数秒して、ワンテンポ遅れて、ファーストはやっと、

「あの男……、ディエナの父親クロウリー・トワイライトとやらか。何故この施設まで辿り着けたのだ……？」

ファーストはまず、追うよりも前にその事について考えた。

事実、クロウリーは知らないはずのこの場所に来た。そもそも、ディエナがこの場所にいる、という事に感づくのが早すぎる。なんといったって、ディエナ等を連れ来てまだ『一日』しか経っていないのだ。一日程度の不在ですぐに搜索し始めるだろうか。それに、例え搜索したとしても一個人が見つけることは出来ないはずだし、それどころか国一つ動いても気付かない様な場所にこの施設はある。それなのに、あのクロウリーはこの施設に踏み込んだ来たのだ。たった、一日で。

これは、ファーストがクロウリーを『ただの資産家』だと勘違いしているからこそ起きた……と、いう訳ではない。もしファーストがクロウリーの素性を正確に把握していたとしたら、まずファーストはディエナを拉致したりしないだろう。それ程の差が、この時点であつたのだ。

「……ただの資産家な訳がない」
勿論ファーストはすぐに気付く。いや、冷静になれば誰でも気付ける。

調べの付かないはずの施設をたった一日で存在から場所から見つけ、拉致された娘を見つけ出し、何も分からない状況に直面してすぐに、銃弾を放つたのだ。とてもじゃないが、常人が出来る行動ではない。逸脱し過ぎている。

そもそも、ただの資産家ごときが何の確認もなしに一瞬で敵を見分けて銃を放てる訳がない。

いや、ただの資産家……ではなくとも、常人ならまずそんな行動はとれるはずがない。最終的に結果がそうなったとしても、必ずどこかで戸惑いを見せるはずだ。

それが全くなかったのだ、あの男には。

ファーストのような常人でない人間には確信が生まれるほどに分かる。あの男が……、似たような人間だと。

3. 順位—11（前書き）

- ・ 南條来人、肉屋を撃退。
- ・ デイエナ、クロウリーと共に南條を搜索。

3. 順位—11

(……ともかく、)

ファーストは懷から無線機の様な何かを取り出す。言い切れないのは、そのデザインがあまりにも従来の無線機らしい無線機から離れすぎた曲線の目立つ近未来的なデザインだったため、一見しただけではハッキリと言い切れないのだ。

「私だ」

ファーストはその『無線機』を口元に持っていき、部屋に響かない程度の静かな声でマイクの向こうへと呼び掛ける。すると、間もなく返事が返ってくる。若い男の声の様に思える。

『はい』

「南條来人、ディエナ・トワイライト。それに……、この場にいないはずのディエナ・トワイライトの父親であるクロウリートワイライトが逃げ出そうとしている。イロイロと想定外の事が起きすぎた。絶対に外へは逃がすな」

挨拶もなしに、ファーストはただ一方的にそう淡々と言う。

『了解しました。補足できています』

「頼んだぞ」

通信が切れる感触はないが通信は終わったらしく、ファーストは無線機を懷へと戻して、扉を見つめる。

下の人間に今、指示は出した。が、勿論それでファーストが退屈する理由はない。ファーストもしっかりと『仕事』をする。

(とりあえず追って、……捕まえなければな)

生かすにしろ殺すにしろ、という事らしい。

ファーストは調子を整えるように咳払いして、部屋を出て行った。

「気持ちが悪いよな」

南條は一人、吐き捨てる様に呟いた。

白に斑点を作る赤が際立つ元はただの白い空間だったどこかも分らない廊下。マチェットを担ぐ南條の周りには、無数の『死体』が転がっている。どのソレも、内臓を吐き出していたり、肉を通り越して骨まで露出していたり、と、かなり酷い状態である。

勿論、この『死体を殺した』のは南條だ。生きるために、殺した。マチェットで叩き斬った。が、ここまでの状態にしたのは南條ではない。

この死体共は、最初から『こんな状態』だったのだ。南條の視界に映ったその時には既にもう、その状態だった。

内臓を露出し、骨を見せ付け――が、まだ生きているという、まさに『ゾンビ』な状態で。

「やっぱりこいつら……、ゾンビ、なのか……？」

南條は死体の一つに目をやって呟く。

ここまでの光景を見せ付けられると、流石に疑えなくなってきた、といったところだろう。いくらゾンビがファンタジーな存在だからとはいえ、この状況は間違いなく『ゾンビ』を物語っている。それに、南條は現実離れた怪獣――RZ01を目撃だってした。現実には、こんな異常な存在がいる、という証拠は自身で見えてきた。それには、南條事態もその証拠だ。鉈を担ぐその左腕――漆黒にそまつた左腕には尋常ではない力が宿っているのだ、と手に取る様に南條には分かる。

転がる死体を跨ぎながら、南條は進む。

血溜まりを踏んだのか、南條が歩いた跡は、血で描かれた靴の跡

が残っている。

（それにしても、可笑しいな。ディエナと逃げてきた時にはまともに姿も見なかったのに……）

南條は単純に疑問に思っていた。

実験場に辿り着くまでには二体しか見なかった彼ら——ゾンビ達の姿。それが、実験場から逃げ出した途端、異常なまでに見るようになった。

理由には当てがある。それは勿論、南條が逃げ出そうとしていることだ。セカンドは『南條は帰れない』と伝えていた。それを、この左腕の力任せに無理矢理逃げようとしているのだ、ゾンビでも何でも使って止めるのは当たり前の行動だと南條でも思っている。

——が、ひっかかる事もある。

それは、何故セカンドが直接出てこないのか、という事。

セカンドは南條よりも先に南條の左腕の事を知っていた。それに、その左腕に力があるであろうという予測も立てていた。なのに何故、セカンドはこないのか。セカンドのあの様子からして、セカンドには南條を抑圧するだけの力があると思える。その様な雰囲気を見せていた。だとしたら、ゾンビなんかを派遣するより、セカンドが出てきて南條を捕らえるなり殺すなり処分した方が早いと思える。

では、何故、そうしないのか？

「『サード』はまだ帰ってきていないのか？」

セカンドは不満げに眉を潜めて吐いた。

「はっ！ 連絡も取れない状態が続いております！」

それに答えるのは若い軍人の様な男だ。セカンドに敬礼を見せて、はきはきと喋り、しっかりと答える姿はまさに『部下』だ。

設置された複数のモニターの明かりだけが寂しそうに輝く薄暗い部屋には、モニターの前に座るセカンドとその背後にピシリと立つ

若い男の姿が確認できる。

セカンドの目の前に広がる複数のモニターは、それぞれ様々な光景を映していた。砂嵐だったり。謎の物体がクネクネと動く不気味な様子だったり、白い廊下を走り抜ける初老の男性と如何にもなお嬢様な姿を映していたり、また、一人のまだ二〇にもなっていない青年が漆黒の左腕に持つ巨大なマチェットを振り回している様子だったり、とその用途は様々だ。

セカンドは、その、青年が映るモニターに目をやって、言う。

「何故、実験などするのか……」

言うど、背後に立つ若い男は聞かれたわけではないのに、

「私には分かりかねます」

「聞いていない」

セカンドは興味ない、といった様子で冷たくそう言い、次は、と視線を別のモニターへと移した。

3. 順位—12（前書き）

- ・ 南條来人、施設内を探索。
- ・ デイエナ、クロウリーと共に南條を搜索。

3. 順位—12

次にセカンドの視線に刺されたのはあの——ディエナとクロウリーを追従する画面だ。この画面を見ただけでは、この施設中にカメラが設置されているかの様に見えるが、そうではない。的確な位置に予め配置された監視カメラが、映像を自動で繋げてその画面へと送っているのだ。それ程の技術が、そこにはあった。

「この男の詳細は？」

顎で、意識でクロウリーを差してセカンドが問うと、若い男が答える。

「はっ！ その初老の男性はクロウリー・トワイライト。そちらに映る今回選抜でここに来たディエナ・トワイライトの父親で、資産家であります。が、ファースト様からの報告で、彼は資産家ではなく、殺し屋なり傭兵なり、の可能性が高いとのことですよ」

「そうか。分かった」

そうとだけ言って、セカンドは適当にモニターを見渡す。

モニターにスピーカーはついていないのか、この二人に会話がなくなる。この部屋を妙なまでに静まり返った。

そんな環境の中で、セカンドは静かに眉を潜めて、考える。

（さっさと捕まえるなり殺すなりすればよいモノを……、『カムイ』はわざと逃がすような指令を……。一体なぜだ？ あんな力を持った人間、いや、バケモノが外にいれば大変なことになる。それどころか、僕達の立場まで危うくなるだろう。……、カムイは一体何を考えているのだろうか？）

『上』の指令に逆らえない、という社会の暗黙のルールはこの異常な集団『U機関』にも適用されているらしい。セカンドは『上』への不満を胸に潜めていたのだった。

「動くなんじゃねえッ！」

「動くな」

「ちよっと待ってよ！」

同時に三人の声が当たりに響いた。

困惑するディエナの目の前では、マチェットの刃を突き出す南條と、いつの間にか取り出した拳銃の銃口を南條へと突き出すクロウリーの姿が向き合っている。

廊下の曲がり角での、偶然の出会いだった。互いが互いを探していたため、結果オーライといたいところだが、早く誰かが止めなければ今にでも殺し合いが始まりそうな雰囲気漂っている。

「ちよ、ちよっと待ってパパ！ その人！！ その人が私を助けてくれた人なの！！」

察したディエナは即座にフォローに入り、場を落ち付かせようとする、が、

「ディエナ、下がっている。この男……、あのファーストとやらと『似たような気配』がする」

溺愛するディエナからの必死の頼みであるというのに、クロウリーは断った。銃口は真っ直ぐ南條の額目掛けて突き上げたまま、視線はしっかりと南條を捕らえ、指一本でも動かせば殺す、といわんばかりの脅しの視線を突きつけている。

「な、何言ってるのよ！？」

正直、ディエナは焦った。クロウリーがディエナの頼みを聞かない時が、本当に危険な時なのだ、と知っているから尚更だった。

が、今のディエナに、今吐かれたクロウリーの言葉は理解できなかった。

（な、何が言いたいのか……っ！？）

と、ディエナは南條に視線を移して、移して——気付いた。

見ただけで、思わず息を呑んだ。喉が干上がり、見てしまったソ

レに以上なまでの威圧感を感じてしまう。

そんな状況下に一瞬で置かれたディエナだが、クロウリーは彼女をしつかりと守る位置に立っている。クロウリーの背後で、僅かにその威容に怯えた表情を見せて、ディエナは南條に吐く。

「な……、何なのよ!？ その左腕!！」

勿論、ディエナが見たのは南條の漆黒の左腕だ。ただ、真っ黒な左腕だったら、ディエナを脅すまでにならなかったかもしれない。が、南條の漆黒の左腕には、二本の流動する赤い線が入っている。血管を透かして見た様なソレが、ディエナに予想以上の刺激を与えてしまったのだろう。

「貴様……何者かね……?」

「南條来人。ここに拉致されて怪獣に殺されかけて、とまあ、付いてない男だよ」

互いに互いを威嚇し、警戒し、ギリギリと絞るようなにらみ合いを続けたまま言った。

と、その時だった。

「……、はは。面白い男よのお!」

今聞いたばかりの異様に低い声とは全く違う、少しだけ声色が明るくなったそんな声が、クロウリーの重そうな口から漏れた、と、同時、クロウリーは銃口を下げる。

「……、いや、俺は詰まんない男っすよ」

皮肉めいた言葉で南條は返し、マチェットを肩に担ぎなおして、互いに相手に対する警戒を解いて笑ってみせた。

この二人は、たった今の行動だけで、互いの本性に気付けたのだ。だからこそ、何をしないでも、言葉一つ交わすだけで互いの警戒を解くに至ったのだ。

南條の漆黒の左腕に視線を奪われたままのディエナは一旦置いて、とクロウリーは右手を差し出して、

「私はディエナの父親、クロウリー・トワイライトだ。君がディエナを助けてくれた来人君だね? 感謝するよ」

ニカツ、と太陽の様な笑顔が差し出した手に付属して、南條を迎えた。

「南條来人です。俺が助けたわけじゃないですよ、彼女が自分の力で助かったんです」

社交辞令も交えながら、南條も右手で応える。

3. 順位—13（前書き）

- ・ 南條来人、デイエナ、クロウリーと合流。
- ・ デイエナ、クロウリーと共に南條と合流。

3. 順位—13

二人が握手を交わしたところで、南條は早速、と聞く。

「失礼かもしれませんが、何でディエナの父親……、クロウリーさんがこんなところに？ 俺もディエナ……も、拉致されてこんなところにいるんです。今まで散々な、信じられない様な光景にバケモンまで見てきた。そんな場所を簡単に発見できるとも思えないし、何をしにここまで来たのかも正直ハッキリしない」

南條は質問を投げかけるが、聞きたいことが余りに多く、言うて途中で自身でも上手く話をまとめられなくなって言葉を中途半端なところで止めて、何が言いたかったのか？ と自身に対して眉を潜める。

そんな南條の様子をすぐに察したクロウリーは、あはは、と面白そうに笑いながら、

「何、私は娘を助けに来ただけだよ。私はちょっとばかり特殊な仕事をしていたね、こんな場所でも関係なく辿り着ける。それに、今回はノーツ……ディエナの執事にGPS……ではないのだが、発信機を持たせていてね。それでここまで辿り着けたわけだ。これで、分かったかな？」

南條の思考を先読みして、クロウリーは自ら率先して吐く。勿論、その言葉が真実だという証拠はここにはない。南條が知ることはできない。

クロウリーが言っていることは余りにも突飛していて、信じるに値するモノではないと言える。が、南條は自らソレを信じることにした。勿論、なんの根拠も理屈もない。南條の、勘、でしかないのだが。

「……、よくわかんないっすけど、まあ、イイです。俺、とにかくディエナ……それに俺、が、助かればよいかなって思ってるだけですし」

また、上手く説明しきれないようで、南條の口からは歯切れの悪い本心が吐露される。

クロウリーは南條のそんな様子を微笑ましそうに見て、背後で果然としていたディエナを前に立たせて、

「とりあえず、来人君。ディエナは君に任せた」

「え、」

突然の発言に南條は思わず間拔けな呻き声を上げてしまった。

「えーっと、ディエナを任せる……、って、どういう事ですか？」

どこか申し訳なさそうに南條が聞くと、クロウリーは相変わらず場違いな程に明るい笑顔を南條に向けて、いや、突きつけてハキハキと発声練習を連想させる通る声で返す。

「いやなに、私が先陣を切るから私の手の出せないディエナの背後を任せるって事だよ」

「はい？」

説明されても、南條には今一理解できないようで、南條は頭上にクエスチョンマークが浮かびそうな表情で首を傾げて眉を潜めた。

「なに、私と出会うまでにディエナを守ってくれただろ？　そうしてくれれば良いだけだよ」

「はあ……？」

未だ理解は出来ていないようではあるが、なんとなく南條は頷いて返した。

南條がなんとなく頷いていることも理解しているクロウリーは、大丈夫だ、と小さく頷いてから、コートの懷に両手をつ込み、そこから、どこに隠していたのか、と疑うほどに大きな、人の手には余りそうな——絶対に片手では持てない様な——巨大な拳銃が二丁引き出される。普通の拳銃よりも一回りほど大きく見えるソレは、銃口からグレネード弾が出てきても可笑しくない様に思える。が、大きすぎる、という訳でもなくその二丁の巨大な拳銃を持ったクロウリーは本来持っている渋さも相まって格好良く決まっている様に見える。

「よし、ヘリを用意してある。仲間もソコにいる。私に付いて来るんだ来人君。背後は頼むよ」
言ってクロウリーは、長いコートの裾を靡かせながら振り向き、南條とディエナを背後に歩き出した。

6

「走れ……ッ!!」
ダダンッ!! と、幅二メートル程の細く、真っ白な廊下に巨大な銃声が轟く。

クロウリーの握る巨大な二丁拳銃は発砲するたび大きくノックバツクし、銃口が天井を仰ぎそうになるが、クロウリーは力でそれを抑えて巨大な銃弾の連射を可能にしていた。

クロウリー、そしてその背後に続く南條にディエナ。彼らの視線の先、向かう先には無数に犇く影がある。いわずもがな、それは――ゾンビ共だった。

クロウリー達の行く手を塞ぐヤツらは、それはもう、隙間がない、といえるくらいに数メートル先まで犇いている。無論、その彼らが犇く先に、クロウリーのヘリがあるのだ。

クロウリーの巨大な銃弾がゾンビ共に当たると、ゾンビ共は派手にはじけ飛ぶ。肉が弾け、骨が粉々に碎け、細胞単位に噴射してその欠片もなくなってしまふ。真っ白な壁に、真っ赤なスプレーを吹きかけたかの様な模様が浮かぶ。

「クロウリーさん! 後ろからも来た!!」
南條が振り返ると、自身が来た道からも、ストーカーの様にゾンビ共が来ているのが確認できた。勿論、膨大な数だ。

側面に扉が並んでいるが、飛び込んだところで逃げ道も突破口も塞がれてしまうだけだろう。

一本道のこの廊下で両端にゾンビ共、その真ん中に、南條達。危機的状况だ。この局面をどうやって乗り切るか。南條達は乗り越えなくては死を迎えることになる壁を目前にしていたのだった。

3. 順位—14（前書き）

・南條来人、ディエナ、クロウリー。施設からの脱出を目指す。

3. 順位—14

「後ろは君に頼んだはずだ！」

クロウリーは南條の叫びに場違いな笑顔とともにそう返した。

聞いて、南條は思わず目を見開かせた。言わずもがな、この状況のせいだ。

「ええ！？ どう対抗しろってんですか！？」

「君のその左腕はただの飾りなのかね？」

ダガンッ！！ とクロウリーの持つ拳銃から巨大な銃弾が発射さ、ゾンビ共を吹き飛ばし、道を切り開こうとするがその数が多すぎて簡単にはいかない。それを見ている南條は、すぐに背後から迫ってくるゾンビと戦う必要性を確認する。

（……、どうにかするしかないか！？）

南條は漆黒に染まった左腕へと視線をやって思う。先程までは、
肉屋から奪い取ったマチェットがあった。それを持つために左腕が必要ではあったが、その左腕を武器として使う、という考えまでは辿り着かなかった。

（——あの時、肉屋と対峙した時は、正直興奮して無我夢中だった）
南條が肉屋と対峙した時は、彼が思う通り無我夢中で、『生きるために』必死だった。それはもう、動かなければ死ぬ、と宣告されたのと同じ様な状況で、少なくともまだ死にたくないと願う南條には必要な行動だった。とにかく、『必死』だったのだ。

が、今この状況で、南條は持ち前の冷静さが手伝って常人よりも明らかに冷静でいた。だから、だからこそ、

（やるしかないんだよね……）

自身の左腕が『武器になる』。その考えに辿り着いた瞬間、南條をゾンビ共から伝わるモノとは全く違う、別の、恐怖が襲っていたのだ。そうなる、当然自粛しようと本能は活動する。

――が、また、そうも言っていられないのが現状だ。

「クロウリーさんッ！　こっちはなんとかします！　道を切り開いてください！」

「応とも！」

南條は覚悟した。この時、たった今、目の前のバケモノ共――ゾンビ共――と戦うことを。

勿論、その後のことなんて今の南條の頭にはない。この施設から出ればゾンビ共や怪獣なんかとはおさらばだと思っている。

――勿論、そんなことはないのだが。

それはまた別の話だ。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」

意を決して南條は雄叫びを上げた。この真っ白な廊下にゾンビ共の呻き声よクロウリーの握る銃の銃声、そして、南條の猛獣の様な雄叫びが混ざり、反響した。

背後から迫ってくる無数に犇くゾンビ共に向かって、南條は左拳を引いて駆け出した。

南條がゾンビ共に到達すると同時、南條の拳がゾンビの顔面を吹き飛ばした。

殴られたゾンビの顔は跡形もなく吹き飛び、側の壁に鮮血の模様を貼り付ける。

（いける……ッ！！　この左腕……、今後はともかく今は心強い武器になるッ！！）

いける、そう確信した南條は僅かに笑みを浮かべて左拳を握り締め直す。

「アアアああああああおおおおアおおおおああああオアアおおおおああああ」

「オラッ！！」

南條の拳は確実なモノを持っていた。

勿論それは『ネメシス』——バケモノと同様の——力なのであるが、今この現状ではそれは強みだ。目には目を、というようにネメシスにはネメシスを、といえる状況である。事実、南條の攻撃の方が時間を必要とするがクロウリーの銃弾と比べれば確実にゾンビ共をしとめていた。

「ウルアッ!!」

南條の拳が振るわれるたび、ゾンビ共数は続々と減っていく。

気付けば、辺りは白という色の存在を消し、ゾンビ共の濁った鮮血で真っ赤に染め上げられていた。南條の腕も同様に、拳から肘の手前までは黒を消し、真っ赤に染まっていた。

一、二、三……、三〇程、南條がゾンビ共を引き飛ばした辺りであった。南條の目の前で、死骸に変わったゾンビ共を踏み付けながら犇くゾンビ共の後ろ、南條から一〇メートル程の場所に、見たくないモノを南條は見た。

ゾンビ共よりも明らかに頭二つ以上出ているその三角形の影、南條はその正体を知っている。それどころか、見たばかりだ。

(あれは……、肉屋!?)

そう、それはブッチャーだった。恐らくは南條の対峙したソレとは別の肉屋なのだろう、身に着けている布切れの継ぎ接ぎが僅かに違う様に思えたし、何より生きて動いているのがその証拠だ。

手にはしっかりとマチェットが握られている。

どうやら、複数生産することが出来ているのだろう。今後のことを考えれば、恐ろしいことだが、今は関係ない。

「クロウリーさんッ!!」

南條目の前に迫ってきたゾンビの一体を殴り殺し、振り返って叫んだその時だった。火花が爆発する様な音を南條は聞いた。勿論それはクロウリーの握る銃の発砲音だった。

「道が開けた! 走れ!」

と、クロウリーは振り向かず叫び、開いた——ゾンビの破片や

死骸だらけの――道を肉を踏み潰しながら駆け出した。その背中に、
ディエナ、南條と続く。

（こんな細い路地で肉屋はマズイ……。逃げるに限る）

ゾンビ共を押しつけながらゆっくりとだが確実に向かってくる肉
屋に気を配りながら、南條は走った。

4. 家族（前書き）

・南條来人、ディエナ、クロウリーと共に施設からの脱出を目指す。

4. 家族

硬い床に硬い鉄製を窺わせる何かをばら撒く様な音と、無数の爆竹を破裂させる様な音が廊下を駆け抜ける南條達を襲った。それはもう、戦場に飛び込む前の兵士の気持ちだったかと思う。

——事実、それと変わらない状況だったのだが。

4. 家族。

ブツチャー

肉屋やゾンビ共から追われて、一本道の廊下を駆け抜けていた南條来人、ディエナ・トワイライト、クロウリー・トワイライトの三人は無数の痛烈な銃声を聞いて足を止めそうにまでなった。が、クロウリーの先導でそれはなんとか阻止する。

「なんですか……、この銃声は？」

走りながら南條は声を上げる。

今向かっている先は、クロウリーのヘリのはずだ。そしてそこにはクロウリーの仲間がいるらしい。と、なると大体の予想が付くのだが、南條はあえて聞いた。

「……、恐らく、仲間達が戦っているのだろう……、ここの連中と」
訝る様に、眉を潜めてクロウリーは溜息を吐き出すように言う。
(やっぱりか。……、セカンド……達、か)

「パパ!? 仲間はどれくらい来たの?」

「二番小隊と三番小隊だ。近くに四番小隊も待機させてある……が、四番小隊は私の指示以外で動かないように言っている。もしかすると、まずかったかもしれないな」

「まずかった、と言うと……？」

「自分でいうのも何だが私の仲間達は相当な経験と力がある。それなのに……、銃声が鳴り止まないからな」

「そうですか……」

銃声は鳴り止む様子はない。それに、ゴールへと近づけば近づく程銃声は大きくなるし、悲鳴の様な、絶叫の様な何かが聞こえてくる。これは、クロウリーの予想通りの光景がゴールの向こうに広がっているという証拠だろう。

(……、正直、どうとでもなれ、としか言えない)

クロウリーが歯を食いしばったのを今の南條は知らない。知れない。予想もできなかった。

南條達が通路を抜け切ると、そこは——戦場だった。

あの怪獣——RZ01と対峙した場所の様な広い空間だ。が、そこは部屋ではなく、巨大な格納庫だった。

見渡せば、戦っている連中の向こうに無数の小型の飛行機やヘリ、バイクなんかが確認できる。と、その中に一つだけの違和感を見つけた。

黒塗りのやたらと磨き上げられた高級そうな輸送ヘリだ。おそらく、それがクロウリーのヘリなのだろう。

戦場、そこはとても日本とは思えない光景だった。黒の特殊部隊を彷彿とさせる銃器を振りかざす連中はクロウリーの仲間だ。そして、彼らと対峙している白い服の特殊部隊の様な連中は逆——敵だろう。互いに銃器を振りかざし、殺し合いをしている。

彼らの足元には無数の死体が転がっている。見る限り、白い死体の方が多く思える。いや、確実に多かった。クロウリーが言ったことは事実なのだろう。その光景だけ見れば間違いなくクロウリー勢が優勢だ。

——だが、そんな銃弾飛び交い、生死が入り乱れる戦場で、一つの『異常』が嫌でも目に入る。

ゾンビや怪獣、肉屋とはまた違うタイプの異常。だが、南條はその異常にネメシスを感じ取っていた。

(何……だ、アレ……あいつはッ!?)

南條達が見たその異常——それは、

「ほらほらアッ！ おっせえぞコラア！」

銃弾を交わす、ではない。そうではなく、『彼は飛び回っている』。いや、跳ね回っている、という例えが一番近いだろう。南條が見つけた彼は兵士や銃弾の間を何度も何度も飛び跳ねて移動し、クロウリー側の兵士に次々と襲い掛かっている。赤い肩まである髪、南條より二、三程年上の様なしつかりした体格、鋭さの伺えるヤンキーの様な顔立ち、そして、飛び回ることと流星の様に輝きを靡かせる何か企画でしかみない様な銀色のスーツを身に纏った彼は、

「あいつが苦戦の原因か」

南條の隣でクロウリーはギリッと忌々しげに歯を食いしばった。

それはもう、石をも砕けそうなほどのものであった。

クロウリーは南條、ディエナと向き合って、真剣な表情を向けて、「私は戦闘に参加してくる。来人君、ディエナをあのへりまで連れて行ってくれ。あの中なら安心だ。そしてできれば……、」

クロウリーが言葉を途中で閉ざしたのに南條は気付き。

「大丈夫ですよ。俺もすぐに戻ってきます」

左腕を掲げて南條は頷く。自信ありげに南條は言って、軽く笑って見せる。

「……、ありがとう」

クロウリーはそれだけ言って、二丁拳銃を構えなおして南條達に背を向け、戦場へと飛び込んで行った。

(……さて、と)

クロウリーの背中を見送った南條はディエナと向き合う。

「……………」

「……………」

ディエナはどうしてか、先程から黙りっぱなしだ。勿論南條はそれを疑問に思う。

「大丈夫か？」

「……うん。ちょっと、不安なだけで」

「そうだよな」

南條達もヘリに向かうためにはあの戦場を通らなければならない。それは不安になるだろう。それに、それだけではない。言ってしまうばこの状況全てが不安の対象にしかないのだ。南條の様に冷静でいることの方が不思議でしかたがない。

「ともかく……、俺が守る。行くぞッ！」

4. 家族―1（前書き）

・南條来人、ディエナ、戦場を越えてヘリを目指す。

4. 家族―1

南條の合図で二人は走り出した。南條はディエナの手を引き、絶対に離さないと誓う。

数メートル走ればそこは戦場だ。生死入り乱れ、銃弾が飛び交う一生の内で体験するとは思わなかった『戦争』だ。

「出来るだけ頭を下げて！」

「う、うん！」

二人は身をかめ、出来るだけ周りに気をつけながら戦場を駆ける。すぐ側で、誰かの影が落ちる。が、南條達がそれに構っている暇はない。足元を銃弾が抉ろうが、転がる死体を踏みにじろうが、彼等は決して止まらない。

南條は走りながらも辺りを一瞥する。

（あの赤いのは……、こっちに気付かなきゃ良いがよ……）

南條が気をつけているのは勿論、あの跳び回る赤い髪の銀のスーツの男だ。彼は相変わらず戦場を跳び回り。クロウリー勢に次々と襲い掛かっている。勿論、そんな能力がある人間と戦うなんて考えたくもないのが現状だ。

今とはとにかく、南條はディエナを連れてヘリへと到達するのが最優先事項だ。

「きゃあ!？」

ディエナの足元に腕が吹き飛んだ黒い死体が転がり込む様に倒れてきて、ディエナは思わず悲鳴を上げて足を止めようとしてしまう。が、

「止まるな！」

勿論、止まれば止まる程死の危険が迫るのは二人共分かっている。だから、南條は半ば強引にでもディエナの手を引き、戦場を真っ直ぐに駆け抜けようとする。

こうする事が、最優先であり、最良なのだ。

――が、

「何してんのかなァ!？」

引き裂く様な叫び声と共に、『赤』が南條に降りかかってきた。

「――ッ!？」

南條が声のした方――頭上前方――へと視線を上げると、鈍く輝く銀と赤が目に入った。

反応が間に合うわけがなく、南條の視界はその赤の男の巨大な掌によって失われてしまった。そのまま南條は、床に叩きつけられる様に背後に落される。

石で石を打つような音が戦場という名の喧騒の中に一つだけ生まれる。

「がアッ!!」

南條の手と、ディエナの手が離れた瞬間だった。

(くっそ――! 何が!?)

硬い床に叩きつけられて激痛の走る後頭部を抱えながら、いつの間にか開けた視界で南條は何が降りかかってきたのか、と確認すると、一瞬だけ、

「なんだよ、その左腕? ネメシスの存在がビンビンキテルぜえ!」

――あの、戦場を跳び回っていた赤い髪の銀のスーツの男が、南條の足元に立っていた。

直後、赤い髪の男の足が南條の鼻面を踏み潰す。

「がああああああああああああ!？」

ゴリッ、と林檎を踏み潰してこすり付ける様な光景がディエナの目前に広がった。

「来人!!」

目の前に赤い髪の男――つまりは強力な敵がいるというのにも関わらず、ディエナは突然の出来事について南條の側にしゃがみ込んでしまった。そんな彼女の頭上数センチの所を、一発の銃弾が通り抜けたを彼女は知らない。

「おやおや、こんな場所に女連れとは呑気なもんだねえ」

赤い髪の男はニタニタと不気味で場違いな笑みを浮かべて、南條の顔を踏みつけて、床にこすり付ける様にゴリゴリと踏みにじりながら、ディエナのふわりとした髪を鷲掴みにし、無理矢理持ち上げて立たせた。

「あああああああ、あああ……、」

「いい声で鳴くねえ。良いぜ良いぜ！　こーゆーのを楽しめるから俺は止まれねえ！」

そしてそのまま、空いた手でディエナの腹のど真ん中目掛けて拳を振るう――、

「クソがッ！」

が、南條が左腕を振るって赤い髪の男をよろめかせた事で、その拳は止まった。

南條はそのまま飛び退く様に立ち上がり、すぐに体勢を立て直して拳を構える。

「ディエナを離してもらうぞ！」

「やってみろよ色男」

南條はすぐに赤い髪の男に向かって飛び込んだ。南條の蹴った固い床が僅かに碎ける。と、同時、赤い男はディエナを離して、南條に向かってきた。赤い髪が靡き、銀色のスーツが派手にはためく。

ほんの一瞬だった。二人の拳が打ち合うその瞬間、

「うおっ！？」

「きゃあああああ！？」

南條の目の前に迫っていた赤い髪の男の顔の上半分が――豪快に吹き飛んだ。風船が破裂する光景に良く似ていたかと思う。下顎を残して、上顎ごと全てが気持ち良い程豪快に吹き飛んだ。

南條の顔に血がこびり付くことはなかった。どうやら、南條は背後から飛んできた何かにやられたらしい。

ディエナの手を取ってから、南條は一瞬だけ足を止めて振り向くと、数メートル先に巨大な二丁拳銃の片方を南條達の方へと向けているクロウリーの姿があった。

「早く行け！」

「はいっ！」

クロウリーは二人に向けて叫ぶと、すぐに戦火の中へと飛び込んで行ってしまった。

南條もディエナの手を確認する様に握りなおして、再び駆け出した。

4. 家族－2（前書き）

・南條来人、ディエナ、戦場を越えてヘリを目指す。

4. 家族―2

すぐ耳元で銃弾が通り過ぎる空気を切り裂く音が炸裂して思わず足を止めて身を屈めたくなってしまうが、それは一時的な安心を得るに過ぎない。言ってしまったえば、死を迎えるに変わらない。

「ディエナ！ 大丈夫か！？」

「うん！」

二人は恐れを吹き飛ばして、戦場を駆け抜けた。

――きつと、その光景は奇跡に近かったと思う。

「後少しだ！」

「飛び込め！」

南條はディエナを振り回すかの様にして先にヘリの中へと突っ込ませる。その後、確認もせずに南條もその後へと続く。

ヘリの中に飛び込んだところで、南條はそこにいたディエナ以外の人影を二つ見つけた。

一人は、黒い如何にも特殊部隊な服装の男、見る限りクロウリーの仲間だろう。彼は側面に並べられる椅子に腰を下ろして銃器を弄っている。何をしているか南條には分からないが、何か彼の任務があるのだろう、と南條は次の人影に目をやった。

その人影はやたらと綺麗な輝きを放っていて、南條にはとても眩しく思えた。

ディエナと抱き合っているその影は、綺麗な――ディエナのソレに良く似た――長い巻き毛のブロンドに、スラッとしたボディラインをより強調するかのような薄手のドレスを身に纏った『彼女』は、南條には眩すぎる。

「来人！ 私のママよ！」

南條が判断の出来ない状況に動きを止めていると、それに気付いたディエナが声を上げた。

（ママ……？ どう見たって……、）

南條は思わず眉を潜めた。なぜなら、ディエナと抱き合っているその女性はどう見たってディエナの姉くらいの歳にしか見えないのだから。

「な、南條来人です」

どこか申し訳なさそうに南條が言いながら近づくと、ディエナのママは一旦ディエナを離し、南條へと数歩歩み寄って手を差し出す。

「私はアヤ・トワイライトよ。よろしく、来人君」

「よ、よろしくお願いします……？」

何が「よろしく」なのか南條には分かりはせず、適当な返事を返した。

その挨拶が終わると、アヤの導きで南條もディエナも座らせられる。そこでやっと南條は目の前の席に座る男がアヤのボディガード役だったのだと気付く。

（……、クロウリーさんの奥さんで、ディエナの母親ってことだよ……）

南條の位置からディエナを挟んだその先の席に座るアヤは、どう見ても一〇代（無理を言って二〇代）にしか見えないのだ。それに、良く見ると日経の血が混じっているようで、その日系の血独特の童顔っぽさが残る顔のせいでディエナよりも幼く見えてしまう。

ディエナ達が日本語を達者に話すのはアヤさんが理由か、と南條が考えた辺りで、

「出せ！」

低い叫び声と共にヘリの中にクロウリーが飛び込んできた。

クロウリーはそのまま適当な位置に座ると、どこからともなく無線機を取り出して、

「四番小隊は脱出の援護に回れ！ 全隊脱出だっ！」

そのままズンと椅子に腰を掛け直して、南條に真剣な表情を向けて、至って真剣な重さを持つ言葉で何か邪惡なモノを吐き出すように言う。

「来人君、ヤバイのが来た。最悪、手を貸してもらって良いかい？
その……左腕の力を」

真剣な言葉の隅には、どこか申し訳なさそうな気持ちちが垣間見れた気がした。

「分かりました」

期待に堪える、といわんばかりに南條は真剣な表情を言葉に乗せてクロウリーに返す。

そこでやっとアヤと男は南條の漆黒の左腕——異常に気付いたらしく、男は防弾の黒いゴーグルの奥で目をこれでもかと見開き、アヤも似た様に——だが上品に——驚いていた。

「来人君……、その、左腕は……？」

「ママ！ 話は後でよ！」

申し訳なさそうに聞くアヤの声を遮ってディエナが焦りの感情が丸出しになった声で叫んだ。

数秒の後、あちこちで空気を爆発させるかの様なプロペラの旋廻音が聞こえてき始める。その数秒後、南條は今まで体験したことのない浮遊感を全身に感じた。ヘリが浮かんだのだ。

（ともかく……この施設からさえ出てしまえば……）

南條は祈る様にそう考えた。左腕のことも、今後の事も、とにかくこの施設から離れてしまえばなんとかなる、と南條は思っている。ディエナも同様だろう。クロウリーや、アヤ、クロウリーの仲間も——そうは考えてないなかったのだが。

4. 家族－3（前書き）

・南條来人、ディエナ達と共に施設を脱出？

4. 家族―3

ヘリが浮かんだと同時に、格納庫の天井が段ボール箱の様に開く。これはクロウリーの部下がこの施設のシステムをクラッキングして一部を掌握したことによるものだが、南條がそれを知るタイミングはなかった。

ヘリが浮上して、いつでも出発できるようになったと同時に、格納庫の天井は完全に開ききった。

「早く出せ！」

クロウリーはよほどの『何か』を見たようで、焦り、苛立ちながら壁を拳で叩いて怒鳴った。

「はい！」

薄い壁の向こうからハキハキした声色で返事が一言だけ返ってきて、やっとヘリは飛び立つのだった。

これで、とにかく一段落ついた――、南條はそう安堵の溜息を吐き出した。――が、そんな南條に追い討ちを掛けるかの様に、

「逃がすものか」

ヘリのプロペラが空気を叩きつける音が響き渡る中で、確かに、低いその声を聞いた気がした。

（何だ――！？）

思ったと同時に、ガコン！ とまるで地震に直面したかの様にヘリは大きく揺れた。揺さぶられた。勿論ヘリは飛び上がっていて、地震に機体を揺さぶられることはないはずなのだが。

輸送機であるこの南條達が乗る大きなヘリをも揺るがす何かが起こったのだ。

未だ揺れていて、安定しない足場で南條は壁に寄りかかりながら立ち上がり、側面の小窓から外を覗き込む。が、そこには何も映っていない。数名程の白い敵部隊が銃をこちらへと掲げているのは見えたが、ここまでヘリを揺らす原因にはならないだろう、と南條は

思った。それに、良く見れば連中は――発砲していないのだ。

（この程度の距離で発砲できないモンなのか？）

南條は知らないがヘリコプターは殆どの場合――より旧式であれば尚更――底面の装甲が他に比べて薄く、弱点となりやすい。そこに銃弾を撃ち込むだけで一機堕ちてしまう場合もある。

南條達を乗せたヘリは地上からまだ一〇メートル程しか離れていない。だから尚更、連中が銃撃してこないのは不思議な光景、場違いな光景なのだ。

（何がどうなってやがる……？）

気付けば、揺れは収まっいて、ヘリも倍の地上二〇メートル程の位置まで浮上していて、後は前進するだけ、にまでなった。ここまで来ると、もう先程の揺れの事など忘れてとっとこの場所から離れてしまいたくもなる。

――だが、

「来人君！」

クロウリーの焦燥の感じられる叫び声と同時に、ガコン！ と、鉄に鉄、それ以上の硬度を誇る何かを撃ちつけたかのような音が機内の鉄の壁に反響して、再びヘリを揺らした。

「何だ！？」

南條が目をやると、そこ――ヘリの乗り込み口は、何故かその形を歪めてフレームから外れて、中心が紙の様にクシャリと凹んで内側に飛び出していた。それはまるで――猛獣に堪えられなくなった檻が開いてしまうかの様な光景だった。

（……来るッ！！）

南條が息を呑むその瞬間に、冷や汗が頬を伝って鉄の冷たい床に落ちた。

乗り込み口の目の前にはクロウリーが座っていたが、クロウリーはその危機察知能力で既にその場から離れてディエナ、アヤを守る様な位置で銃を一つ、乗り込み口に向けて構えていた。だが、それは『最終手段』なのだろう。あの他より少しだけ大きな銃はあの赤

い髪に銀色のスーツの男の顔を一発で吹き飛ばす威力がある。その威力は進入して来るであろう敵をほぼ確実に撃退できるだろう。だが、その銃弾を外してしまえば最後、だ。その強力な銃弾はこの南條達が乗るヘリを貫いてしまうだろう。

南條とクロウリーの視線が重なる。申し訳ないけども頼んだ、という意味が伝わってくる様な気がした。

と、その時だった。二度目の強烈で屈強な音が機内に響き渡った。そして、クシャクシャに丸めた紙の様に小さくなった扉が一機に機内に投げ込まれてあちこちにぶつかりながらゴロゴロと転がり、乗り込み口から施設の方へと落ちて消えて言った。

「大丈夫かッ!？」

南條は振り返ってそう叫ぶが、

「こっちは全員無事だ! 前を!」

クロウリーの叫び声で南條の視線はすぐに乗り込み口へと戻される。

そこには――、

「逃げられると思ったか? 手違いに不手際、運はその程度しかまです重ならない」

一人の、スーツを着た男が立っていた。五〇歳程の、長めの黒髪をオールバックにした渋い雰囲気漂わせる男。彼の姿は南條には見覚えがなかったが、ディエナにあった。

「ファースト!？」

南條の後方でディエナの声が上がった。

(ファースト……? セカンドの上司……なんだろうな、名前の雰囲気的に)

南條はファーストの何もかもも見据えた様な瞳を睨みつけ、左腕を慣らす様に横に一度振るって拳を握り締める。

「何しにきやがった!？」

「迎えに、だよ」

「生憎間に合っているのだが」

「……死んだ、はずなのに……、」

南條の後方でクロウリーはファーストのその姿を見て眉を潜めた。だってファーストは、ディエナの目の前でクロウリーが殺したはずなのだから。

（どうなっている……。何か嫌な予感はした、が。……、やはり何か持っている、な）

4. 家族－4（前書き）

・南條来人、ディエナ達と共にファーストと対峙。

4. 家族―4

見る限りは、ファーストに傷を受けた形跡はない。勿論、銃弾を受けた様子など全くないのだ。

勿論それにはクロウリーだけでなくディエナも気付く。ディエナも確かにファーストが死ぬのを見たのだ。勿論、正確に死を確認した訳ではないが、『致死量の銃弾』を受けたファーストをハッキリと見たのだ。

そんな確かに死んだはずの人間が目の前に現れれば、全てがひっくり返る様な気分になるのも当たり前だ。

(……、何なのよコイツーッ!!)

ファーストは冷たい視線で機内を一瞥した後、その視線を目の前の南條に固定する。

ヘリはファーストの突然の襲来により、一時進行を止めてホバリングしている。一応施設の格納庫上空からは少しだけ移動してズレた場所に避難はしているが、南條達が気付くよしはない。

「さあ、帰ろうか」

ファーストはこんな輸送機には重過ぎる一步を、踏み出した。

「意味わかんねえっての!」

同時、南條はゆっくりと、地を踏み知れるように向かってくるファーストとは対照的に、一気に駆け出した。拳を握り締め、その拳を振るいにかかる。

空気が炸裂した。鈍い音と共に南條の漆黒の拳がファーストに突撃した。漆黒の拳はファーストの頬を^{なぶ}擦る様にえぐった。

「ごっ!?!」

ファーストは『予想外』と思っただろう。ファーストは最初から、南條の拳など避けきれなかったのだから。が、事実、南條の漆黒の拳はファーストに突き刺さった。ファーストは横によるめき、

機内の壁に一瞬だけぶつかる。

その瞬間を南條は逃さない。続いて、そのまま左腕を振るい、ファーストの鼻面を吹き飛ばす。

小さな、低い呻き声が機内に響く。やった、とディエナの嬉しそうな声が小さく響く。

ファーストは大きく後ろに倒れ、南條達のいるこの空間と操縦席を隔てる薄い壁に激突して、体勢をくずした。南條の――左腕による――攻撃が効いているのか、すぐには立ち上がろうとせず、まず鼻から口から溢れる鮮血をスーツの腕で拭っていた。

（いける……、俺は勝てるかもしれないね……）

南條は左腕に視線を落して、思わず頬を緩める。この拳なら、バケモノを殺せるしファーストやセカンドみたいな異常な人間にも勝てるかもしれない。そう、力を持ったばかりの南條は思ってしまった。強力な力を得た感情を持つ動物――人間が、まず起こす間違いだ。過信は、失敗、失態、死――マイナスなイベントしか招かないということだ。

「はあ、……、私でもまだ『不安定』だというのに」

つまらなく吐き捨てる様にファーストは小さく言って、背中の壁に寄り掛かりながらゆっくりと、登山をするかの如く立ち上がる。ファーストが完全に立ち上がるまでに機体が揺れはじめ、フェードインするかの如くその揺れは大きくなっていく。まるで、強大な何かが近づいてくるかの様に思えた。

「ッ！！ 何……だよ、コレ……、」

南條は思わず絶句し、動きを止めて視線をファーストに注目させた。

南條の視線の先、ゆっくりと立ち上がったファーストは、ファーストのその姿は、まるで闇に飲み込まれるかの如く、スーツの先から僅かに覗く掌、指先からどんどん侵食されるかの如く、――漆黒に染まり始めた。漆黒による侵食はあつという間に前進に広がり、顔までをも漆黒に変えた。そして、仕上げといわんばかりに、漆黒

に染まった皮膚に赤いラインが幾何学的紋様を描き、浮かんだ。それはまるで前進を蝕むウィルスのように思えた。

「君もいずれこうなる」

ファーストはそう吐く。まるで意味のわからない言葉の様に思えるが、この場にいた全員はしっかりとその意味を把握していた。勿論それは、南條の左腕とファーストの姿が似通っていたからだ。

（俺が……、こうなる……？）

南條は心底驚愕し、絶望した。先程まで自身の力、強力な助っ人になると思っていたその漆黒の左腕が、南條自身を蝕んでしまうというのだから当たり前だ。途端、その強力な助っ人が異常に怖くなり、恐怖心に駆られてそれ、左腕を切り落としたくもなる。

「……な、ああ、……あ、」

恐ろしき現実には絶句していた南條。それは、ファーストにとっては隙以外の何物でもない。

一瞬で、ファーストの蹴りが南條の腹に突き刺さり、南條の身体をくの字に折り曲げさせて吹き飛ばした。ファーストの蹴りはやはり強力で、南條は大きく後ろに吹き飛び、ディエナ達が並んで座る席をも通り越してヘリの後部へと激突した。この輸送機は後部ハッチが開くが、流石にそのハッチまでは開かないでくれた。南條の身体は壁を滑り落ち、あっという間に床に落ちる。

「が、あっ……」

「来人君！」

「来人！」

ディエナとアヤを守るようにして立つクロウリーが銃をしっかりと構えている。が、撃てないのはファーストにも見えているようだ。ファーストはそれに臆した様子はない。

と、その時だった。クロウリーの仲間がダツと飛び出し、クロウリー達を庇うかの如くファーストにはばかった。彼もまた銃を持っている。クロウリーの物よりは銃口は小さく、アサルトライフルの類の物になるが、それでも、撃てばヘリ機内に異常をもたらせてしま

うかもしれない。

が、クロウリーも物よりはその確立は低いだろう。それに、ヘリの機体の心配までしている状況ではなかった。クロウリーの仲間が気にするのはただ一つ、自身の主人とその妻、娘の命を守ることだけだ。彼からの位置で撃てばとりあえずディエナやアヤには当たらない。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

一瞬だけ生まれた喧騒の中の静寂に雄叫びが轟いた。同時、アサルトライフルから八ミリの火が噴出した。

4. 家族－5（前書き）

・南條来人、デイエナ達と共にファーストと対峙。

4. 家族―5

――が、目の前のバケモノは一瞬の間もなくその火を鎮火させて見せた。本当に、時間という概念がそこにあつたのかと疑わしくなる程の一瞬、その間にファーストはその漆黒の影を靡かせ、目の前の男を、貫いた。アサルトライフルは稼働していたのかすら疑わしい程に沈黙し、銃弾はどこにも傷跡を残していない。まるで、発砲なんてなかったかの様な静かな景色がへりの機内を支配していた。

ファーストの右腕は男の胸元を確かに貫き、纏った半液体状の鮮血を吹き飛ばすかの様に腕に走る幾何学的紋様が激しく輝く様に流動し、薄く広く仄かな明かりで機内を明るくする。

ファーストの男の胸を貫いた左腕の先には――何かを握り締めた――拳がしっかりと結ばれている。その掌の中には、本の中でしか見た事がないような、人体にとって必要不可欠な肉々しい鮮血に塗れた未だ弱々しくだが確かに鼓動する『ソレ』が見える。

「なっ……、何してんだ、よ……」

南條はそんな光景に絶句した。思わず、全身を駆ける痛みを忘れてシッカリと立ち上がってしまう程に。いくら狂ったな左腕があるうが、狂った世界にしようが、ついこの前までは南條もただの人間だったのだ。そんな南條が、模型や教科書でしかその存在を見た事がないモノを目の前にして、絶句しない訳がなかった。いくら、南條でも、だ。

ファーストの掌の中で弱々しく鼓動していた思ったよりも小さなソレは、ファーストの漆黒に染まったゴツゴツした指に少しでも力がある、トマトを握りつぶすかの如く水々しい、また残酷すぎる音を立てながら中身と鮮血を漏らす様に噴出させ、その存在を元の状態の半分程にまで小さくした。まるで、紙をクシャクシャに纏めてしまうかの様な手軽さが感じられるその行為に対して、ファース

トは特別意識していなかった。そんな、些細な事に過ぎないのだ、彼の中では。

ソレ、の鼓動がファーストによって無理矢理に終わりを打ち付けられたと同時に、ソレの持ち主であったはずの男は、ファーストの腕に串刺しになった状態で音一つ立てず、堕ちた。

ファーストは腕を軽く――付いた埃を払うかの如く――振るって男を適当に振り落とす。

男の身体はゴロゴロと適度に転がって運良くか悪くか、ファーストが破壊したヘリの乗り込み口から外へと転げ落ちて行ってしまった。

「くそっ……、」

クロウリーが吐き捨てる。たった今、数メートルない距離で殺された男はクロウリーの仲間だ。仲間が殺される――南條達一般人はそう体験しない体験。それをクロウリーが今、たった今、体験したのだ。そんなイベントに直面して、冷静でいられるクロウリーは人道を外れる程に屈強な精神の持ち主なのだろう。が、仲間を殺されて何も感じない様な残酷な男ではない。そもそも、そんな男には仲間なんて出来やしない。

「よくも……、」

クロウリーは静かに吐き、巨大な銃口をファーストへと掲げる。いくらファーストが『何か』を持っていたとしても、クロウリーの持つ拳銃の銃口から放たれる銃弾ならきつと『吹き飛ばす』くらいは出来るはずだ。たとえば、不気味に銃弾を身体に通さなかったとしても、その衝撃はきつと伝わり、ファーストを吹き飛ばすだろう。足元はただの輸送ヘリなのだから、それは間違いない。それはきつとこの場を凌ぐための隙を作る事ができるかもしれない。だが、最初から懸念している様に、このクロウリーも巨大な銃弾は外れればきつとヘリ本体にダメージを与えるだろう。そうすると、トリガーを引くに引けなくなる。

（どうする……!?!）

もし、この銃弾が予想通りに放たれば、隙を作つて南條に繋げられるかもしれない。だが、逆に、銃弾が外れてしまえば、ここから逃げるのは難しくなってしまうだろう。

と、掌が冷や汗塗れになり始めたその時、

南條がファーストに飛び掛った。野獣が獲物を捕らえる時の様だつたと言える。

南條が思いつきり地を蹴ったことにより、ヘリは大波に揺られたかの様に激しく揺さぶられた。

飛び込んできた南條をファーストは受け止める……が、南條も鼻から負ける気はない。

南條も正直、ファーストには臆していた。勿論、本能が怯えてしまふ程に漆黒に染まつたファーストに身体を震わせた。だが、それだけではないのだ。南條は左腕、だが、ファーストは全身、と見ただけで物量が違う、持てる力が違う、と思えてしまう。勿論、そんな確証はないが、南條は事実そう思っていた。

理由は簡単だ、この場にディエナがいる。それだけだ。

もとより、ディエナを守ろうと南條は駆けていたのだ。ここまで来て諦める——見捨てる意味なんてミクロの世界を見てもありはしない。

南條を受止め切れなかったファーストは南條の勢いに押し負かさ
れ、ヘリの通路の上をごろごろと転がって——乗り込み口の前まで
移動していた。

4. 家族－6（前書き）

・南條来人、ディエナ達と共にファーストと対峙。

4. 家族―6

気付けば、南條の上半身はヘリの吹き抜けになった乗り込み口から外へと飛び出していった。あと少しでも下がれば重心が完全に外に落ちて、南條は支えなくしてヘリの中にいらなくなるだろう。

南條の身体がズズ、とまた少しだけヘリの外へと飛び出した。が、南條は落ちない。落されない。支えになっているのは、南條を落そうと手を伸ばすファーストの、その腕だ。南條はファーストの腕を必死に掴み、なんとかヘリから落ちない様に踏ん張っている。

「落ちろ、貴様ァ、アアアア！」

「誰が落ちるか！ お前が落ちろ！」

暴風が吹き荒れる風の嵐の中で二人は周りの事をも忘れて殺し合いの渦中に意識を置いていた。

恐ろしい程『死』に近い場所で南條は目の前の敵を『殺そう』としていた。つい少し前まではただの人間だった南條が、人を殺そうとしていたのだ。人といえない相手でもあるのだが。

「く、っそ、がアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」
南條は暴風をも吹き飛ばす雄叫びを上げた。声を出すことにより、人間は一時的にだが力を上げると言う。が、そんな事を気にしてではなく、南條は単に『自身に気合を入れた』のだ。

そうすることで、南條は更に『ふっきれる』。

ふっきれる、言葉は良くないかもしれないが、その効果は絶大だ。――全てを捨てて、目的を目指す。つまり、全てを捨てても、何かを成し遂げる。と、いうことだ。

南條はファーストの腕を掴む両手に力を込めた。その力はネメシスの宿った左腕により均等ではなく、バランスの悪いモノになる。そのお陰か、全身に力の回ったファーストは抵抗のバランスを崩してしまふ。片方が強く、片方が弱いその攻撃に均等な力で対抗して

も、どちらかは勝っても、どちらかは負けてしまう。

予想通り、というわけではないようだが、とにかく南條の好機となりうる方向へと場は動いた。

ファーストは上手い具合に体勢を崩した。もともと足場の悪いヘリで、扉のない乗り込み口のその上だ。突風にヘリそのものの揺れがこの場にはある。

ただ運が良かっただけ、とも言えるが、何でも良かった。

「落ち……ようぜ！」

南條はふらついたファーストの腕を自身へと思いっきり引き寄せる。それは勿論、ディエナを守るために、ファーストを落すために――自身も落ちるという選択肢だ。

いくらファーストのような意味不明なバケモノでも、南條がしっかりホールドし、そのまま無抵抗に遙か遠くに見える地上に全身を打ち付ければ無事ではいられないだろう。……いや、軽傷で終わらせてしまう様な気もするが、ともかく、ディエナ達を追うことは難しくなるだろう。

（絶対、殺す！）

南條は手繰り寄せたファーストをしっかりと腕の中へと納める。勿論ファーストは抵抗するが、南條の左腕はそれを決して許さない。

「離……せッ！」

ファーストの抵抗は南條の左腕の異様で強大な力によって無にされる。

二人の影はヘリの外へと消えようとしていた。ヘリの乗り込み口に触れる南條の背中を支点にして、二人は頭から下に向かって落ちそうになる。

「来人っ！」

が、ディエナはそれを許さない。

もとより、ディエナは南條に助けられてここに生きている。そして、南條は今、ディエナを助けようとして死のうとしている。

南條がいなければディエナはとっくに死んでいた。間違いない。

そんな、命の恩人をそう易々と見捨てるほど、ディエナは残酷な人間ではない。

「ディエナ！」

直後、クロウリーの低い方向がヘリの中で轟いて世界を揺らした。いつの間にか巨大な拳銃は掲げられていて、その巨大な銃弾はファーストへと向かっていった。

外ればヘリの機体にダメージを与えてしまう可能性がある。だが、クロウリーは臆さなかった。

クロウリーの拳銃から放たれた巨大な一発の銃弾は席を立て南條を助けようと走り出したディエナの背中肩越しに越え、そのまま、操縦席とクロウリー達のいるフロアを隔てる壁に衝突した。

だが、クロウリーはニヤリと笑って見せた。銃弾は外れた訳ではないのだ。銃弾は壁へと衝突したかと思うと、そのまま『向きを変え』、南條に覆いかぶさる形でいるファーストの後頭部に突き刺さった。

4. 家族一7（前書き）

・南條来人、デイエナ達と共にファーストと対峙。

4. 家族一7

銃弾は跳弾したのだ。

クロウリーの拳銃の巨大な銃弾にクロウリーだからこそできた回転を掛けたことにより、成功した奇跡に近い一撃だった。

「っあ、」

短く、か細く、消えてしまいそうな悲鳴を上げてファーストの全身から力が一気に抜け、まるで脱殻のようにグタリとうな垂れた。

同時、支えを失った南條の身体と、力を失ったファーストの身体はヘリの外へと放り出されてしまう。

――が、ディエナがそれを許さない。

「来人っ！」

乗り込み口に辿り着いたディエナはベースへ滑り込む野球選手のように頭から飛び込み、手を伸ばした。まるで、失ってしまうモノを諦め悪く掴もうとするかの様だ。そのままディエナの手は、確かに暖かい漆黒の掌を掴み取った。

「捕まえたわよ！」

ディエナの目の前で、南條の身体を押しつけながら空気中へと落ちるファーストの姿を見つける。が、ディエナが彼を助ける理由はない。ファーストはそのまま遙か遠くの地面へと落ちていく。身体がどうなったかなんて誰に見えやしない。が、これで終わりはいらないだろう、とクロウリーは思っていた。

南條の身体はとっくにヘリから飛び出している。暴風に煽られ、その身体は激しく揺さぶられて揺れる。

そんな南條の身体を、ディエナのか細い、白すぎる程に真っ白でちょっと叩いた程度で折れてしまいそうな腕では支え切れない。

「パパ！」

「応！」

ディエナの身体も南條に引きずられてヘリの外へと放りだされそうになる、が、クロウリーがそこに飛び付き、ディエナを支えたことで何とか逃れる事が出来たのだった。

クロウリーが二人を引きずり上げて、やっと一段落はついた。

ヘリは更に浮上して、やっと、前進し始めたのだった。

7

南條来人、ディエナ・トワイライトの二人は『U機関』と名乗る謎の組織に拉致され、そして、脱出する事に成功した。それが、U機関の歴史上初めての出来事だった、というのは南條達には分からない。

歴史上初、の出来事がその場から離れただけで終わるなんていうことは絶対にない。ギネス記録だろうが、初体験だろうが、決してその一瞬だけがあって記憶に残らない、尾を引かないなんてことにはならない。

「セカンド、貴様いったい何をしていたア！」

あの真っ白な空間と対をなす様な暗すぎる空間で、ファーストは珍しくも怒鳴り声を上げた。それは、地をも揺るがす咆哮となり、セカンドへと襲い掛かった。

「僕は僕の仕事があった。大体彼らを取り逃がしたのは貴方の失敗でしょう？ 失笑物ですね」

「貴様っ……！」

一寸先すら見えないこの空間での出来事だが、セカンドはファーストが牙をむき出しにして恐怖の視線をセカンドに叩きつけているのが分かる様な気がした。まるで、猛獣と対峙しているかのように

だ、とセカンドは強がりつつも冷や汗を頬に伝わせて体が震えるのを押さえていた。

「クソ……、カムイは激怒しているとも。とんだ失態だ！　これは責任問題になる。クソッ」

ファーストは子どもの様にブツクサと不満をはき続けている。セカンドもそれには飽き飽きだが、溜息を吐き出す気持ちの余裕は全くといって良い程になかった。それどころか、何か間違っ^てファーストに殺されない様に暗闇の中でファーストに警戒することで精一杯だった。

と、そんな時だった。

「何だよオイ。オッサン達。責任を部下に押し付けて、その部下は黙りこくって、ってよお。何バカみてえな事してんのさ？　そんな暇あったらとっとと追跡しろ^{チェイス}っての。年寄り共」

と、二人だけがいた空間には若すぎる声が聞こえて来た。銀色のスーツに赤い髪の男、サードのモノだ。

続けて、

「ソノ通りだ。貴様等は一体何をしているのだ？　貴様に任せたのが間違いだっただのかもなあ、ファースト」

サードのモノより貫禄があり、ファーストやセカンドのソレより若いハスキーボイスが響いた。

同時、ファーストとセカンドがビクツと一瞬だけ肩を跳ねさせたことにサードは気付いた。そして、ニヤリと口元に引き裂く様な不気味な笑みを貼り付けた事にその二人は全くと言って良い程に気付かない。

4. 家族18（前書き）

・南條来人、デイエナ達と共にファーストと対峙。

4. 家族Ⅰ8

「な……、なんで貴方が、」

珍しく驚愕した様な調子でファーストは言葉を漏らした。ありえない、そういった様子だ。まるで伝説的なモノを目前にしたかの様な、恐怖。その恐怖がファースト、セカンドを激しく煽る。

「何でとは、ありえない質問だな。貴様等の失態がなければ私だって今頃コーヒーでも啜っているよ」

ハスキーボイスの主は、ファーストとセカンドとは正反対の、外連味たっぷりのドラマの様なセリフを吐く。それは勿論、上下関係からの余裕であり、力の誇示でもあった。

彼の言葉を聞いた二人は途端に押し黙る。勿論、それは同様に上下関係に力の強さの表れである。

「ハハッ、様アねえな」

いくら彼らの『下』である銀色のスーツの男――サードが調子に乗ってほごこうが、反論できないくらいに二人は威圧されていた。

押し黙って発言ができない二人に対して、ハスキーボイスの主は重く、深海の如く深い意味を込めた言葉を吐き出す。

「ともかく、私は君たち『順位保持者』のまとめ役『エース』だ。

貴様等の失態は私が取り戻す子になる。貴様等はただ私の指示に正確に従って現状を回復させれば良い」

「……、はい」

言わずもがな、二人はエース、つまりは二人の『上』の指示に従う他がない。何を言おうが、二人が南條達を逃したのは事実なのだから。

（くそ……、逃がしはしないぞ。南條来人オ……）

ファーストは一人心中で屈強で傲慢な意思を固めて準備のために息を潜めるのだった。

南條来人、ディエナ・トワイライトの二人はU機関と呼ばれる謎の組織に拉致され、そして、史上初となる拉致された先の施設からの脱出を成功させた貴重な人材である。

そんな二人、そして周りの人間に『平穏』が訪れないのはわかった事だった。勿論関わった人間全員がそれを『自身のことだ』と自覚している。

「待ちなさいよ来人！」

「いやいやいや、無理だからッ」

そんな地獄の渦の様な渦中のだ真ん中にいる二人でも、ほんの一時の『平穏』を楽しむ権利くらいは主張できる。

二人はほのぼのとした――とは到底言えない様な、喧騒渦巻く大都会の街中にいた。

周りの目を全く気にしない様子で二人は歩道を走り回っている。それはまるで鬼ごっこのように、追う側と追われる側に綺麗に分かれて走っていた。追われるのは言わずもがな南條だ。そしてその後方三メートル程の位置で南條を追うのは手に札束を握り締めたディエナだ。

握られた札束の額は日本円のレートが大して知らない南條には分からなかった。が、その枚数を見れば大金だということは容易く理解できた。

「大体それいくらだよ！？
えか！」

札束が鈍器になるレベルの厚さじゃね

「何よ！ 来人の身の回りの物買うためなんだから多少多くなつて

もしかたないでしょ!？」

「いやいやいや! つつてもその枚数はねえわ!」

「なによー!? これから一緒にここに住むのよ? 暇な今のうちに身の回りの物揃えておかないと後々こまるでしょうが!」

「あーもう!」

ひー! と情けない悲鳴を上げながら南條は必死に走ったが、結局、ディエナに捕まってしまうのだった。

首元を捕まれて親猫に運ばれる子猫の様にシュンと大人しくなった南條。

そんな二人が来たのは街中に並ぶショップの一つ——ゲームショップだった。

「何でゲーム屋なんだよ!？」

「娯楽も必要でしょ？」

「……………」

南條は嘆息を引きずるように、ディエナに引きずられてそのゲームショップへと足を踏み入れることになった。

南條はクロウリー邸を見て、言葉そのまま絶句した。

クロウリー邸は、周囲を防御力の高そうな分厚い鉄の外壁に囲まれ、巨大な庭——と呼んで良いのかも分からない様な広さを誇る土地——を持ち、その奥に巨大な、まるで城の様な巨大な建物を備える、というテンプレート的な豪邸であったのだ。

「でか……」

「ハハハ、そんなに大きくないよ」

「いやいやいや、俺の家なんてこの何百分の一だからッ!」

と、クロウリー達が物凄いレベルの金持ちであることを知った南條。

広すぎる庭を歩き続けて南條はその城の様な豪邸に足を踏み入れた。

テンプレート的な執事とメイドに案内され、南條とクロウリーは二人でクロウリーの書斎へと向かった。

クロウリーの書斎へと入った二人は、そこで『やっと』落ち着くことが出来たのだった。

二人向かい合う様に接待用スペースのソファーに腰を下ろして、嘆息する。そして、訝る様な表情でクロウリーは面持ちを上げ、南條と、そして――現実と向き合う。

「君は恐らく、『死んだ』ことになっているだろうな」

南條はU帰還なんていう未知の組織に拉致されたのだ。あれ程の連中なら間違いなく『手を打っている』。それどころか、日本そのものを動かす力を持っているだろう。

それを考慮して考えれば、南條はきっと突如の事故か何か適当な理由で『死んだ』ことにして、存在を消してあるだろう。

「……そっすね、」

一瞬だけ考える様な間が空いて、南條は小さく、吐き出す様に言葉が漏らした。

4. 家族一9（前書き）

・南條来人、デイエナと大都会へ。

4. 家族―9

ここまできて、やっと、南條は思い出した。あの日、拉致される直前まで何をしていたか。そして、自身の生活、日常を。

(……、『優華』に『彼方』……、あいつら今頃どうしてんのかな……、)

南條の家庭は裕福でも貧乏でもなかったといえる。そんな、ありふれた、ドコにでもありそうな一家庭。二階建ての木造一軒家に両親、来人、そして弟の彼方の四人家族で住んでいた。

――いや、住んでいた、という表現は正しくないのかもしれない。両親は家に滅多に帰ってこず、来人と彼方の二人が自宅を回していたのだから。

が、それも正しい表現とはい切れない。彼方は南條とは『正反對』の道を進み、所謂『ヤンキー』となっていた彼方は両親とは違う理由ではあるが滅多に自宅に帰らず、結局自宅を使っていたのは来人一人だったのだ。

そんな南條は複雑な家庭環境でも決して廃れはしなかった。

それは今までの慣れもあったが、支えがあったから、というのが大きい。

――それが、花島優華、だ。来人の幼馴染であり、恋人だった。(そうだ、俺は優華と、)

南條は拉致される直前まで、花島優華と一緒にいた。所謂デートをしていた。

楽しい時間――だが日常――を満喫し、花島と分かれて、そこからの記憶がない。きつと、その時に拉致されたのだろう。

「で、君には選択肢があるよ。来人君」

「選択肢？」

クロウリーの不意の笑顔を正面に受けて、南條は首を傾げた。

クロウリーはピースをする様に人差し指と中指を立てて南條の目の前にその手を突き出して、中指をしまう様に折り曲げ、

「まずは死ぬ覚悟で日本に帰り、自宅に帰ってみること。危険なのはアメリカにしようが日本にしようが変わらないが、きっとこの家の方が安心だろう。だから、死ぬ気で、だ」

続けて人差し指を折り、

「次は――、『私達の家族になる』こと」

「――え？」

予想外の言葉に南條は思わず息を漏らしてしまった。

家族になる。その言葉の意味を理解するには正常な脳が正常に稼働している南條でも数秒を要した。

「えっと、……家族、というと？」

南條の申し訳なさそうな言葉にクロウリーは『そんなかしこまるな』といった感じの笑顔で答える。

「言葉そのままだよ。君はここに住むんだ。勿論、ただで、とは言えないけどね」

「……………」

南條はクロウリーの言葉を受けて暫し考える様な間を空けて黙り込んだ。

正直、南條は家庭の事情から両親や兄弟――つまりは弟に対しての執着や愛情がほとんどない。南條が本当の愛情を向けたのは花島だけだ。だから、南條は死んだことになっているであろう日本に戻る理由は南條にはない。花島にも、きっと南條は死んだと伝わっているはずだ。きっと顔を出せばこれから起きるであろうU機関との

ゴタゴタに巻き込んでしまう事になるかもしれない。それだけは、したくない。

ならば、家族になる、という話に首を横に振る理由はない。

「あの……、」

「ん？ 何だ？」

「俺は家族になるとして、その対価は……？」

だから南條は先に進む選択を選んだ。そのために必要なことを問う。

「何、簡単だよ。君も私の仲間となれば良いだけだ。これからはディエナも自身の身を守るために仲間となる。タイミングも良いし、これからの君の糧になるのは間違いない。どうかね？」

南條は迷うわけがなかった。そんな必要はないのだから。

何の確認をしたわけでもないが、南條は一度だけ、だがシッカリと縦に首を力強く振って、

「もう、何でもやってやるさ。死にたくはないしな」

「来人！ このシリーズの新作が出る！ 私は買うわ！」

「……ご自由に、」

南條も日本で見た事がある日本製の家庭用ゲーム機に対応したソフトを片手にゲームショップ内でディエナは興奮した様子で騒いでいた。どうやら、自身の好きなゲームの続編を見つけたらしい。

呆れた様に南條は返して、辺りを一瞥する。

周りはゲーム機にソフト、それと周辺機器が並んだ棚に囲まれていて視界は良くない。あちこちにゲームの店頭プロモーションビデオを流すモニターがあり、電子的な映像が嫌でも目に入り視神経を刺激する。

南條はゲームが嫌い、という訳ではないが、あまりやることがなかったのも、正直この場所に興奮はできなかった。

4. 家族—10（前書き）

・南條来人、ディエナと大都会へ。

4. 家族—10

そつれに、なによりの問題があった。

ここにあるゲーム、その殆どが英語表記で英語にしか対応していないのだ。場所はアメリカ、当たり前である。

南條もそれなりに勉強はしてきたしできる方だが、学校を卒業して英語なんかに触れ合う機会が極端に減った南條には中身、ストーリーが理解できないモノばかりなのだ。

（やっぱ、英語覚えた方が良いのかね？　いつまでもクロウリーさん達の日本語に甘える訳にはいかないだろうし）

それよりもっと心配すべきことがあるだろうに、と突っ込みを入れたくなる様な心配をしながら南條は可愛らしい無邪気な笑みを浮かべてレジカウンターで店員と喋っているディエナに視線をやった。

店員から梱包されたゲームを受け取ったディエナは笑顔をより一層明るくモノにし、ゲームを大切なモノの様に抱きしめながら南條の下へと走ってくる。

「買ったわよ！」

「そうだな、買ったな」

あまりにも嬉しそうにゲームを掲げるディエナが可愛いものだから、南條はついついディエナの頭に手を置いて撫でたくなってしまった。……ので、頭を撫でてやった。

二つも年上のハーフ美女の頭を撫でる機会なんてそうそうないだろう、と南條はそう自身に言い聞かせてとにかく頭をなでてやり続けた。

こんな大都会でも少し路地に入れば公園なんてものもあるんだな、と南條は少しだけ人々の本来から持ちえる和みの心に関心していた。あれから服屋、家具屋等々、様々な種類の店に入っては買い物をし、荷物を配送指定をして、二人はやっと落ち着き、この異様に広い公園へと来ていたのだった。

公園の片隅にある木目の薄いベンチに腰を掛けた二人はやっとそこで落ち着き、それぞれがそれぞれの感想を述べた。今日はとうだった、あれは買いすぎだ、等だ。

「でも、楽しかったわね」

ディエナは不意に美しすぎる笑顔と一緒にそんなストレートな言葉を南條に向ける。決して折れないほど真っ直ぐな言葉だったと南條は感じた。

「……、そうだな。うん。楽しかった。あんな事があったからってのもあるけど、そんな事は別にして普通にたのしかった」

だから南條も、それに相応しい真っ直ぐな、意思の籠った本心を言葉にして返した。

すると、自身も同じことをしたというのにディエナは顔を真っ赤に染め上げて、視線を宙に泳がし、頬を人差し指で掻きながら、

「アハ、ハ、……何か、照れるわね」

「なあに照れてんだよ？ こっちだって恥ずかしいツツの」

何かをごまかすように、南條も頬を掻きながら視線を空へとやって、そう照れくさそうに言った。

それから暫く談笑を交わした二人。その会話の中で、これからどうするか、なんて野暮な話は出てこなかった。その光景は、きつと『これからは忙しくなる、だから今だけでも』という願いの光景だったかの様にも思えた。

時間なんてあっという間だった。歳を取れば時が経つのが早く感じる、なんて言う人もいるが、それよりも、働くことで時間が早く経つ様に思えた。

——あの『施設を脱出』した日から三ヶ月もの日々が過ぎた。

南條来人とディエナは、そしてその周りの人々は『きつとU機関が襲来する』と身構えていたが、今のところその景色を見ることはなかった。

その渦中のど真ん中にいる南條達二人は、クロウリーの『仲間』へと参加し、様々な任務と訓練をこなす日々を送っていた。

それは、きつとこれから来るであろうU機関の襲来に備えるためであり、生きる糧でもあった。

三ヶ月もの間、訓練や実践経験を得て、南條もディエナも見て驚く程に成長していた。南條の格闘センスはもともと持っていた喧嘩の経験を本物へと変え、いまや近接戦闘で南條の右に並ぶ者は仲間の中にはいなくなっていた。そしてディエナは、父親の直接指導の甲斐あってか、二丁拳銃による特別な、まるでゲームの設定の様な銃撃スタイルを得ていた。勿論扱う拳銃は極普通のサイズの物になるが、それでも十分に使えるのだった。

そんな二人は互いの弱点を補うことが出来る良きパートナーとなり、二人で組んで仕事へと出ることが多かった。

——そして、今日も二人はクロウリーの指示で仕事へと出ていた。

4. 家族—11（前書き）

- ・南條来人、ディエナと任務へ。

4. 家族—11

二人は四人乗りの四駆に乗って少しばかり遠い田舎町へと来ていた。

四駆はゴツゴツと揺れながらろくに整備されていない土の道を馬車の様に走る。運転席に座る南條と助手席で退屈そうに外を眺めるディエナは何しにこんな田舎町へと来たのか。任務——そうだが、その内容。

南條とディエナはベストと呼べる程に相性の良い組み合わせだ。だから、この二人は二人で解決できる小規模な——だが大きな——問題の解決に使われる事が多い。

そして今回は、こんな田舎町で行われるギャング間の抗争の抑止、それが二人の任務だった。

敵対する二つの勢力の片方からクロウリーの下に依頼が入り、南條達が派遣された、というわけだ。

「依頼主はこの田舎町に来る方だ。そして目的はこの田舎町を仕切ってる方の親玉^{ヘッド}。とにかく町に潜入して根城に乗り込んで親玉を……まあ全員叩き潰せば良いってことだ」

ハンドルに片手を置いて器用に運転しながら視線を道の先にやったまま言う。溜息混じりのそんな言葉は四駆の排気音に掻き消されても可笑しくはない様な声質だったかと思う。気だるい、そんな感情が感じられる。

「分かってるわよ。結局はいつもとやること一緒なわけだしねー」と、また気だるそうにディエナが返す。

馬が駆ける様な排気音をBGMに意識外に聞きながら二人はガタガタで不安定な吊橋の様な道を進むのであった。

あれから数十分という僅かで、どうでも良いような時間が過ぎて二人を乗せた四駆は目的の田舎町の中心へと辿り着いた。

この田舎町はギャングに支配されているくらいで、その格差は目に見えて分かる物だった。

町の中心にはもう一つ町があるかの様に囲いに囲まれた敷地がある。形式はクロウリーの自宅に近いと思う。だが、その雰囲気はまったく違った。クロウリー邸が何か裏を感じさせる暗闇だとしたら、この場所は鋭利な尖った罫を敷地一杯に敷き詰める地獄の様に感じた。

門の前には門番を気取る岩の様な男が二人。どちらも銃を肩に掛けて待機している。

その数メートル先に止まった南條達を乗せた四駆に視線を貼り付けて固定している。こんなに見られていると、車から降りることによって少し恐怖を覚えてしまうくらいだった。

「降りるぞ」

「はいはい」

が、二人は決して臆さない。懷に隠した武器を一度だけ簡単に確認して、それぞれ扉を開けて四駆から降りる。

降りてすぐに二人は門番達と目があった。銃を掲げてはいないが、確かな敵意はヒシヒシと二人に伝わっていた。

二人が数歩進んだ所で、

「おい。何ようかな？ 坊主に嬢ちゃん」

門番の片割れが脅す様な声で吐く。

「あのー。ちょっとで良いんでーここ通してほしいんだけど」

わざとらしい演技でディエナは言う。

というのも、二人はこの場所についての情報を持っていないのだ。だから、スパイの様な、忍者の様な特殊な侵入経路を全く知らない。この囲いの裏側にでも四駆を止めて下調べをしても良かったが、それは――時間な無駄だと二人は思っている。まず、第一に『二人が

見つかってはいけない』なんて決まりはないのだ。そして、進入した形跡を残してはいけない理由なんかない。

——だから、正面突破で良いのだ。

この門番が素直に通してくれるなら——そうは思わなかったが——こいつらを『叩きのめさなくて良い』。それだけだ。

すると、門番の片割れは訝る様に眉を潜めて、

「ボスの招待状はお持ちで？」

怪訝な表情が妙に印象に付いた気がした。岩肌にナイフで流れを切り込む様な皺の寄った表情がその山のようで岩の様な体型にはミスマッチで思わず息を噴出してしまいそうになった。

そんな怪訝な表情を付き返すように南條はあえて強気の口調を選抜して、

「ないぜ。だけど俺達は話をしたい。……、お前等のボスと」

「うんうん」

南條の言葉に続いてどことなく明るく、可笑しな雰囲気でディエナが数回頷いてみせる。その光景はまるで打ち合わせしたコントかのように思えた。

そんな少しだけ可笑しな光景を目の前にしても門番二人は決して頬を緩めはしなかった。

「おう」

「おう」

似たような呻き声を重ねて門番二人は互いを見つめあう。そしてその姿のまま固まって数秒が過ぎ去った。指一つ動かさないモノだから思わず時が止まってしまったかと思うくらいだった

そんな門番達を見て怪訝そうに眉を潜める南條とディエナ。二人も互いに目を合わせて頭上にクエスチョンマークを浮かべて首を傾げる。

「（こいつらどうしたんだ？）」

「（私が分かるわけないでしょ？　　っていうか、通れるな通っちゃいましょ？）」

囁くような小声で二人は一言だけの相談を交わして。頷く。

そして、もう一度門番へと視線を戻す……、と、

「うおッ！」

「ぎゃあ!？」

目があった。二人の門番はいつの間にか首を二人に向けていたのだ。

4. 家族—12（前書き）

・南條来人、ディエナと任務のため田舎町に。

4. 家族—12

「び、びびった……、」

門番は二人とも可愛らしい顔などしていない。どちらかと言えば強面だ。そんな二人から間近で視線を向けられれば誰だって驚くだろう。

「何よ？」

驚きはしたが、ディエナはすぐに態度を持ち直して強気の姿勢を見せる。あんた達なんて怖くない。そう言いたげな表情と共に鋭い言葉を放つ。そこには反抗期の子どもの様な姿はなく、凜として抵抗の姿勢を見せる成長した大人の姿がそこにはあった。

この三ヶ月で南條、ディエナ共に大分成長した。飛躍した結果を残したといっても過言ではない。銃器の扱いを覚え、格闘を学び、裏の世界で人を殺すことを覚えた。そして、生活する、ということ

そんな二人だが、決して人を殺すことに快楽を覚えたわけではない。仕事のため——生きるため——の力の糧としてそう考えている。殺し屋、なんて他人の命を強奪する物騒で身勝手な仕事だと思いかもしれない。だが、世界はそうやって回っていたのだ。その裏の世界を知ったにすぎないのだ。権力のために殺しを依頼する人間、金にモノを言わせて敵対する相手を殺すために依頼する人間。世界は広い。探せばそんな人間はいくらでもいる。

「ああ？ 招待状のない人間は入れないってことぐらい察してくれないかなあ？」

門番の片割れがあざとく笑う様に吐く。

門番の磨いていないであろう歯、口内から漂う腐臭が鼻に付いてディエナは嫌そうに顔を引いて表情を強張らせる。

「分かったら帰りな。殺されなくなったらなあ！ この土地じゃあここのボスが全てだ。そしてボスから俺達は面倒な人間を排除し

て良いとの指示を受けてる。つまり、ここで帰らなきゃ死ぬってこと。分かるよなあ？ ほれ、とっとと帰りな」

と、門番の片割れが野良犬を追い払うかのように手の甲を振って南條達を下がらせようとする。

——愚考だ、と、思ったかもしれない。こいつらは何も分かっていない、と南條は嘆息した。

「いやいやいや、そんなあっさり身を引くなら俺達はここに来ないってのよ」

南條は凜とした態度で反抗を示す。後頭部を片手で掻いて一瞬だけ瞼を下ろす。そして、次にその目が開かれた時には、

「つか、死ぬのはお前等の方だから」

数分の時間が過ぎたかどうかとも怪しい程に素早い行動だったといえる。

南條達二人はあっという間にギャング連中のアジトへと侵入して、任務を終わらせた。

銃器をしまったり、拳を確認する南條とディエナの足元には数個の風穴を開けた死体がゴロゴロと五、六人分程転がっている。これだけの光景を見ると、どれが親玉なのかすら分からなかった。死体になってしまえば誰とて変わりはない。所詮、たんぱく質の塊だ。
脳ニューロンに脳細胞のシナプスとして保存された記憶が消えてしまえばただの人形同然だ。事実、そうだ。だが、南條達はそうは思わない。割り切れはしなかった。

この殺しは自身の糧となる。そう信じている。それに、死体を見ると南條達はあの『ゾンビ』共のことを思い出してしまい、ついつい、そうならなくて良かった、と思ってしまう。殺し、殺されの世界で、死んでなおゾンビとして生きるよりは、こうして死体になったほうが良いよ思える。思えた。

それは『きつと今後U機関が世界に向けてバケモノ共を放つだろう』という予測の表れだった。

あれから、南條達の近辺で何かが起きたりはしなかった。バケモノも怪獣も目にはいない。あの時のことが夢だったかの様に思えてくるくらいだ。

だが、それは有り得ないのだ。U機関程の連中が脱走者をみすみす逃がすはずがない。

クロウリー勢もあの拉致の一件からU機関についての情報を仕入れだしている。勿論、ろくな情報は集まらないが、兄弟な権力がある、ということだけは明らかにになった。

それ程の連中が行動を起こさないはずはないのだ。

「ん？」

ギャングの親玉を倒し、依頼主からのついでの依頼（何かを取って来いとの適当な依頼）のために部屋を漁っていた南條は気になる物を見つけて小さな呻き声を上げた。

「どしたの？」

と、南條の様子に気付いてディエナも南條の下へと来て南條が手に取ったソレに目をやる。

「……それって、」

「ああ、」

南條の右手に持たれたのは一枚の写真だった。男が三人並んで写るその写真。そこに、見知った顔が写っていたのだ。いや、顔、もだが、姿。

（これは一体……？）

南條はその写真を見て思わず息を呑んだ。敵はたった今始末した。なのに、敵に睨まれているかの様な緊張感が死体と、二人のいるこの部屋に張り詰めた。

南條は、その――銀色のスーツに赤い髪を持つ若い男が写った――写真ポケットに捻じ込み、

「帰るぞ」

と、ディエナを促してその場を二人で後にした。

4. 家族—13（前書き）

・南條来人、ディエナと共にU機関の情報を田舎町で発見。

4. 家族―13

ギャングのアジトを出て、二人は再び四駆へと戻る。

報酬は勝手にクロウリーの下へと行くので依頼主と会う必要はないのだ。

キーを差込、エンジンを掛けるとより一層静かになったこの田舎町にけたたましい程の排気音が鳴り響いた。その音は、仕事後のせいか少し心地よい様な気がした。

「とりあえず、帰るか」

「そうね帰ってから考えてみましょう。連中の情報なんてそうそう手に入らないとは思うけど」

対照的に、二人の本心は決して明るくなりはしなかった。遠くにあるように感じたU機関の存在が、より身近になった様な気がして、心を浮つかせることなんて出来やしなかったのだ。

10

「こいつは……、あの時の、か」

帰還した南條達にあの写真を見せられたクロウリーは眉を潜め、嘆息する様にそう吐いた。

「やっぱりそうよね」

「ああ」

「こいつとあのギャング達には繋がりがあった……？」

訝る南條だが、考えは今一纏まらない。なにより、情報が少なす

ぎる。写真に写る人物も銀色のスーツの男しか知らないし、南條達が殺したギャングについての情報も少なすぎる。どうにも、判断できない程だ。

「……、つと、そうだ、言い忘れたことが、」

三人で沈黙を作り、それぞれ考えをまとめようとしていた時だった。不意にクロウリーが声を上げた。

南條達はソレに気付いて首を傾げる。

と、クロウリーは写真に写る銀色のスーツのをその岩の様な指で指差して、

「こいつの名前がサード。あの順位保持者の三番目だ。……、それしか分からないが」

申し訳ない、といった感じでそう言葉を置く様に吐いた。

順位保持者。U機関の幹部格である選ばれた——特殊な——人間達。それぞれがネメシスによる——南條の様な——肉体強化を受け、それぞれが今までの歴史の裏を暗躍して歴史をその手で動かしてきた、そんな特殊で強力な存在だ。彼らはその強さの順に名前が割り振られ、強い順から、ファースト、セカンド、サード、と割り振られる。そして、その三人を纏める役職として、その三人よりも強力な力を持った人間が——エースと名乗り、最強を謳う。

「こいつは……、サードだったのか」

冷たい溜息を床に落すかの様に、南條は小さく吐いた。

南條はこのサードに襲われ、セカンドとも接触している。が、セカンドと直接の対決はしていない。

もしあの時、肉屋^{ブッチャー}なんかではなく、セカンドが直接襲い掛かってきていたとしてら、と考えると思わず背筋を凍りつかせてしまった。（あの時、セカンドと対峙してたら……、間違いなくディエナ達と合流する前に俺は死んでた……だろうな）

考えると、ドライアイスの冷氣に包まれたかのような寒さが身を震わせる程だった。

「こいつがサード、だとしたら、ファーストはそれより強い、って

言うのね。あの施設からの脱出の時のこと思い出すとゾツとするわ」
「そうだな。運が良かった、としか言えない。来人がいなきゃまず無理だったな！」

「いえいえ……、」

ともかく、とクロウリーが一度向きが変わった話を咳払いと一緒に戻して、

「こいつの写真はあのU機関の情報だ。あのギャング共……依頼主にも、ちーつとばかし話を聞きにいかなきゃならんだろうなあ」

クロウリーのその言葉に南條、ディエナも力強く頷いて返す。

「そうね」

「ああ」

「生憎だが、私は仕事が忙しい。だから、ディエナに來人、君達にこの件は一任する、もし何か情報が欲しかったらベンの所に行ってくれ。情報を渡すよう言っておく。頑張れよ」

「うん」

「はい！」

「ベン？ いる？」

ディエナは少し大きな声を出しながら古めかしい木製の、木目が綺麗な扉をノックした。

クロウリー邸の隅、木製扉の先、そこには『ベン・アスラエル』という名のクロウリーの部下の一室がある。

ベンベントゴンはクロウリーの仲間達の中でもずば抜けたクラックスキルを持つハッカーだ。彼の技術は米国防総省のファイヤーウォールをも突破する、と言われる程の腕前であり、現在集めているU機関の情報もそのほとんどが彼からクロウリーへとリークされたものだ。

それ程に技術スキルを持ったベンは、クロウリーによって接触を限定されている。だから、南條達とは言えどクロウリーが話しを通してお

かないといけないのだ。

「いないっばいな」

暫くしてもノックと呼びかけに対する返答がないものだから、南條は「面倒だな」といわんばかりにそう吐いた。

と、その時だった。二人の目の前の木製の扉は二人を迎え入れるかの様に軋む音をたてながら開かれた。そしてそこに出来た僅かな隙間から白い眼光が覗いてきた。

4. 家族—14（前書き）

- ・南條来人、ディエナと共にベンと接触へ。

4. 家族—14

徐々に開かれる扉の隙間から覗くは三〇代程の年齢の男だった。

しばらく外に出ていません、と言い放つかの様な風貌は少しだけ不潔だと思ってしまう。長く伸びすぎたくすんだ金髪は後ろで纏められているが、切った方が良い、と素直に思える。視力が悪いのか掛けている丸眼鏡は右側のレンズの隅にヒビが入っていて、思わず新しいモノを買い換えて与えてやりたくもなる。

「お嬢様……、それに、来人君。よく来たね」

やっと、全開になった扉から現れた中年の男、ベンは笑っているのかどうかも良く分からない笑顔らしき何かを微かに浮かべてそう言って二人を迎えた。

「いるならいるで早く返事して頂戴。帰るところだったわ」

ツンとした態度でディエナは言って、それより、と本題を持ち出す。

「パパから聞いてると思うけど、U機関についての情報が欲しいの。あるだけ全部頂戴」

隣の南條も頷き、お願いします、と少しだけ頭を下げて頼む。

と、ベンは「とりあえず入りなさいな。誰かに情報が漏れたらマズイんだよ。こんな廊下で口頭での説明は余りよろしくないと言える」と、二人をその部屋の中へと招き入れた。

二人が足を踏み入れたベンの部屋——いや、部屋と比喻するよりかは秘密基地、と言ってしまった方が良い。灯りはほとんどなく、複数を結合して巨大なモニターにしたそのモニターの灯りだけが部屋を照らしていると言っても過言ではない。

「電気つけなさいよ!」

「明るいのはどうも苦手でね……」

ディエナの言葉に拒むベンだったが、ディエナが無理矢理に電気

を付けて部屋は明るくなった。急に明るくなったものだからか、ベンは目を細めて嫌そうに口を閉ざす。

「で、情報はどうなってるんだ？」

が、南條の何の意図も持たない率直な問い掛けでその口は開かざるを得なくなった。

一度溜息を吐き出して、ベンは滅多に喋らないせいで大きな声が出せず、ボソボソと呟く様に喋りだした。

「正直、U機関の情報は少ないよ。諜報部員達も頑張ってるみたいだけど、元々日本でも極少数の人間しか知らない様な情報、組織だ。ネット上にも情報なんて一掴みもなかったよ。僕が言うんだ。間違いない。だけど……、」

「だけど？」

途中で言葉を止めたベんにディエナは首を傾げて疑問を示す。

と、ベンは一度呆れた様な溜息を吐き出して、

「やっぱり、一掴みはあったんだよ。目撃証言なり、歴史なり、がね。ネットの普及はいくらU機関でも止められなかったようだね」

と、そこまで言ったところでベンは椅子に腰掛け、パソコンのキーボードを数回タッチして数個のウィンドウをモニターに表示させる。そこには、幾つかの画像データと、大量のテキストデータが表示されている。

「見てくれ。自衛隊のトップ、それどころか首脳でさえ限られた情報しか知りえないU機関の情報をこれだけ見付ける事が出来た」

「すげえ、」

「凄いわね……」

南條達二人は素直にベンの技術スキルに関心して吐息を漏らした。二人は情報調査をする人間ではないが、U機関の情報がろくにないことを知っている。だから、だからこそ、ベンをスゴイと心から思った。

「で。これだけの情報……、これを簡単に纏めると、」

そう言って、ベンは適当にキーボードを叩いてエンターキーを押す。すると、数個開いていたウィンドウはあっという間に減り、た

った一つしか表示されなくなった。あれだけあったデータを、纏めたのだ。同じ内容の物を一括りにして、同じ画像データを一つにした。そうして残った情報が、たった一ウィンドウだったのだ。

「大分少なくなったわね」

呆れた様に眉を潜めて言うディエナをベンは「まあまあ」と諭して、続ける。

「簡単に言うただね、このデータで分かる事は――バケモノ達が、少なくとも第一次世界大戦で使われていた、と言うことだね」

果てしなく尊い、と言っても過言ではない情報を呼吸するかの如く簡単に吐き出してみせるベン。

第一次世界大戦からバケモノ――つまり、あのゾンビ達やRZ01の様な怪獣達が戦争、つまりは歴史を動かしてきたのだという、驚愕の真実だ。こんな事、もし世間に公表されでもしたら――、

「まあ、誰もこんな情報信じないけどね。バケモノなりゾンビなりは映画やファンタジーなモノだって世間は認識しているからね。君達みたいに現物を見ないと信じられないだろうね」

現状は、ベンの口から放たれた。言葉そのままだ。どんなに大きな情報が外に漏れようが、民間人は決して自身がそんな特別な事に関わるはずはない、と思い込み、その情報を嘘や虚偽、都市伝説として記憶の隅においてしまうのだ。

「……超重要な情報だけどさ、」

南條は呆れたかの様に言って、

「今回の事には特に関わりがないよな」

と、進展しない現状に溜息を吐く。

そうね、とディエナは同意の相槌を打ってベンと向かい合い、

「その情報についてはまた今度聞いわ。今は今回の私達の仕事の依頼主である『イクイリブリウム』っていうギャング連中と今回の目標だった『オーダー』ってギャング連中について調べて頂戴。連中のどちらか、もしくは両方がU機関との関わりがあるかも知れないの」

ディエナはそう言って、あの写真をベンへと投げ渡す。

4. 家族—15（前書き）

- ・南條来人、ディエナと共に情報収集。

4. 家族—15

ベンはその写真を受け取り、暫く睨む様に見つめた後、

「こいつは、サードだね」

と、吐き出した。

「そうよ。こいつは今言った『オーダー』のアジトにあったのよ」
「なるほど……」

ディエナが言うと、ベンは訝るような表情でそう呟いた。

ともかく、この場では『イクイリブリウム』と『オーダー』の調査をベンに約束して、二人はさっそく行動に移ることにした。

11

「イクイリブリウム……『感情』ね」

「そうだな。オーダーは『秩序』だろ？ 何か意味があんのかね？
感情が秩序を乱す……なんて設定の映画があった気がするけど」

「映画は流石に関係ないでしょ……。でも、そんな変な名前付けた
って事は何かある様な気がしないでもないわね」

「……そうだな」

と、二人が小声で会話しながら歩くのは『イクイリブリウム』の
アジトだった。

話は二人が思うよりも早く、簡単に進んだのだ。

依頼主と実行者が会うことに依存はないのだろう。今回の件の事
について冒頭だけだが喋ると、簡単にボスと会うことが出来た。今

はその、ボス、の下へと部下に案内されて向かっている所だ。一応、銃器等の武器は取上げられている。

イクイリブリウムのアジトはオーダーの物とは対照的に都会の中にあり、その形も高級マンシヨンの概観、と豪華なモノとなっていた。

見た目こそマンションだが、その中はその一つの家、の様だった。

しばらく豪華過ぎる廊下を過ぎ、幾つもの階段を上って、エレベーターに乗り込むと、やっと、

「ここです。ボスがお待ちです。我々は外で待機しておきます」

と、二人を導いてきたイクイリブリウムの人間は扉の脇に避けて二人に道を開ける。

「ありがとさん」と南條は適当な礼を言っただけで前に出る。そのまま一息つく間も空けずに目の前の扉をノックして、「失礼します」と、そのまま扉を思いつき開ける。

そうして見えてきたのは如何にもな書斎だ。

部屋は広く、並ぶ本棚にボスが座るデスクがあればバスケットボールでもできそうである。

部屋の中央よりやや窓際には、デスクがある。横に異様に長く、漆でも塗られているのかやたらと表面が光を反射していた。

そのデスクに肘を付き、退屈そうにしている老人がいた。初老を迎えたばかりの様だ、と容姿からは伺えるが、その容姿以上の貫禄がこの部屋、そして、彼から、滲み出ている。まさに『本物』の威圧感に南條でさえも思わず息を呑んでしまった。隣のディエナも同様である。実際、クロウリーがこれ以上の物を持っているのだが、それには家族だから気付けないディエナだった。

「よく来てくれたな。聞きたいことがあるんだって？」

そういうイクイリブリウムのボス。良く見れば、アジア人種……日本人だ。道理で日本語が通じているわけだ、と南條はホッとした。余談だが、この三ヶ月の間で南條の英語技術は全くとって良い程に上がっていない。

「はい……、今回の依頼で俺達はオーダーのアジトを襲撃しました。そして、ボスを倒した。そこで、とあるモノを見つけました。それが……、」

と、南條が率先して話しだし、あの写真の話とU機関の話をしようとした時、その瞬間、

「U機関との繋がり……だろう？」

と、南條の声に被せてボスはニヤリと不気味に笑み、嘲笑うかの様に吐き出した。

「な！？　なんでU機関の事を……！？」

ディエナも南條もボスのその言葉には素直に驚いた。まさか、オーダーだけでなくイクイリブリウムまでもがU機関と関わっていたなんて。と。勿論、彼らが南條達と同様にU機関を敵対視している可能性だってある。だが、その逆もある。

南條とディエナはすぐに周りを警戒する。

（まさか……ハメられたか……ッ！？）

南條達は武器を取上げられている。もしその状態で、U機関の連中にでも囲まれたら厄介だ。

と、南條達が冷や汗を垂らして張り詰めた空気の中で静かに力を溜めていると、

「ふ、ハハハハハハハ！　安心したまえよ諸君。私はU機関の間ではない」

と、まるで南條達の心中を探ったかの様な答えがボスの口から吐き出された。それはからかう様な口調だったが、どこか楽しげにも聞こえた。この状況を楽しんでいる、というよりは、無駄に警戒する南條達を見て腹を抱えて笑う、という印象を受けた。

「どういう事なんだ……？」

僅かに警戒を解いて——だが一応以上に警戒はしたまま——南條は訝しげに問うた。

すると、ボスはニタニタとした作り物の様な不気味な笑みを口元に貼り付けたまま、

4. 家族—16（前書き）

・南條来人、ディエナと共にイクイリブリウムのボスと対面。

4. 家族—16

「U機関なんて日本の機関がアメリカの端にアジトを持つ様なギャング共に関わりを持つ理由は何だ？ 簡単だ、勢力を伸ばす為だ。もともと、U機関の様な様々な裏の組織ってのは各国が隠し持っていたのだよ。その力を遥か昔、第一次世界大戦でぶつけ合ったのだ。勿論、そんな事実はなかった事にされているがな。……そうして、最強の組織が一つだけ選ばれた。それが、U機関だ。第一次世界大戦の『表向き』の結果とは関係なく、その『裏の戦い』は日本のU機関が制した。それからU機関はその勝利を利用して『様々な情報や物品を』世界から優先的に得てきた。詳細は知らないが、かなりモノを手に入れたりしていたらしい。……だが、ここ近年ではU機関の力は弱まってしまっているらしい」

イクイリブリウムのボスの口からダラダラと制限なく流れ出る驚愕の真実。勿論、今日この場で初めて顔合わせした人間の言葉をそう易々と信じるようなことは南條達二人はしない。

だが、『第一次世界大戦であのバケモノ共が使われていた』という話はU機関の連中からも聞いた事で一致していて、根拠のない話ではあるが、話に僅かながらの信憑性を見出した。

勿論、それでも疑いは決して晴れず、南條達は話を聞きつつ、相変わらず回りを警戒していた。

「……全く信じるに値しない話よね」

怪訝そうに眉を潜め、静かな声色でディエナは吐く。勿論、言葉でそうは言っても、ディエナはU機関に拉致された身であり、その話が現実で起きていても全く可笑しくはないと思えるのだが。

「そうだろうな。私もそう思うよ。それに、今私が話したのも私達が膨大な時間を掛けて調べてきた情報に過ぎない。それが真実なのか虚偽なのかは知りえる限りの情報と自身の経験で判断するしか今

の所はないのだしな」

フン、と鼻で息まくように笑ってボスは何故か場にいそぐわない得意げな口調でそう言う。まるで子どもをからかうかの様な、そんな楽しそうな笑みを浮かべて。ボスくらいの年齢の人間が見れば、南條達なんて子どもにしか見えないのだろう。少しばかりだが『舐められている』かの様に思えた。

南條達二人が怪訝そうに眉を潜めているのを確認するかの様にボスは二人を一瞥し、意味不明な笑みを僅かに浮かべたボスは、

「まあ、結局何が言いたかったか、と言うとな、」一度場を繋ぐような咳払いをして、「私達『感情』^{イクイリプリウム}は、ギャングなんかではなく、U機関やその他国家の裏の組織に対抗するために情報を集めるNP Oだ。言っても、国連にその名はないがな」

「……つまり、感情は俺達と同じ目的を持った団体……、って事なのか……？」

南條が首を傾げると、ボスは不意に真剣な、鋭利な顔立ちを表情に貼り付けて、一度しっかりと、深々と頷き、

「そうだ。我々が今回君達に仕事を依頼したのもそこに理由がある。私達はU機関の『実験的拉致』の情報を見つけた。それが、君達が拉致されたアレだ。そしてその拉致を追えばなんと、君達が逃げ出すことに成功したという噂を耳にした。だから、私は、感情^{イクイリプリウム}はなんとしても君達と接触したかったのだ。過程は省略しよう。君達に秩序^{オーダー}の連中の依頼を出したのは、この状況を作り出すためにあったのだよ」

「私達が秩序^{オーダー}とU機関の繋がりに気付く、という保障があったの？ それよりもまず、私来人がこの依頼を担当するなんて保障はないわけだけど」

未だ不安は拭えない。ディエナは姑息な弁護士のように相手の言葉の裏づけのない部分を攻めて違和感をあぶりだそうとしている。そんなディエナの隣で南條は「姑みたいな事するなよ……」と呟くがディエナには聞こえていない様だった。

「言うとおりで。ディエナ・トワイライト。言ってることに間違いない。だが、君が思ってる答えが違う。私はとにかく気付いて貰えればよかったんだ。今回が失敗しても何回でも挑戦する。殺さねばならない相手なんていくらでもいるしな」

真剣な表情は一応に保ちつつ、少しだけ場に合わせた落ち着いた顔立ちで得意げにボスは堪える。気付けば、対面してまず感じた『圧倒的な怖さ』がボスからはなくなっていた。気付けば、南條達二人はボスの話に耳を傾け、対等な答えを返して、質問を投げかけていた。

（この人……何かすげえな）

南條はそんなボスに気付いて素直に関心した。きっとこの人は『出来る人間』なんだろう、と率直に思えた。年齢だけ成長して中身が全く成長しない人間がたまにいるが、その逆である歳を取ると共に経験を得て、驚異的な知識と常識を持つ人間もいる。このボスは後者の方だ、と言い切れる。

「……、って事は俺達に用事でもあんだよな？」

主張するかの様に南條は言っ、ボスと『睨みあう』。この感覚は男性特有の物だ。ディエナにそれは分からずディエナは不思議そうに南條とボスへと視線を右往左往させている。

一瞬だけだが、場は全くの無音状態になった気がした。

南條とボス、どちらかが話さなければそのままの状態が永遠に続くかとも思った。

そんな場を切り裂いたのは、言わずもがな問われたボスの方だ。

「そうだ。でなきゃまず接触しようなんて思わないだろう？ まあ、

そんな当然なことは置いておいて、本題だ」

「了解っす」

「うん」

二人が頷くのを何故か嬉しそうに確認したボスは、

「……、君達、クロウリー勢、つまり仲間達クルーと同盟を結んで協力関係を結びたいのだ」

4. 家族—17（前書き）

・南條来人、ディエナと共に感情のボスと同盟へ？

4. 家族—17

「同盟……？」

「U機関の情報を互いに共有しようってことか」

「そうとも」

正直、悪くない話だ、と南條もディエナも思っていた。

イグナイプリウム
感情がU機関と敵対する組織であるならば、それはクロウリー勢
『仲間』と目的は同じ、ということだ。

もし同盟を結び、互いに協力関係になり、情報提供を続ければ相
当な利益になるだろう。

——が、この場で答えは出せない。

南條達がいるのは、南條の組織でもなければディエナの組織でもない。クロウリーの組織なのだ。一度帰り、クロウリーの意見を聞いてから出直す必要があるのだ。

残念だが、と南條は申し訳なさそうに、

「すいませんが……、ウチのボスと相談してみないことには……」

「そうかそうか。ならば出直してくるのだ。結果を楽しみにしておく。部下に話しは通しておく。だからいつでも来てくれ」

「善処します。助かります」

二人はそこで頭を下げ、感謝の意を示してこの場を後にした。

12

「……どうなってやがるってんだよ……」

赤と呼ぶのが億劫になる程の『紅』あかい肩まで伸びた癖毛に、ホス

トの様でヤクザの様にも思える整いつつ、綺麗、だが鋭利な顔立ちの少年は絶句していた。

彼が身に纏う黒いジャケットに黒いカーゴパンツは所々が漆黒に淀んでいる。それは――返り血だった。誰の、ではない。どのゾンビの、だ。

彼が絶句し、立つのは日本の大都市のとある街中だ。

彼の隣には可憐な女性が一人。彼より少しだけ年上に見えるが、立場は逆の様に思えた。そんな雰囲気^{オーラ}が滲み出ている。それは、彼の持つ『突き進む力』が雰囲気^{オーラ}となって可視化しているのかもしれない。

「とりあえず……ついてこい、可憐^{かれん}！」

紅の紙を持つ男は隣に立つ女性を呼び、手を引いて走り出す。

――ゾンビ達の間を縫う様に避けて彼、彼女はこの腐った街を駆け抜ける。

「どこに行くの！？ 刹羅^{せつら}！！」

手を引かれる女――可憐は男に向かって叫ぶ。その叫び声が周りで人間を肉塊へと変えている――貪り喰っている――ゾンビ達の注目を集めてしまうが、駆け抜けている二人には関係なかった。

刹羅、そう呼ばれた男は決して彼女の方には振り返りはせず、ただ、しっかりと行く末を見つめて、

「俺ん家^ちだ。とにかくこの状況を図らなきゃならねエ」

（一体……何が起きてるって言うんだ……？）

二人は生きるためだけにこの腐った街を駆け抜ける。

周りにはゾンビ達に襲われている一般人の姿がかなりの数確認できるが、二人が、いや、誰もが他人に構っている余裕はなかった。だから、いくら心が痛もうとも、自身が生き抜くことだけを確かに確認して、走り抜けるしかなかったのだ。

現在日本は、パンデミックの渦中にあった。

突如としてゾンビやバケモノが出現し、まるでゾンビ映画の世界の様な環境があつという間に出来上がってしまったのだ。

ライフラインはそのほとんどがあつという間に活動を止め、自衛隊等の武力もすぐに無力化された。

が、まだパンデミックは始まったばかりで、生存者も居れば未だに今まで通りの生活が送れている地域もある。――だが、勿論これからの不安は大きい。

進化しすぎたために簡単に止まって復旧できないでいるライフラインに、それに頼りきっていた人民。そしてその人民はライフラインが途切れた事で政府に対しての不満を爆発させる。

とつくの昔に想定できていた事態が、現実の物となったのだ。

腐った政治、つまりは日本が、本当の意味で腐る時がきたのだ。

勿論、この騒動の原因はU機関である。だが、U機関はもともと日本の組織だ。なのに何故、日本を滅ぼす様な行動にでたのか。

簡単だ。この国は、もういらぬ。U機関――カムイ――がそう考えたのだ。

この国に未来はない。南條達があ施設の施設から逃げ出してしまったことによりタイミングも良かったのだ。そうして、この計画されたパンデミックは実行に移されたのだった。

「これはどういふことだ！」

この腐った国の陳腐なボスはやはり人に当たっていた。

電話越しに届けるその声は怒鳴り声をも越えてただの騒音と言っても良かった。

こんな状況になってなお、他人に責任問題を押し付けようとするその心意気はゾンビ連中なんかよりももっと腐っていたと言える。

4. 家族—18（前書き）

・南條来人、ディエナと共に行動中。

だが、返答はない。当たり前といえば当たり前だったかもしれない。

そんな状況を裏付けるかの様に、部屋の扉は開かれた。勿論、その扉を開けたのは人間ではなく——ゾンビ達だった。

「なっ……、くっそおおおおおおおおお！ 死にたくない、死にたくないいいいいいいいい！」

陳腐なボスの陳腐な悲鳴が、陳腐に響いたのだった。

13

南條来人、ディエナ・トワイライトは感情との同盟の話を持ち帰り、クロウリー邸へと戻ってきていたのだった。

迎えたのはディエナの両親であるクロウリー・トワイライトとアヤ・トワイライトだ。

四人はクロウリーの書斎に集まり、ひと時の休息を得る事となる。来客用スペースに、クロウリーとアヤが並んで座り、向かいにディエナと南條が座っている。手元にはアヤが淹れたコーヒーが入ったティーセットが並び、金持ちならではの風景がそこに広がっていた。

南條はコーヒーを一口口に含んでカップをテーブルへと戻す。慣れたものだった。この三ヶ月で南條もこのトワイライト家の一員——家族にまで昇格していたのだ。

「——と、言うわけで感情はこちらとの同盟関係を望んでいるようですよ」

南條が言うと、クロウリーはコーヒーを一気に飲み干して空になったカップをテーブルに叩きつける様に勢い良く——嬉しそうに――

―置いて、万遍の笑顔を浮かべて、

「よし、同盟を結ぼう。仲間が多いに越したことはないからな!」

と、なんとも気楽な答えを返す。その答えが――適当な考えだったとは思いたくはないが、そんな雰囲気があったのは否めない。

「あらあら、お仲間が増えるのですか」

アヤは理由不明な笑みを浮かべておしとやかな声色で嬉しそうに言った。

南條はアヤのそんな姿を見るたび、ディエナにもこんなおしとかさがあればなあ、と頭を抱えて本気で悩んでしまいそうになる。

「じゃあ、明日にでも感情のアジトに向かつて話しをつけてきますよ」
イクリプリウム

「そうか、ディエナも引き続きついて行くように」

「分かってるわよん。来人には私がいらないとね」

「あらあら、仲が良いわねえ」

「……うい」

アヤがクロウリーのカップにコーヒーを補充しているのを視界の隅で確認しながら南條は、

「これでU機関の情報が増えますね。俺の左腕……元に戻す情報も手に入ればいいけど。ハハッ……」

苦笑しながら南條は服と手袋で隠していた左腕を露出させる。そこにはやっぱり、漆黒に染まり、二本の赤く煌く流動し続けるライオンを備える異様な左腕があった。

この左腕はあのネメシスに感染したことによって得たものだ。

こんな危険なもの、放置しては置けない。と考えた南條はU機関との接触も考えていた。

どちらにせよ、U機関はいずれ襲い掛かってくるだろう。だから、『それ』に備えた準備をこちらもおかなければならない。U機関に抵抗し、存在自体が不明であるネメシスのワクチンを得るために。

4. 家族—19（前書き）

・南條来人、感情との同盟を決定、クロウリー邸にて。

4. 家族—19

と、南條が苦笑して左手に視線を落して、隠し切れない悲しみの表情を浮かべた時だった。

目の前に座るクロウリーが、とても申し訳なさそうな、真剣な顔で、しっかりと南條を見つめて、

「……来人。言いにくいんだが……」
珍しく言葉を詰まらせた。

今まで、クロウリーのそんな素振りを見た事ない南條はソレに少しだけ驚き、「何です？」と首を傾げて不思議そうに聞く。クロウリーがこんな表情をするなんてきつと何かすごいことがある。と南條は真剣に思った。

ふと隣へと目をやれば、アヤまでもがそんな表情を浮かべていて思わず不安にまでなってしまう。まるで、合格発表前の受験者の様な気持ちだった。南條の隣に座るディエナも事情は知らないのか、南條に似た不思議そうな顔をしている。

——勿論事は、そんなに小さなスケールの物ではないのだが。
クロウリーは面持ちを上げて、普段より少しだけ弱々しさを感じられる声色で、落ち着けよ、と諭すように、

「現在日本で、『パンデミック』が起きている」

「なッ——!？」

「えっ!？」

クロウリーからのまさかの申告に、南條もディエナも驚きを隠せなかった。

南條もディエナも日本に住んでいた身だ。だから当然、そんな事を聞けば心配になってしまう。いくら、あの国が腐っていたとして

も。

「……そうっすか、」

俯き、南條は明らかに落ち込んでいる素振りを見せた。

当然だ。南條自身、今この環境——トワイライト家の家族になった事——に満足しているし、不満はない。だが、やはり思い出は簡単に消せやしない。

両親とは中々会う機会はなかったし、弟とも関わる機会もそう多くはなかった。だから、正直、家族への愛はそんなにない。だが、優華がいる。友達がいる。日本には、思い出がある。

「来人。正直今の日本は危険だ。だが、どうしても、と言うならば私は止めない。同盟の話はこちらでなんとかするから、行って来ると良い。勿論、ディエナもな」

クロウリーは吐息を吐き出すように、静かに言った。

クロウリーは二人を信用している。ゾンビ達に囲まれようが、バケモノと遭遇しようが今の二人なら切り抜けられると、信じている。だから、クロウリーは二人を日本に送っても良いと考えている。

「どうするの？」

クロウリーの代わりに、とアヤが南條の顔を覗き込んで、問う。落ち込む息子を宥める様な、そんな光景だった。

「……来人……」

自身よりも南條のことが心配なのか、ディエナは隣の南條に心配の眼差しを向けて俯く南條の背中に手を置いてやる。まるで、落ち込む恋人を宥めるかの様に、だ。

南條は三人の家族に見守られる中、——考えを纏める。

（確かに、同盟の話はクロウリーさん達に任せれば絶対に上手いくだろう。だから、俺は日本に行ける……。でも、行ってどうするってんだ？ いまさら優華を探し出して『生きてました』なんて脅かしてみるか？ ……アホか！ 俺には……）

数秒間だったが、とても長く感じる僅かな時間が過ぎて、南條はディエナに「ありがと」と呟いてから、面を上げた。

前を向いた南條の瞳には、決意の表れが燃え盛っていたといえる。それ程しつかりした、力強い面持ちを得ていた。

「クロウリーさん俺、このトワイライト家に迎えられて、とても感謝してます。それに、前に話したとおり、俺はあまり良い家庭環境では育ってないんです。だから、日本に行こうとは思いません。行っても、何もすることがないし、得るものもないかと思ってます」

この状況で何を言っているんだ、とは誰も思わなかった。

南條だって一人間だ。決して、考えの甘すぎる無駄に正義感たっぷりの物語の主人公ではないのだ。嫌いな人間もいれば、個性もある。

「そうか……分かったよ。来人の意見を聞きたかっただけなんだ。君はもう私の仲間であり、家族だ。離れるのは少々心苦しかったんだよ」

ワハハ、と大口開けて豪快に笑いながらそう言うクロウリーに嘘や虚偽はない。

その隣のアヤも、おしとやかで美しい笑みを浮かべ、

「そうですよ。過去のことは私達は知りません。けど、今は分かります。貴方は私達の家族なんですから。バケモノだらけの場所に行かれると不安で胸が押しつぶされますよ」

「……ありがとうございます。二人共」

南條はそんな二人に心からの感謝の意を示した。

深々と頭を下げ、本心を吐露した。

——勿論、アヤが言ったセリフに無理があることはアヤ含めた全員が分かっていることだ。きっといつか、近い未来、南條達一行はきっと、あのバケモノ達の渦中に飛び込むことになる——と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7415y/>

お嬢様と執事様

2011年12月30日06時45分発行